
魔神患者の傷痕

齊藤まいご

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔神患者の傷痕

【Zコード】

N1536W

【作者名】

齊藤まいこ

【あらすじ】

アガイはある日、神話性呪的発声現実化病という病にかかり、人を殺してしまった。そのことをきかつけに、黒服たちに洗脳施設インナー・マスカットへ連れて行かれる。待っていた博士は、アガイの持つ力は戦争を終わらせることができると言明するが、納得するまでもなくアガイは巻き込まれていく。

神話性現実化病

銃弾飛び交う教室で、僕は叫んだ。

みんな死んじまえ。

すると現実はなぜか言葉に従つてその場は血の池地獄になり、死体じゃないのは僕だけになつた。

これはおかしな話だ。理論は現実に従うはずだろう。それと同様で、頭の妄想は直接現実にならないはずだ。でもなつた。僕の馬鹿みたいな命令は拡散して全員に届き、みんな死んでしまった。

誰しもが考えていることが本当になればいいと思ったことがあるに決まつている。しかし、どうもそいつは考え方直したほうがよさそうだ。

なぜつて、気持ち悪いからさ。頭の中のものがそのまま生まれてしまつなんて、イタイなんてものじゃない。根本的に吐き気がする。死ねといった相手が死んでみる。驚いて、なにかが崩壊する音が聞こえるよ。

ねえ、ここは軍隊かい？ もし仮に軍隊だとしても、今が戦争だとしても、死ねと言われて死ぬなんて、狂つている。狂つているだけならない。狂人にだつて居場所は用意されるべきだ。でもね、狂つていて、かつ、終わっているんだ。終わつてしまつたら、終わつてしまふしかない。

嗚咽が漏れる。漏れて漏れて、体が裏返りそうだった。

体内から出てきたらどうどうの物体が血と混じつて、どこかの有名な画家が絵具に欲しがりそうな色合いになつた。

きつとそいつは無邪気に、こりやあ素晴らしい、是非譲つてくれないかい、と尋ねてくるんだ。

そしたらこう返してやる。くそつたれ、全部人間からできているから、自分で作れよ。

涙があふれてくる。

こんな、こんなはずじゃなかつた。

世界を恨んでいた。社会に殺意を抱いていた。学校を破壊したかつた。でも、こんなはずじゃなかつた。

せめて怒りと憎しみがもつと間に挟まつてゐると思つていた。不安と絶望が待ち受けていると予想していた。プロセスが、過程が足りない。一分間の心臓の鼓動を七つか八つ飛ばしている。音が聞こえた。ふうん、ふうん。虫が来たのだろうか。もしかして絶好の場所なのか。

食料、繁殖、さんざん自分たちを殺してきた者どもへの嘲笑。目的はどれだ。虫に目的を問いたい。目的、目的。せめて目的。

かつかつかつかつ。虫の次は人間の足音だ。

こないでくれ。死んだらどうする。もう殺したくない。殺したのか？ みんな銃で撃たれて死んだだけかもしれない。

嘘だ。僕自身が信じていない。そんなに命中率が高かつたら、とつくに戦争は終わつていて。

誰かの話し声がする。おそろしい人間語だ。死体の処理、無線の連絡、僕の遭遇。運命を決める言語のやりとりが行なわれていて。どうにでもしてほしい。早く過去にしてほしい。牢屋に入つて、一生しゃべらず、ただ米を食べたい。体を持ち上げられる感触がする。

反射的に抵抗した。まだ吐きたい。とつくに吐くものなんてなくなつていて、とにかく内臓でもなんでもいいから、いちから育てもいいから、出させてください。

だけど、僕以外が僕のことを考慮してくれるには、愛も交渉もなかつた。

担架に乗せられて外に連れ出される。どうせ医者のところへ行くのだろう。

いやだ。カテゴライズされるのはいやだ。分類と診断、そして断罪。医者と裁判官の世話になるのはいやだ。

白い部屋に入れられた。

病的に白い部屋。ここは病院だつた。病院がすでに病的なのだ。
病氣が治るわけがない。

そう、病院とは病氣を治す場所ではなく、病氣を決定する場所なのだ。誰かがそう言つていた。

天秤で計るように僕を見ている医者の男。青白い肌に禿げた頭、眼鏡をかけている。大きな目玉と出つ張つた腹がカエルを連想させた。

「神話性呪的発声現実化病ですね」カエルがしゃべつた。『げろげろ。はあ？』と律儀に尋ね返した。

「病氣ですよ。あなたは病氣なんですよ」

そうだろうな。あんたらに言わせれば、ジャンケンで給食の余った牛乳を取り合ひのだつて病氣なんだ。運命性牛乳奪取病だ。

「神話性現実化病は最近流行つてゐるんですよ。軍の実験のせいで魔力爆弾があちこちに落とされて、迷惑な話です」

流行り病のせいでの教室のみんなは死んで僕は生き残つた。そういうことかよ。

「生きていることを喜ぶべきでしょうね。概要しか聞かされていませんが、革命者が学校に潜んでいた以上、人間の生存そのものが奇跡です」

本当の奇跡なら、みんな助かつたはずだ。

僕の頬から、つつ、つと涙が流れた。

友人のサラスナは良いやつだつた。良い人代表だつた。いつもにこにこと笑つて、争いを好まず、スポーツが得意だつた。

お調子者のヒラタはいるだけで雰囲気を明るくした。勉強ができないなかつたが、影で努力しているのを知つていた。

ガキ大将的なフフクベは暴力的で、僕は嫌いだつた。でも、彼が仕入れてくる性的な情報は質が高く、ひそかに期待して待つっていた。

クラマサは女性として魅力的で、ふとした優しさに惹かれた。消しゴムを拾つてもらつただけでドキドキした。

全員いなくなつた。過去形の馬鹿野郎。

冷ややかな目でカエルがため息をついた。

「概要しか聞いていないとしましたが、今あなたに対して向けるべき報告は受けていますよ。……いいですか、あなたは『みんな死んじまえ』と呪いをかけたんです。みんなを殺したのは、あなたですよ」

僕は口を開かなかつた。子供が都合の悪いことをやり過ごすように、沈黙した。

「あなたの呪的能力はあの場限りの発現で、現在は失われています。また魔力を得れば復活する可能性はありますが、おそらくこれから先、思うがままに使える機会ないでしょう」

……なにが言いたい？

「変な気は起こさないよう」。それだけです

お大事に、という言葉とともに僕は病院から出た。

太陽にはナチュラルメイクしか施されておらず、鬼畜に肌を焼いてくる。

突き抜ける青空があまりにも爽やかで不快だ。異常気象が噂されなくなつて久しいが、夏が暑くて熱いことはなんら変わらない。

街並みは僕が人殺しになつてもボロボロのままだつた。穴だらけビルの壁、傾いたコンビニエンスストア、ひしゃげたポスト。直つているものは一つもない。

人の更新と街の更新が必ずしも一致するわけではないことに、なんだかがっかりする。

……なんでここは牢屋じゃないんだ。

実のところ理由はわかっている。僕がしでかした出来事は、事件

とは名づけられないからだ。それだけだ。風邪をひいたり、看板に車をぶつけるくらいの交通事故を起こしたりするのと同じだ。すでに僕は悲しみと後悔を忘れて歩き出しているし、医者はカルテを捨ててているかもしれない。いずれも保存しておかなければならぬなんて法律はない。

この世がいかれているのは今に始まつたことじゃなかつた。不思議なのは、いかれていると思える自分だ。たぶん、大半の人々が自覚的に、状況のネジの抜け具合を説明できる。にもかかわらず同時に、慣れっこにもなつていて。正氣の綱を補修し続けたら、補修部分のほうが長く太くなつてしまつたようだつた。

ザ、ザ、ザ。

地面のけずりカスを蹴る効果音。

目の前に現れた黒服の男たちについて、僕はようやく死神が重たい腰を上げたか、と思った。そもそも活躍してもらつてもいいころだ。人間は神様のフリを続けすぎた。本家本元に気張つてもらわなくちゃ、役どころがあやふやになる。

「アサイだな。我々と一緒にきてもらおうつか
アガイだよ、と訂正する。

黒服のひとりが一步前に進み、懐から無造作に、ライターくらいの刃渡りをしたナイフを取り出した。

不安と期待で胸がふくらむ。そんな貧弱な武装でなにができるのか。そんなちっぽけな凶器でとんでもないことをやらかせるのか。「手荒な真似はしない」

行動と言動と心理が一致しないのは今の人類によくあることだ。でもさすがにきょとんとした。目が演奏記号のフェルマータみたいになつた。ナイフは「手荒」か「調理」の象徴ではなかつたか。食材は人間以外には見当たらない。

黒服がナイフを手首に当てた。とつとに、やめろ、と言つた。
僕の一言なんて、なしのつぶて。

摩擦が血液のしぶきを呼んだ。天然リストカッターを僕は初めて

見た。

どぼどぼと赤で染まる地面にフリッシュユーバックを起こし、腹から喉にかけて躍動がずんづくる。

暗い祭りがどこどこと太鼓を叩いて、一生懸命吐き氣を催そうと頑張った。空っぽだったはずだが、胃液かなにかをちょっと落とした。

血液は足元まで迫つてから、不意に挨拶するようじぴょじんじヤンプした。僕が驚いていると川に戻ってきた鮭みたいにじんじん跳ねて、僕を取り囲んだ。

なんだこれ。

「血の形をした使い魔だ。悪魔動物の一種だよ。きみが疲れていると思ってね。そいつが運んでくれる」

ついいていくとは言つていない。

「そうか。言い方が悪かったな。頼んでいるわけではないのだ。きみは我々と一緒にくることが決定されている」

どこへ？

あきらかに致死量を超えた血が流れていだが、黒服は汗もかいていなかつた。たぶん皮膚が鉄でできている。血液悪魔は増大し、僕の爪先から腰あたりまでを覆つた。ぐらんと揺らつく。

どこへ？ もう一度聞いた。

黒服の表情が変化する。無から有へ。筋肉が形作る皮肉と寂しさ。

「洗脳施設イージー・マスカットだ」

暴虐老人

なんとか逃げられないものかと体を動かしてみたが、腕まで悪魔が取り付いて自動操縦状態だった。

残念ながら死神ではなかつた黒服たちは僕を四輪自動車に詰め込み、イージー・マスカットとやらに運び始めた。まるで荷物扱いだ。トランクに押し込められなかつただけでも憎悪を抑えるべきなかもしれない。

幸いにも首は稼動できたので、移動中僕はずつと外の景色を見ていた。むなし木々と歩行者、屋根を失つた家、活躍するジャンクフード・ショップ。幼いころ、こんにちは、と挨拶すると、店員さんがにこっと笑つて応えてくれたつけ。ああ、おにぎりが食べたいな、と切実に思った。

どかん、と大きな音がした。振動が伝わつてくる。魔力爆弾がまたどこかに落とされたのだろう。

本当に魔力爆弾が落とされたところなんて見物できた試しはない。だから「どこか」なのだ。「誰か」とか、「どこか」とか、そういうもので世界はできている。

黒服を眺めて、死ね、と言つてみた。
しーん。

静けさが身に触れる。気温が一六度くらいまで低下したようだつた。僕の人を傷つける言葉は彼らの強さに助けられて、ちょっとばかり空氣を実感するだけの効果で済んだ。

「きみの呪的発声は効力を持ち得ない。少なくとも今は。よほどの偶然が起きない限り」

回りくどい語り口で黒服のひとりが言つた。声は同じだつたし、手首は隠れているし、さきほどの黒服と同じなのだろうか。僕は黒服が何人いるかも把握していなかつた。いち、に、さん、たくさんだ。

偶然つて？

今日の僕は質問ばかりしている気がした。もしかしていつもかもしれない。あまり自分のことを振り返らないものだから、よくわからない。

「魔力の波長がぴたりと合つ爆弾が落とされれば、あるいはな。だが確率は低い。現在確認されている魔力パターンは二〇万五七八だ。爆発音を聞くたび二〇万五七八分の一に祈るのは得策ではない」

親切に教えてくれて、どうもありがとう。

一日ぶりにお礼を述べて、僕は眠つた。一日前にお礼を言つたサラスナは僕が殺した。ちくしょつ。

起こされると夕方になつっていた。

到着先は堅牢でいぢいぢ物々しい、ガトリングガンみたいな柵に囲まれた四角い建物だつた。灰色の豆腐と説明されれば次からこの建物が思い出せるだろう。入り口はズボンのファスナーに似ていた。もう「きて」とも「こい」とも言われず、血に乗つたまま中に案内される。介護されているみたいだ。

内部はきれいで、淡めのオレンジと緑を基調としたデザインだつた。掃除用具でホッケーをしたらさぞ楽しいだろうなあ、と好感を抱く。

多くの人々が往来していて、虚ろな瞳をした者から輝かしく未来を発散している者まで様々だつた。そいつらは嫌いになつた。僕らしい人はいなかつたから。僕は僕の不在に敏感なのだ。

黒服が受付の女性と会話している。女は茶髪で巨乳でデブだつた。パイをぶつけたくなる顔をしている。マニユアルドおりに攻めれば陥落できそうだ。まず気持ちのよい挨拶をする。僕は挨拶が苦手だからこの時点で困難だ。次に一日三つ以上ほめる。そんな愚かな行為はやる前に痙攣を起こしてしまう。最後に接吻を可能な限り早め

にかます。唇が腐るだろうが彼女はこれでモノにできる。よつするに僕は頼まれても彼女と付き合いたくはなかつた。

「博士は地下にいるようだ」

黒服が黒服に伝えている。ひとり云々ゲームのよつで面白い。地下に向かうエレベーターは、黒服と僕と血できゅうきゅう詰めになつた。いい加減この使い魔をどかしてもらいたくもあつたが、自分で自分を動かす感覚を忘れているよつな氣がして怖かつたので、訴えるのはやめておいた。

みんな儀礼的無関心を發揮して静かだつた。階数が表示される電子板をじつと眺めている。「ほん」と誰かが咳をした。

チン、と殴りたくなる音がしてエレベーターは地下四階に止まつた。

地下らしくないまぶしい廊下が続いている。滑稽なほど蛍光灯が並んでいた。黒服と血が行進し、カツコツペッチャと響く。途中、警報機の赤いボタンが「強く押す」と書かれた姿を晒していたので、僕は久しづぶりに腕を上げようとした。がつちり固定されているのがわかつた。

やがてたどり着いた世界の果て、「第一絶対研究室」とプレートが掲げられた黄色い扉は、僕らを歓迎するよつに自動で開いた。と思つたら入る前に閉じた。センサーが不具合を起こしている。もう一度開いた隙に黒服が体を滑り込ませて閉じるのを阻止した。

部屋の中は書類と観葉植物にあふれて溺れそつた。泳ぐように紙と葉を搔き分けて黒服列車が通過する。線路はどこまでもは続かず、あつさり終点まで導かれた。

「博士、例の者を連れてきました」

博士と呼ばれた人物は期待どおりの老人で、刻まれたしわにいくつコインを挟めるかを競うゲームで遊べそうだつた。丸い眼鏡は知性を司る小道具に見える。腰は曲がつていなが、脚が悪いのか人を叩くのに便利なのか頑丈そうな杖をついていた。ふるふるする指先で僕を差し、目を凝らしてかろうじて確認できるくらいに唇の端

を歪ませた。

「きみがアライくん、か。待ち望んでいたよ。さあ、きみとわたしの関係をスタートさせよう。まずは座つて体を休めてくれたまえ」アガイだよ、と訂正する。あと、なんだか気持ち悪いおじいさんだな、と文句を言った。

「血液悪魔が邪魔だね」

博士の言葉に黒服がうなずき、血の使い魔が僕からはがれる。時間巻き戻るように手首へ帰還した。

肩をぐるりと回してみる。特に問題はなかった。むしろ調子がいい。血液悪魔健康法なんてメディアで特集されていただろうか。「さて、さて。まずは確かめたいことがある。口を開けてくれないか

いやだ。

五分で終わる歯の検査を口を開けたくないという理由で九時間がけたこの僕が、そんな言葉に大人しく従う道理はなかった。

ところが、いやだ、の「や」と「だ」の間くらいで、僕の口には杖がねじ込まれていた。

ほひつ！ 僕はスローモーションで再生してほしい声をあげた。すさまじい勢いがあつたのに喉まで貫通していないのが不思議で、杖は僕の口を開ける目的を遂げるのにちょうどよくはまっていた。

「はい、じつとしていて」

じたばたしようとするのを黒服に押さえつけられ、じつとさせられた僕は、唾液がぼたぼたとこぼれる労力に意識を集中した。じわじわ、ぼた、ぼた。人間の七割は水分でできているらしいのに、こんなに失われていいいのだろうか。補給が急務に思えた。もし僕が天上人だったらこの唾液の一滴一滴が地上の恵みに違いない。ヒラタが言っていたよ、雨こそが僕らの真にあがめるべき対象なのだと。確かにあのときは外でマラソンをさせられそうになつていたんだ。中止になつてよかった。五キロも走つたら死んでしまう。走らなくても死んでしまった。

「ふーむ、検査薬はどこへやつたかな」

博士こと杖の魔術師、もしくは暴虐老人が、僕の口に突っ込んだ杖を持ったまま、紙束をどけてなにかを探す。

あが、があ、あぐ。

「あ、これだ」

次の瞬間、僕は口に一枚の紙をぶちこまれ、杖を引き抜かれた。が、べつ、べつ！

すぐさま吐いた。なんで一田にこれほど吐くって動作をしなくちやいけないのか、泣きそうだった。

「おお、素晴らしい。変色具合が完璧だ」

青い紙を拾い上げて暴虐老人が感心したようにうなずく。今このじじいを叩きのめせたら、三時間ほど寿命が縮んでもいい。

「魔力痕がこれほど鮮やかに残っているのであれば、成功確率はもはや一〇〇パーセントとして差し支えない。だが、数の圧倒的不足を解消するにはひたすらに時間が必要だ。魔力爆弾が軍の管轄にあるのが問題だ。まったく、とりあえず使っておけばなんとかなるという短絡的思考が、そもそもその原因であることに気づかないのか」
ぶつぶつとつぶやく暴虐老人。僕は黒服にとにかく水、できれば麦茶かオレンジジュースかスポーツドリンクを持つてくるように頼んで、紙のベッドに倒れこんでいた。

「そうとなれば、さつそく行動しなければならない。きみ、寝ている場合じゃないぞ」

暴虐老人が僕を搔きあつた。年寄りに優しく接してきた僕の過去にさよならを告げて、彼の眼鏡を割りたかった。

しかしそれよりは先に水分が必要だ。口内の小人たちが飢餓に苦しみ、神に祈っていた。祈るとはそういうことなのだ、と唐突に理解した。

「さあ、共に戦争を終わらせようじゃないか」「たわご」とをBGMにしながら、ペットボトルを持ってきた黒服に抱きつく寸前の僕がいた。

果汁三パーセントの、結局どんな味を表現したいのかはつきりしないフルーツジュースを飲みながら、僕はずっと博士のやかましい演説を聞いていなければならなかつた。不眠不休で一〇八時間は働けそうな黒服でさえ、それぞれ腰を下ろしてぼーつとしていた。

「革命者が厄介なのは死ににくいという一点にある。彼らが主に銃を使うのは正しい選択だ。奪われてもたいした痛手ではないのだからね。つまりは分相応をわきまえているとも言えよう。自らの道具で滅びる可能性が低い。肉体の延長としてちょうどいいのだな。まったくそれに比べて我々の軍ときたら、我々の、とつけるのは自戒だがね、軍ときたら、魔力患者を舌触りだけで持ちたがっている。神話性現実化病はやつらなぞに扱える特効薬ではないのに、迷惑な話だ。いやしかしきみの発現が呪的発声でよかつたよ。中には静的思考というのもあつてね。これが極めて行使が困難なんだ。なぜなら思考の形態がまとまりを保つのに集中力などとわけのわからないものを必要とする。これは一般に説かれる集中じゃないよ。焦点を絞つたり、リラックスと呼ばれるものとは違つ。イメージとしては金箔をはりつける感じだ。うーむ、天使が地上に降りる、のほうが近いかな」

口の中のねばつきを清涼感が上塗りしてはひいていく。波が押してはかえすようだ。海に行つたことのない僕はメディアの映像を思い出す。ザザア、ザザア。じゅわじゅわした白い線が脈動を刻む。きつとあれは遠い故郷だ。帰りたくもないのに懐かしさを召還する深き青。ゆりかごから墓場までが内包された潤質なパッケージ。もうカラだよ。

黒服が紙コップ入りのアイスコーヒーをずいと差し出した。いい執事になれる、と言つたら肩をすくめられた。

飲んだらそれは醤油で、白い紙の何百枚かに僕はじぶきを散らし

た。ふざけてやがる。

「そろそろ本題に入らう。きみの魔力は手に入つたばかりに失われた。手に入ったから失われた。まあ諸行無常というやつだ。だが多くの過去とは別の話で、魔力は取り戻せる。最も重要なのは、きみの力を有効に活用できれば、戦争を終わらせることが可能。うむ、それだ。可能性が一〇〇パーセントだ」

まつたく聞いていなかつたよ、じじ、博士。

「じじいと呼んでくれてもかまわん」

「じじいひどい目にあえ。

死ねとは言わないことにした。僕はさつきより三時間ほど大人になりつつあつたし、今も一瞬のことにして生命持続記録を伸ばしているし、そもそも僕が死ねと言つたばかりにみんなが死んでしまつたとしたら反省すべきなのは僕だ。一番悪いのは、どうせ僕なんだろう?「じじいに協力してくれないか。この老いぼれがくたばる前に人類に滅んでほしくないのだよ」

どうせ世界は終わるのだから、別にいいじゃないか。

「終わるとしてもまだまだ先だ。きみはきみの子供の顔を拝んでから死になさい」

自分の遺伝の結果に面を合わせるなんて、背骨が縮むよ。

「博士、面会が要請されています」

黒服が割り込んできた。

「ああ、約束があつたのを忘れていた。通してくれたまえ」

現れたのは僕より年下の少年少女たちだつた。共通の特徴として挙げられるのが、容姿に恵まれているということだ。醜い奴は嫌いだつたが美形もそれはそれでむかついた。基準を己に置いた中庸信仰を雪だるま式に作ったものだから、おそらく満足できる人物なんて存在しないだろう。

「博士、いよいよ革命者どもを蹴散らす時がきました」

青春じみた障壁を肌に備えた美少年が高らかに宣言する。吹ぐわけもない風を意識するがごとく、赤い長髪をふあわさふあわさせ

た。剃髪機の音を耳元で鳴らしたらどんな顔をするのか、想像するだけでわくわくした。

「時はいつでもきているよ」

はつきりした声がじじいから発せられた。時計の長針と短針が一時で合わさつたような語り口だ。そんな短い台詞で切れるなら、さつきのおしゃべりはなんだたのだろう。

「ただ、人間がすべきなのは時に動かされることではない。時を動かすことなのだ。わからないか諸君。きみらは時に支配されているのだよ」

「まだ私たちの志に反対なのですか？ 今こいつしている間にも、犠牲者は増え続けています」

「革命者は無差別に襲つてこない。犠牲者はすなわち、戦争加担人だ。焦る必要はないよ」

ぎくりと僕は首をひねつた。滑稽な人形が劇を始める準備運動をするように。

興奮した様子で他の奴らが喚きたてる。

「戦争加担人だつて、命ですよ！？ それに敵は革命者だけじゃない。異方者だつて悪魔だつているでしょう」

「博士は賢い人です。わかっていないはずがない。だからこそ父さんもあなたに私たちをまかせたんだ。革命者を放つておくのは危険なのです」

ふう、とじじいはため息をついた。仕草からして、なんだか急に常識人になつたようだった。

「わたしがタケミチの代わりにきみたちの後見をしたのは、革命者を殺すためではない。若さをそのまま野垂れさせては、未来を欲する資格がないと思ったからだ。もちろん、友人への義理もある。……せめてディフェンスに徹してくれはしないか。オフェンスは浪費なのだ」

「博士、私たちは待つのです。父さんが亡くなつて一年待ちました。予見された日は明日だ。もう、待てない」

「それが時間の束縛の最たるものだな。過去を信じすぎるのをやめなさい。予見は予見。従るべき命令とは違う」
僕はあぐいをして、田をこすった。そりこえは、しばらへ眠つていい。

眠るタイミングは一度あつた。病院へ移送されるときと、イージー・マスカットへくるとき。しかし眠つていない。今が二度田な気がした。三度田の正直か？

ふと黒服たちに田をやる。あれ、数が減つているよくな。

「明日、行きます。あなたの許しを得なくとも」

きつぱり言つと、少年少女らは立ち去つた。

「……許すもなにも、自由だ。本来すべての人々がセンチメンタルやら老いやつぶりやらを全開にして、じじいはつぶやいた。年齢というやつはどうしてこいつ、むやみに説得力を附加するのだろ？」迷惑な話だ。

「おお、マガイくん。すまなかつたな、行動を急かしておいてわたしのほうが色々遅れてしまつて」

アガイだよ、と訂正する。そんなに間違えやすい名前かい？

「彼らのことが気になるだろ？ そうさな、説明を省くのはあまりに不親切。戦争を終わらすのは早いに越したことがないが、わたしが少々舌を回したところでもして変わりはないはずだ。うん、では語ろう」

全然、気にならない。語らなくてけつこいつ。

そうした僕の意見は、抜けた下の乳歯みたいにどこか高いところへぶん投げられ、じじいのお遊戯が再開された。

「彼らは洗脳子と呼ばれる子供たち。この洗脳施設イージー・マスカットの設計段階から想定されていた用途の結果だ。まあ、場所が子供の脳を洗つたのではない。あくまで人だ。タケミチという研究者が、イージー・マスカットで対革命者用に作った兵器なのだ。わたしは兵器としては欠陥品だと思つし、まったく人間でしかないという結論は搖るぎないがね。タケミチはとにかく兵器であることに

こだわっていた。革命者への劣等感だよ、彼にあつたのは。人間扱いしなければ人間を超えるとでも信じ込んでいたのかもしだい」

まあ、のあたりから僕は眠った。

黒服にぱちんと頬を叩かれる。眠りを妨げられるのはイラつくが、どうやらじいがしゃべり終えていたのでよしとした。

「退屈か、退屈だったのかね」

落ち込んだ様子のじじいにざまあみると思いつながら、退屈だった宣言をした。

「そうか……」

「博士、明日は近づいています。予見が外れる確率のほうが低い以上、警戒すべきかと」

また黒服が減っている。細胞がふちふちと消滅していっているような錯覚。全である黒服と個である黒服がもちもちとくつついたり離れたりを繰り返しているのか。そんなふうに思えた。たぶん勘違 いだ。

ああ、と僕は聞きたいことを聞かなければ、どうにも僕にとっての事態を進められない妄執に囚われた。なので質問する。

結局、僕になんの用があるわけ。

「行動だよ。きみには行動してもらいたい。どうやら洗脳子と革命者諸々との戦いは、うむ……こういう言い方は、非常にしゃくだが……時間の問題だ。どうやつたって時間の幻想を頼りにしなければ、わたしは計れないで、しかたない。魔力患者の不足も、時間が解決しよう。急ぐ理由は感情的にしかないが、しかし急いでくれたまえ。少なくともわたしが寿命を迎える前には、達成したい」

聞き飛ばしたい。早送り再生がほしい。念じて要点を絞ってくれるようお願いしてみた。

「考えられる戦争の簡潔決着は、魔力患者動員による戦争加担人の全排除だ。きみにはその中心になつてもうつ」

願いつて、通じるものなんだね。これからは色々と願つてみるこ

とにしよう。試しに、今日の出来事は全部夢だつた、と願つた。なにも変わらなかつた。もとから夢で、まだ覚めるには早いのかな。「魔力患者の圧倒的不足は時間が解決するだろ。だが急ごう。はやる気持ちに従つて。急げば短縮可能だとわたしは思つているのでな。患者の数はあと八〇〇〇人ほど足りないが、なに、今すぐきみが八〇〇〇倍強力になる可能性がないわけではない。期待しているよ」

それは期待じゃなくつて、ポイ捨てって言うんだよ。

「博士、異方者たちがやつてきました。革命者もいます」

とうとうひとになつた黒服が報告を述べた。

「予見より一一時間ほど早いな。そんなものだ、しょせん。洗脳子は？」

「我々が抑えていましたが、無理ですね。革命者と同時に」「すまんな、損な役ばかり」

「いえ。それでは」

溶けるように黒服は部屋から出て行つた。残つたのは僕とじじい。紙と観葉植物。静けさ。いや、蟻が歩いていた。一匹でちゅうちょろと這つてゐる。頭と胴体の大きさがほぼ同じで、複数の足をかさしゅばかさしゅば振り上げてゐる。なにより黒い。とても黒い。比較できないほど黒い。光を九九パーセント吸収してそうだ。進んでいるのか登つてゐるのかもわからない道をえんやこらやんやこら、ご苦労様。

「これからきみには精一杯生きてもらう。患者と魔力が揃つまで。革命者や軍に捕まつても死にはしまいが、できれば単独で生存してくれたまえ。特に軍は面倒でかなわない」

別に、死ぬつもりはないけど。

……死ぬつもりはない？ 本当に？

なんでのうのうと生きているんだ、僕は。米も食べず。

「さあ、外へ行つてくれ。絶対共同体がよくやつてくれるよ。絶対共同体？」

「黒服を着た者たちのことだ。わたしは機動力がないからここにいる。イージー・マスカットが失われるとしても、精々半分だ」

言つことを聞くと思っているのか。

「聞かなくてもいい。だがね、わたしは直感を信じているんだよ。きみはそうするだろう、とね。これは希望的観測じゃない。なぜなら、希望していいからね。きみじやなくていいんだ。でもきみはここにいる。事実を眺めていたら、行き着く先はだいたいこのあたりだろうな、とわかるじゃないか。直感はそのショートカットだよ」

よくわからない。わからない。

じじいは、博士は、腕を広げた。不恰好な鳥。まるで人間。空間を切り裂いて異次元の彼方へ飛び立つかのようだ。

「きみはクラスメイトを殺した。理由はわからない。きつかけの殺人……呼び込んだのは状況か、それとも」

うるさい。僕が殺した。僕が殺した、で、十分じゃないか。

「わたしにひとつては十分だ。きつときみは向き合わねばならないだろうね。戦争を終わらせる一助になることを祈るよ」

ぱちん、と博士は手のひらを打ち鳴らした。すると紙はざわざわになつて、洗濯機で攪拌された洗剤が泡へ変化していくように、床の模様に転じた。カラフルなチエス盤へ。観葉植物は「じちや」「じちや」と混ざつて巨大化した。天井に葉がぶつかる。目まぐるしい突然と把握の攻防。部屋はスペースを膨らませ、整理整頓、子供が怒られないくらいまで片付いた良識になつた。

「洗脳施設イージー・マスカットの機能だ。暗示も脳を洗う一端なのでね」

博士はすぐ近くにあつた扉を開け、さあどうぞとばかりに僕をいざなつた。

なぜわざわざ、こんなややこしいことを。

「常に行なわれているのだ。耐性を設定するためにね。どんどん知覚できるようになつてくる。いずれ抗洗脳も体験してみたらいいだろ？」「

廊下は変わらなかつた。変わつていないだけで安心した。

「マダイくん、幸運を」

マガイだよ。あ、間違つた。アガイだよ。

なんとなく急がなければならぬよう強迫観念に襲われて、僕は廊下を走つた。怒る先生がいなくてよかつたよ。ヒラタはいつも怒られていたんだ。

地上は戦場になっていた。空間的障壁はないし、向こうだつて徒歩も車も飛行機も使えるはずだし、どこが戦場になつてもおかしくはないのだけど、市民は守られ慣れているから、お茶の間に届く分にはそれなりにショッキングな絵面だろう。

イージー・マスカットの玄関部分は半壊していた。ガレキと呼ぶに相応しい、ビスケットをぱきっと割つたときに現れるようなごりやごりやとした面が作られたコンクリートの破片が、あちこちに飛び散つている。人気の健康食品にも似ていて、ちょっとうまそうだった。

ちらほらと見かける銃を構えた人たちをいつたん無視して、壁に穿たれた弾痕を観察した。そういう模様だつたかのように穴だらけになつてゐる。アーティスティックな感性を刺激される仕上がりだ。「なぜ邪魔をする！ まだ完全でなくとも、やつらに遅れを取りはしない。やつらだつて、私たちを恐れたから予見よりも早く仕掛けてきた！」

洗脳子が黒服になにかを訴えている。うるさい連中だ。我慢してくれたらキャンディおごるからさ、静かにしていてくれないかな。「おんつ！」と爆発音。耳がきいんとなつた。続いてどどどどどど、うつすら銃声。

見て見ぬフリは限界か。

ようやく直視していた現実から目を逸らして、新しい現実にこんにちはをする。挨拶は苦手だ。でも軽くお辞儀をしてみた。

不思議なもので、死体はなかつた。あつたらすぐに吐ける自信がある。もうパブロフの犬。反射に組み込まれている。今は腹の中、液体ばかりだから、吐きじたえはないだらうな。

一見したところ、頑張っているのは絶対共同体、黒服の男たちのようだつた。洗脳子の前に立ちふさがりながら、内部に入り込みつ

つある襲撃者たちの銃弾を血の使い魔で受け流している。といつても、人に当たりそなうのを防いでいるくらいで、建物は順調に損傷を増やしていた。

地下にいたほうが安全なのではないだらうか。博士はどうにうつもりで僕を送り出したんだ。そして僕はなぜ急いでこんなところにきたんだ。

たぶん、僕の行動にいちいち理由なんてなくて、博士もテキトーなのに違いない。なにせどいつもこいつも、気がついたら生まれてしまっているものしかないんだ。理由はあとでついてくる。

「思ったより数が多い。難しいが、我々が抑えている間に素早く抜け出せ」

いつの間にか背後に来ていた黒服が、耳元で言つた。騒音とかぶさつて聞こえづらかった。静かにしてくれたら、棒つきのキャンディをおこるよ。

と、いきなり銃声が止んだ。パントマイムが始まるような寂しさ。やっぱキャンディなし。そういえば、お金がなかつた。

「洗脳子に告げる。ぼくらは戦闘を求めてはいない。停戦交渉をしつづけにきた」

さんざん弾丸と爆発物をばらまいておいて、いけしゃあしゃあと発言した根性の持ち主は誰かと探す。すぐにノッポの男が目に入つた。ちくわみみたいな体型で、雑草魂溢れる頭髪をしている。田鼻は糸で描いた落書きで、口はふつうなのがもつたいたなかつた。服装は赤いジャケットと黒いズボン。履いている靴が金色のスニーカーだつた。趣味が合うな、と思つた。

「ふざけるな。これほどの攻撃を加えておいて、今さらなことを言つか！」

至極真っ当で拍手を送る相手は、洗脳子の赤い長髪だ。彼がリーダーなのだろう。赤い長髪と赤いジャケットを見比べる。どう考えたって、ジャケットの勝利だつた。赤い長髪は冗談だらう。

「これは異方者の意向だ。ぼくら革命者の行動ではない。異方者は

これからも攻撃を続ける。ただ革命者は、きみたちが戦争に加担しない限り攻撃しない」

どうも面倒な関係だった。父親の甥っ子の親友が叔母さんの娘の彼氏と氣の置けない仲になつていてるらしい。そんな感じの説明を受けたときの面倒さだ。

「私たちは革命者を滅ぼすために生まれた、洗脳子だ！ その使命により、おまえらをすべて殺す！」

洗脳子の宣言。黒服の脇をするりと通り、彼らは駆けた。殺すとか、そんなに簡単に言っちゃいけないんだよ。僕は自分を、年末しか掃除しない棚に上げた。

銃器が火を噴く。お手軽殺人道具は、洗脳子たちを狙い撃ちにした。いじめっこ集中砲火。ところが、当たるはずの弾をティッシュペーパーのようにひらりとかわし、絶対当たる弾はやつぱり当たるもの、仰け反る程度で済んでいた。僕は騙されているような気分になる。防弾チョッキを着ているにしては身軽でスリムで全速力が半端じゃなかつた。

洗脳子と馬鹿でかい銃を手に持つ筋肉質のおばさんが接触した。拳がおばさんの腹にめり込む。田玉を落つことしそうな表情。一撃でダウン。

黒服が僕の手を引っ張った。デートに連れて行かれるにしては強引だ。もちろん、僕は大人しくついて行つた。ここは危険だ。危険は恐れなくちや。逃げなくちや。

ちくわが目の前に立つているのに気づいたとき、思わず首を傾げてしまつた。さつきまで彼とは、猫との心の距離くらい離れていたし、握手やサインをせがまれるようなおぼえもなかつたからだ。

「きみは誰かな。この場において、きみだけがイレギュラーだ」

ちくわがしゃべる。あ、ちくわがしゃべつている。

僕がイレギュラー？

他の人はどうしたのだろうか。僕が地上にきたときには、けっこうシンプルな構図になつていた。洗脳子、黒服、たぶん革命者、た

ぶん異方者。何十人何百人という人がいたはずだった空間にそれだけ。あの受付のデブはどうしたのか。

「ぼくは革命者ガラハロンドル・ナックトイテ。もしやきみはみや
きらつ！」

吹つ飛んだガラハロンドル・ナックトイテは無様に、どべろつと体で壁にスタンプした。吹つ飛ばした黒服の脚はすでに地面を蹴る力を伝えている。僕はぼーっとしていた。長い名前だなあ。

走ると僕はゼーはゼーは息を荒くして、心臓をどくどくさせて、酸素を使って、なんにも考えなくなつた。ずっとこうしていられたら、幸せなのかもしない。幸せだと、後悔、真実、未来、運命、常識、もうなんか色々、についてまったく思い浮かべないことができて、なおかつ普通に生きられたら、幸せなのかもしない。そんな幸せ、くそくらえだ。ありがとう、疲れる僕。くだらなき僕。碎けた壁から外に出ようとすると。しかし黒服が唐突に消失した。ばあんっと床が弾ける。受身を取つた黒服。腕を掴んで投げたガラハロンドル・ナックトイテ。

「くつ」

自由なほうの左手で体を跳ねさせ、ぐるりと逃れようとする黒服に、ガラハロンドル・ナックトイテ、長いからちくわ、長いちくわが、後ろ腰のホルダーに差していく拳銃を抜いて射撃した。情け容赦遊び心のない数撃。ダンダンダン。やめとけつて。まずいつて。僕は狼狽する。死んだらどうする。吐くぞ。

だらだらと流れた血がちくわに刃を向かわせる。血液悪魔が金属的に固くなり、ちくわの首をかつさばこうとした。革命者は平気な顔。剃り残しがないか片目を閉じて鏡の前で確認する様子だつた。悪魔の対応は、窒息だつた。半液体になつてちくわの顔面を覆おうとする。さすがに恐れたのか、ちくわはステップで離れた。

「絶対共同体よ。ぼくはきみらを敵に回したいわけではない。革命者と絶対共同体は敵ではない。しかしきみらはどうも、守ることに忠実すぎる。それが戦いの契機になる」

「言葉を返そう、革命者よ。おまえたちは攻めに忠実だ。我々の要請としては、待つてほしいということなのだが」

「水と油ではない。なのに、相容れないのは」

「立場だよ」

僕はこつそりお暇しようとしたのだけれど、一人の熱い格闘はそれを許してくれなかつた。欲情カツブルより圧倒的に激しくお互いをねじ伏せようとしている。時々とばっちらりをくらうになつて、僕は身動きがうまく取れなかつた。

タイミングを見計らつて、えいやと力を入れる。大縄跳びに挑戦する気持ち。無理無理無理。血液悪魔が三リットルほど頬をかすめていったよ。

まいつた、まいつた。僕はつぶやく。つぶやいただけじゃかき消される。これは誰かに届かせたかつた。
まいつた！ なんて不自由なんだ！

「不自由つて、いやだよね。自由と同じくらっこに、きらっこ」

ひやりと首筋を撫でる指先に、僕は戦慄した。

間違いうのない死のにおい。

僕がクラスメイトに与えた香り。

涙が、つづり、と、あごを経由して星に注がれる。どうしようもなく醜い呪いを口にした。

死にたくない。

勝手だつた。正直だつた。弱かつた。背後にいる知らない人に、どんな見つともない真似をしても命乞いをしたかつた。

「どうして殺すつて、思うの？」

指先が僕の体を這う。胸に、腹に、徐々に下半身に。

ひい、とひきつれた声が出る。

犯される。

がくがく、骨と筋肉と神経が、もともと主導権の薄い意思に、ほ

とんど従わなくなつた。

「震える……怖いの？」

女だ。女が僕に語りかけている。首を絞めるための真綿のような声。優しくて、残酷だった。

顔をつかまれる。ゆっくり両手で僕を包み込んで、あたたかさの波と吐息を寄せていくうちに、潰すのだろう。目が合つた。青い瞳。透き通つて、めまいがしそうだ。

僕は覚悟できぬ死に對して、懺悔した。

「ねえ、ファーストキスってどんな味が、するの？」

彼女の唇が僕の唇に触れて、人生をやり直したいと思った。

フィカソトリア

母親が淹れたコーヒーに、生クリームもどきを足して飲んだ。父親の釣りに付き合つて、一時間ほど無駄な時間を過ごした。

サラスナが僕を小突く。クラマサつてさ、どんなものが好きなのかな？

なにがさ。どんなものって。

たとえば、花の種類とかさ。

アサガオでいいんじゃないか。

なんでおまえが決めるんだよ。

決めてしまつてさ、気持ちを込めてさ、贈つてしまえばいい。きっとみんな贈りものが好きだから。

ゴミを贈られていい気分の奴はいないだろ？

サラスナは笑つた。彼はよく笑つた。中性的な容姿に朗らかさを浮かべていた。

きいてみれば早い。僕は立ち上がりつた。慌ててサラスナが腕を引つ張る。ぐい、ぐい。服が伸びてしまうよ。

本人に言えるくらいなら、おまえに言つたりしない。

ひどいな。僕はクラマサ以下か。

ああ、クラマサ未満だ。当たり前だろ。馬鹿か。

僕を馬鹿にするときだつて笑顔なんだ、こいつは。

フフクベが机にドンつと雑誌を広げた。いきなりだつたので、眉を苛立ちに曲げてフフクベをにらむ。

見ろよ。新作だぜ。この女、やべえと思わねえか。見ろと言われて見ていたら、田が腐つちまうよ。

だけど僕は視線をうつすら寄せていた。深い溝が確認できる。すると触手が天へ昇る魔法の谷間に、理性を殴り散らして吸い込まれたくなる。いや、理性の神官は本能の戦士と結託して、一緒に

鑑賞会をする。眉と鼻までもが噛みついてあわづだ。肌は枕を擬生化させて、溶かした砂糖を振りまいたよう。金色の蛇が腰まで絡みついて、刺激に捧げたくなつた。なぜだろう、唇と瞳は思い出せない。無の筋に辿り着く旅を終える前に、急所が剣を構えそうになるが、ぼすんと拳をフフクべに突き出した。

やべえよ、てめえの無遠慮が。

まあまあ、目くじらを立てるこことはない。

サラスナは素直に楽しんでいるようだつた。ぱらぱらページをめくつて、口笛を吹く。おれはこの人が好きだなあ。

ホントかよ。僕も見て、納得する。本当だらうなあ。だつて、だつてさ……。

真夜中、外の空気は僕を迎えた。コートの保温性と相殺される気温。流星群の予報は期待をあおり、貧弱ゆすりを導いた。どうして星は流れるんだろつ。

質問に答えるのは、影だつた。隣の樹と同じ高さで、僕と同じ太さで、父と同じ声で、友と同じ気安さで、魔法と同じ断言をする。それが死ぬということだから。

あのときだ。僕が死について意識したのは。呪いを獲得したのは。

ジグソーパズルのピースは半分も揃わず、僕は過去の海から陸に上がつた。

茫然自失となつて、唇をなぞる。かくん、どしゃ、がくり、と膝を地面についた。土下座の準備をする格好になつて、魂の欠片をふらつかせた。

ああ、ああああああ、あ。

心臓が痛い。唐辛子を噛み碎いたあの舌のようだつた。坊主が必死で鐘をついている。馬鹿みたいにうるさい。最も祝福すべき騒

音、赤ん坊の泣き声に起こされた母のあやし。大丈夫、大丈夫。あなたは大丈夫。ダメだ。落ち着けない。崖に右手の五本の指だけしがみついる状態で、カウントダウンをされている。指外し妖怪が近づいてきた。小指が外される。いっぽーん。続いて薬指。にほーん。にたりと嘲笑。中指への気配、しかし人差し指。さんぼーん。耐え切れるわけもなく、闇にさらば。

すうつと肩に触れられる。びくりと臆病な動物が反応した。「どう、だつた？」

哀れな表情を作っている。その自覚のまま顔を向けた。

魅殺される青い瞳。触れ殺される白い肌。撫で殺される金の髪。聴き殺される無色の声。

人間の女。
絶望の僕。

「死にたい」

それが最初の希望だつた。

「ダメだよ、死んだら。あなたには責任を取つて、もらわないと責任？ 僕に責任なんかない。僕は無責任だ。

時間を止めていたのは、僕だけか、僕と女だけだったようだ。気がつくと戦闘音は激しさを増している。ちくわことガラハロンドル・ナックトイテと黒服が三メートルほど跳躍して、昼食のサンドウイッチ程度の空中戦を行なつた。腕と腕との交錯。ガラハロンドルはそのものを警棒のようにして、黒服は血液悪魔を有効にするための布石の鞭として使つたようだつた。速度で上回るガラハロンドルと手段で上回る黒服。打ち勝つたのはガラハロンドルだが、勝者は黒服だつた。

頭をひどくぶつ叩かれ、どしゃりと格好悪く地面に落ちた黒服と、鞭を涼やかに受け、着地は見事だが血液をびしゃりと大量に浴びたガラハロンドル。降参のポーズをしたのは後者。

「肺に侵入を許しては、さすがのぼくもお手上げだ」

銃声と悲鳴が聞こえた。洗脳子が追い詰められている。特別な能力がない異方者らしき連中は軒並み昏倒していたが、数で劣るはずの革命者が洗脳子を圧倒していた。

「あと一時間三〇分経てば貴様らなぞ……！」

負け惜しみを少年が言つ。一時間三〇分経つてない以上どうしようもないじゃないか。彼らはやはり子供に思えた。黒服は彼らのそばにもついていたが、守るというよりは無茶を止める役割を担つているように見えた。少なくとも革命者に対し積極的行動はしていない。

「彼らを殺すつもりはない。もちろん、一時間三〇分後には定かじやないが。ぼくらの憶測では、戦争加担人になる確率が極めて高いからな。洗脳子が完成すれば」

ガラハロンドルが肩をすくめる。立ち上がった黒服は、ぱたぱたとじみを払つた。

「我々もきみを殺す意図はない。革命者は先見的だが、不撤回決定は慎重だと理解している」

「そう、それにきみらが味方をしている以上、不利なのはこちらだ。絶対共同体を屈服させる手段は、まだ開発されていない。まあ、それゆえの絶対なのだろうな」

「洗脳子を殺されるわけにはいかない。革命者のカウンターになる。バランスを大事にしなければ、悲劇が訪れる」

もしかして膠着状態になつたのか。誰も動こうとしない。いや、女が僕の頭を遠慮の砂粒もなくぽんぽんとしてきた。不可解にもほどがある。

「あたしこの人をどうにかしたいんだけど、いい？」
「どうにかってなんだ。」

即座に黒服とガラハロンドルが答える。

「ダメだ」

「どういうイレギュラーかの判断が先だな」

僕は意見を出す気力を持つていなかつた。ただ理不尽が通り過ぎ

るのをじっと、留守番する家の中で、淋しさを誤魔化すおもひやを一生懸命に模索する四歳児の心境を再現していた。

女が僕を捉える。しゃがんで田線を合わせ、赤子に諭すように各

乗つた。

「あたしはフィカソトリア・ジョンクピアート。フィカって呼んで、いいよ」

フィカ。

忌まわしき名前をこぼすと、満足げに彼女はうなずいた。

「もつと呼んでよ、もつと」

油を差し忘れて数年間を経たポンコツになつて、僕はぎぞ、ぎつと首を不器用にひねつた。拒否がうまくできない。

「戯れている場合じゃないぞ。その男、どうやら重要な客のようだ」ガラハロンドルがじろりと、黒服と僕を見た。今度は黒服が肩をすくめる。すかした態度が得意な連中だ。

「その女は新顔だな」

「つい最近因子に目覚めたばかりだ。ぼくもよく知らん」

「人材不足らしいな」

「革命の同志であれば、選ばないぞ」

ふと、黒服が動いた。一気に短距離走。右足が小さい一步、左足が大きく前進、右足がとても大きな三歩目。詰まつた間に、なぜか僕は息が止まつた。フィカソトリアを突き飛ばし、あ、と言つ間に僕を抱えて建物を飛び出した。

「待つて、待つて！」

フィカの声が聞こえる。むしゃくしゃするイノセント。

「会いに行くから。また、会おうね！」

一方的な約束に、黒服の肩に当たつた腹が躍動するのを感じた。初めてだつたんだぞ……。

遠くなつていく彼女の姿。

悔しくて、痛ましくて、涙が出てくる。僕は泣き虫だった。知らなかつた。彼女が知る機会を得る要素だつたことに、どうしようも

ないやるせなさがある。快樂と不快のミキサーの中で、徐々に憎悪が満ちた。虚無に地震、全能に雷。価値観や冷静のテーブルをかき乱す。

「あなたの名前を聞き忘れた！ 今度、教えてね！」

初めてだつたんだぞ！

僕は絶叫した。

死体、そして眠る

調子にも高級車にも乗っているカップルから、信号待ちの機会に試練を与える略奪をし、法廷速度を守っているつもりで走っていた。気がつけばもう夜だ。それとも、まだ夜なのか。僕の感覚は鈍くなつていた。

山を登っているのだろうか。建物を見かけなくなり、道路の脇にはひたすら木々草々が続く。人ごみはうんざりするのに、森に癒しを感じるのはなぜなのか。それを考えて僕は森が少し嫌いになつた。こいつらも密集している点では、不快度が変わらない。

暗闇と意識がシンクロし、対向車のヘッドライトが目に入るときにはわずかに揺り戻される。うつらうつらと、脳が休もうとしているのがわかつた。

疲れているのは確かだ。なにより、フイカとの出会いが僕を衰弱させていた。純潔を汚され、精神を暴かれ、再会の呪いをかけられた。なにもかもが最悪直前だった。

ぐつたりしながら、どこに向かつているのか尋ねる。

「魔力患者がいる家だ。我々が接触できている二人がそこにいる」 戦争を終わらせるには、僕を含めてもまだ七九九七人足りないってこと?

「博士は八〇〇〇人ほどと言つただけだ。正確な数がわかっているわけではない。魔力の強さによつてはもっと少なくて済む。博士の計算によれば、現在確認されている最低能力で八〇〇〇人集まれば戦争加担人をすべて消失させることができる。つまり少なくとも八〇〇〇人を超えるはずだ」

確認されていない人たちが最低能力以下でない限りはね。

「そうならないことを祈ろう。ちなみに軍では一七四四人の魔力患者が保護されていると我々は把握している」 協力してもらえばいい。

「世界七不思議の一つは、持つ力と比較してあまりに軍が無能過ぎることだ。説明してわかってもらえるならそういうの利用を画策されるだけだろうな。戦争が終わってその後も考えなくてはならない」

博士もあんたも軍が好きじゃないようだね

「異方者や悪魔がもっと話のできる者たちであれば、軍を倒す手伝いをしたな」

あんただつて悪魔を使つていてる。

「悪魔も色々いる。それにこいつは我々の一部、我々自身ですらあら。……そろそろつくぞ」

一人が住む家にしては上々で、八〇〇〇人を押し込めるには狭い木造一軒家だつた。一言で言つなら悪くない、二言で言つなら、まあ、悪くない。そんな家だ。悪くはないがよくもない。三角の屋根は特徴がなく、山に埋没している。一応周りの植物はある程度刈られていたが、半分一体化しているようなものだつた。

「明かりがついていないな」

黒服の言つとおり、家から光は発せられていない。真つ暗だ。これで人がいるとしたら、ぐつすりお休み中か殺人事件が起こつていれる。もしくは光が苦手な人か。

鍵はかかつていなかつた。やはり殺人事件か。

泥棒のように中に入る。ふうんと蠅が飛んでいる。うつとうしくて払う。どこかへ去つた。と思ったら、戻つてくる。払う。去る。またふうん。ええい、ここに死体があるだらうから、そつちへ行けよ。

黒服はあつさり居間まで進み、電灯のスイッチを入れた。若干の震えを挟んで明かりがつく。

するとそこには、真つ赤な液体に染まつた二つの人間の体があつた。男と女。

あまりに予想通りの事態に、僕はむしろ驚いた。と同時に、吐き気を催さない自分を不思議に思つ。

黒服が死体に近づく。脈を調べようと手を伸ばすと、

「わっ！」

死体だと思っていた人間は飛び起きて、黒服に大声を浴びせた。眉を動かしもせず受け止められて、静寂に抱擁される。

「あれー、びっくりすると思つたんだけどな」

腹を赤くした男がとぼけて言った。

「もっと溜めるべきだったかしら」

頭を赤くした女がテーブルにあつたタオルですでに赤い液体を拭い始めていた。

狂言死体は茶番をなかつたことに対するがごとく、迅速な片づけを遂行した。僕が鬼の軍曹だつたら地球を横断してこいと怒鳴りつけただろう。事件の解決を名探偵なしでしてしまつた。しかし死体がすぐにトリックをばらすというのも、なかなか新しいかもしない。一秒くらい新しい。

「おつと、そちらは三人目のお仲間さんかな。俺はフーリム。よろしく」

雑巾片手に白い歯をしりとり見せて、男が挨拶した。その歯に泥を塗りつけてやりたかった。

「私はミミハウ」

ワインクしてきた女には、左ジャブからのハイキックを決められたら、どれだけ爽快だつたろう。博士の言葉に従つて、この魔力患者どもの中心になるのは、四三度のお湯に体を沈めるのに似ている気がした。早く出たい。第一印象から極悪だつた。

次に黒服は信じられないことを口にする。

「アガリ、きみにはこの二人と一緒にここに住んでもらひつ馬鹿か。そしてアガイだよ。

「すばらしい！ 仲良くやつていこうじゃないか。いや、俺よりミミと仲良くしてもらつては困るけどなー」

「あり、フリーとの友情に田覚められたら、私のほうが困るわ

ははは、うふふ、と笑う元死体もどきに対し、僕はすねを蹴つた。

「いたつ！ なにをするんだボーアイ！？」

「もうドメスティックバイオレンスなの？ そうなの！？」

頼む、喋らないでくれ。大規模な雪崩に巻き込まれてくれ。砂漠でサボテンと同化してくれ。パラシューントなしで飛行機から落ちてくれ。時速一〇〇キロメートル以上出した車に乗つて壁に衝突してくれ。

「うーん、遠回しじゃないか。俺と君の仲だろつ。もつとはつきり言つてくれ」

まあなんというか、本物の死体になつてくれないか。僕は他人に言つた。

「やだ、もう殺し文句だなんて、ちょっと性急ね坊や

ちゃん、と人差し指を額に当てられて、僕は苦笑いした。生まれて初めての苦笑だつた。笑つちやう、苦く、笑つちやう。フィカよりはるかにマジだが、こんなことで初めてを消費して、横隔膜が痙攣しそうだ。

ああ、いやだ。

そう言い残し、僕は家を出た。

足元に迫る血の使い魔に気づかず、絡まれてこける。衝撃は柔らかい土で吸収されたが、鼻をぶつけたうんざりした。僕は弱つている。

「待て。おまえの気持ちはわからなくもない

といふか、わかれよ。

相手が黒服なのか悪魔なのかどうでもいいまま舌打ちした。

「我々が用意できる潜伏場所は多くない。ここが一番安全だ」
僕にとつて危険なんだ。

「落ち着け。深呼吸だ。とりあえず今日はここで眠れ。さすがに睡眠中は煩わされないはずだ。体力を回復しなければ行動は起こせない

足と腕を掴まれて、狩られた豚のように連れ戻された。

い

「おひ、おかえりアギイ」

「アギイ、布団ひいておいたからね」

アガイだよ。力なく伝える。本当に疲れているんだ。さつきのはなかつたことになつてゐるみたいで、『機嫌な鼻歌が聞こえた。

黒服はどこかへ行つてしまつた。自分だけこの場からいなくなるとは卑怯だ。僕はもう逃げる気力と体力を失してしまつた。がくりと燃え尽きる一ラウンド前だ。

布団を見る。三セットあつた。けしてふかふかではない、下等でもない、布団布団した布団がある。問題はつながつてゐる形で並べられていることだ。端と端が合せられ、連結させられている。このキングサイズになつた布団にひとりで寝ていいということだらうか。「アギイは疲れているみたいだから、俺たちも早めに休むとしようか!」

「そうねフー。これから家族同然の付き合いになるんですもの。親睦を深めるに越したことはないわね」

いそいそと着替えもせず、一人は布団に座つた。僕から見て右にフーリム、左にミミハウ。中央の布団を空けて、さあどうぞとばかりに手で示している。

なぜだ。

頭痛がしてくる。眠氣以外にも脳みそが鬪つものが増え、もうどうでもよくなつてふらふらと布団に倒れこんだ。

「なあなあ、好きな子とかいるのか?」

「そういうのは先に自分から言わないといけないわ」

「じゃあ俺が教えた後、アギイも教えろよ。……俺は三組のミミハウちゃんが好きなんだよ」

「えつ。フーリムくん……」

「ああつ、き、聞いていたのかいミミハウちゃん?」

蠅より蚊より就寝時にそばにいてほしくないやつらが、ここにいる。寝相の悪いフリをして裏拳をお見舞いし、無理やり静かにさせた。腕力はないほうだったが、こいつらは暴力に弱いようだつた。

が、すぐに復活する。

「そっち、行つてもいい?」

「え、でも、みんなに氣づかれちゃうよ。」

どうして僕を間に挟んで演劇をやるんだ……。

一時間ほどのちに、ぼこぼこの一人と困憊の僕は氣絶するよう

元

眠つた。

起床、そして死体

起床すると吐瀉物が淡白に添い寝しており、ガンガン頭を打ち鳴らす時計よりも鮮やかに今日の自分を憑依させられた。気持ち悪さが決定的に違うが、朝食前にグレープフルーツジュースを飲むかのようだった。

死体は僕の右と左に一体ずつ、王家の棺桶のことくそこにあつた。僕に備わった死体発見機能、トラウマは正常に作動したらしい。わざわざ律儀に吐かなくてもいいのに、厄介な体になってしまったものだ。

フーリムの胸に突き立てられた剣は、銀の装飾が癖毛のように施された、宗教的俗刃だった。おみやげ物として売つていそうな安っぽさを感じる。およそ人を殺せそうな品位はないが、実際に殺傷している以上僕の感性のほうが誤っている。

口をもあんと開けて、出来のいい蠅人形みたいに固まっていた彼は、僕を驚かそうとしているのかもしかなかつたが、止まっている脈を確かめても動き出さなかつた。反省して溜めを大きくしているのだろうか。

もう一方のミミハウは、喉をかき切られていた。刃物は見当たらぬ。先にミミハウを殺し、フーリムにござしゅ。犯行の順序は想像できた。残された凶器は、指紋を検出しうとの挑戦状とも考えられる。

彼女は手をフーリムのほうへ伸ばそうとしていたなごりがあつたが、僕の布団の横幅によつて作られた距離には全然届いていなかつた。もちろん僕は、その手が僕に向けられたものだとはまったく思わなかつた。

さて、残念ながら僕は名探偵ではないし、犯人はこの中にいない。あるいは僕の寝相が破滅的に悪くてこうなつた可能性もあるが、監視カメラや剣の心当たりがない以上、事件は迷宮入りの様相を呈し

ている。

立ち上がりつて背骨を開放するように腕を広げる。余裕があるわけでもなかつたが、朝起きたばかりといつのはやうするべきものである気がした。

耳元にふつと息を吹きかけられ、ぞぞぞぞと悪寒が走る。

背後にはトカゲ男がいて、僕は下半身を脱力させた。

犯人はおまえか？ もしくはおまえだ。この中にいなかつたはずだが、いるものだね。世界は僕よりも早く進んで、いつだつて置いてけぼりにされてしまう。

化け物は僕より二回りは大きい体格を窮屈そうにさせながら、威嚇と意外な愛嬌をたたえた瞳で僕を見ていた。うろうろとした表皮は高価なバッグになりそつだ。爪は一撃で僕の胃腸から微生物を召還できそうな鋭さ。

ファイティングポーズも構えられずに僕はずりすりと尻を擦らせて後退した。トカゲの丸焼きを食べていたら多少は耐性ができるいただろうか。

どうしてこう脅威が襲つてくるんだ。

毒づきながら、きしゃあつと鳴いた化け物が近づく前に瞬発力の限り反転、クラウチングくずれっぽいスタート、ずるべたんといきそうな不安定ダッシュ。

玄関まで数秒だったが、体感時間もやはり数秒だった。永遠に浸るのは難しい。焦りで汗がぶわりと全身を覆い始める。それがひどく今更に思えた。適応している、とも言える。

どかん。魔力爆弾が落ちる音がする。

玄関のドアノブをひねり体当たり、して外に転げる。ふつふつふつと荒い息遣い。本気か。爬虫類はもつと仕留めるときにだけ本気出せよ。追つてくるときはなしだる。

爪がズボンに引っかかった。

振り向きざま、僕は偶然に頼る。一〇万五七八分の一の確率。

消えろ！

トカゲの舌がちろちろと見えた。それが化け物の最後だった。空氣ごとぽつかり僕の願いが成就する。

嘘だろ？

いなくなつたトカゲ男に申し訳ないくらいの奇跡を起こし、一生分の運を使ったか、これまでの運のなさでキャラか、悩みながら冷えた地面に大の字で寝そべつた。太陽の光を浴びて朝を確信する。

「なにをしている」

大変だったのさ。

黒服を見上げる。ビニール袋を持つて、後光が差していた。仮には程遠いが、ふわふわとろとろのオムレツが食べたくなる光景だった。

ああ、そうだ。あいつら死んだよ。

一応の報告をする。見たほうが早いし、黒服が心構えをする必要があるとは思えなかつたが、義務があるような気がした。義務。なんて親しみの湧かない言葉だろう。これからは無視することにした。トイレに閉じ込めて上からバケツで水をぶっかける。上履きを隠そう。机にはビックチと落書きを。

「死んだ? ああ、そうか」

あつさり返事をして黒服は家に入つていぐ。僕は地面のベッドでもう一眠りしてもいい気分だつた。

しばらくして、ぐぐもつた「わつ!」という声が聞こえる。

……まさかな。

信じたいものを信じる決意を固めて、恒星の恵みを享受しようと目を閉じたら、家を蜂の巣にする銃声が響いた。

ダダダガガガとマシンガンだかなんだか知らないが、火器さんが役割を果たそうと頑張つてゐる。フレフレと応援団長バズーカも放たれた。ちゅぎゃん。一瞬で木造一軒家は壊滅打撃を受ける。

帽子を押さえるみたいに頭を抱え、衝撃をやり過ごした。

止んだら今度はさつきのトカゲによく似たやつ、影がソリッドになつたようなやつ、ムキムキの犬、が跡地に飛び込んでいった。そ

んなに急いでも、待つているのは焼けたにおいだけじゃないかい。

そうでもなかつたようで、返り討ちにあつた連中、おや、犬だけ

だ。きゃんきゃんと逃げ帰ってきた。

英雄か殺人マシーンか、焼土から現れたる黒服は、フーリムとミミハウを血の使い魔で持ちながら、悪魔どもを串刺しにしていた。やつているほうもやられているほうも悪魔なのでややこしい。

ムキムキの犬は悪魔なのか判断がつかない。ただのやばそうな犬であつても驚きはしない。ところで僕に犬の矛先が向けられたようになりますい。

ポチはよだれを垂らして僕に駆ける。迷惑千万僕も生きれば犬に当たるわけだが、実際に当たる前に軌道が変わつた。空中演舞、一回転半ひねりを加えて大地にバウンドする。

横からワンワンを蹴つたフィカソトリアの登場に僕は斜線じみた表情を浮かべた。

「また、会えたね」

にこっと笑う彼女に僕は射程の足りない唾を投げた。

……どうしてここに。

「うーん鼻を、使って？」

僕はあらゆる意味で問つたのだが、フィカソトリアは方法だけ答えた。少なからずショックを受ける。僕はそんなにくさいのか。シヤツに顔半分を突つ込む。昨日風呂に入つていのいのは確かだし、あれがそれでああなのかもしれないのも事実だ。しかし人間に嗅ぎつけられるなんて、いいのか。大丈夫か。

「あたし革命者、だから」

こちらの動搖を察したのか、フォローされた。だけどそれだけの説明で納得できるのであれば、テストで赤点を取つたりしない。生きていることに疑問を抱かない。奴隸か支配者か議論にならない。真夜中に急に走り出さない。最後のはやつてない。

「革命者は同盟を破棄するのか！」

ありつたけの賭け金をつき込んだかのようなでかい声が、さきほ

どの銃声の先から聞こえた。

「そういうわけじゃ、ありませーん」

相手に対してもつたく配慮しないふつつの調子でフイカソトリニアが言った。たぶん、聞こえていない。

「あと三〇秒以内に返答がない場合、敵対したとみなす！」

その制限時間はどこから出てきたのだろう。その因果関係と恣意性を考える。カツプラーメンはできるまでに三分だ。三〇秒だと六分の一しかできない。カツプラーメン六分の一。昼食のメニューに載せるにしては貧弱。あまりに胃袋を満たす訴求力が薄い。広告には、あなたはこれで満たせますか、と無垢な目をしたタンクトップボロボロ短パンの子供が手のひらを差し出している。満たせませんとポスターをびりびりにしたところで、フイカソトリニアが跳躍した。

「面倒、だなあ」

僕と襲撃者の間に降り立つたフイカソトリニアの言葉を拾う。

「えー、これは、あたし独自の行動、であります。革命者全体の意思ではなくて、同盟は関係ない、のです」

「そんないい加減な話があるか！」

まことにそのとおりであると襲撃者に同意。異方者と革命者の同盟の内容など知らないが、フィカソトリニアが間違っていることは僕が保証する。僕がどれだけ間違っていたって、彼女より間違っていることはありえない。

「いい加減、いい加減……」

山びこのように徐々に小さく反復するフィカソトリニア。ぎりっと歯軋りをしたような気がした。気のせいだろう。病は氣から。僕の防御も氣から。

「初恋がいい加減であるものか！」

世の中にあるもので恋はそれなりにいい加減な部類だよ、フイカ。僕は力なくつぶやいた。

五人だけしかいない

フィカソトリアは異方者と悪魔から敵対することになつて、戦闘は再開された。あれーと彼女は首をひねつてゐるが、恋の説得力からすれば当然の結果だ。弱いものが密集するように、恋に説得されるのは、恋しかない。盲目性に定評があるものだから、信頼度の低さは折り紙つきだ。

つらい思い出のように弾の集中豪雨が降つてくる。僕は為す術もなくじつとしていた。なにができることはあつたのかもしれないが、やりたくはなかつた。陽射しに引きこもつて、針が動くのをひたすらに観察する仕事がしたいと思つた。

地下鉄一駅分くらいそうしてゐると、徐々に銃声が少なくなつていることがわかつた。もしや、と覗き込んでみると、フィカソトリアが並んだ連中をばつたばつたとなぎ倒していた。黒服は離れたところで所在なさげに佇んでゐる。

紫色をしたゲル状の気持ちの悪い悪魔が、戦車みたいな足を滑らしてスライディングを仕掛けた。フィカソトリアは丁度よくタイミングを合わせてそれをズダンと踏み抜き、悲鳴を上げる悪魔のミミズがのつたくなつたような顔面を拳でぶち破つた。

銃弾は悪魔を巻き込みそうなほど絶え間なく彼女を狙い続ける。感謝に変換すればどんな親子関係も修復できそうだ。しかし風を起こすようにぶんつと腕を振るうだけで弾かれる。目を凝らすと、力場が形成されていて、触れるものすべてを傷つける仕様になつた。革命者というのはそんなこともできるのか？

一匹、悪魔らしい悪魔がいた。ボディビルダー的筋肉、大型羊の角、もかもかとした体毛。ゴージャスな金の刺しゅう入りマント。吾輩は貴族であるとでも名乗りそうだ。

爆裂な突進。猪でももつ少し曲線を描くぜと説教したい真つ直ぐつぱり。

「お、れい」

歌うようにフィカソトリアはひらりとかわした。華麗でもなかつたが、最低限の動作だけなので隙がない。悪魔も負けじと、慣性の法則をばぶる方向転換をする。レーサーだったら素晴らしいかもしない。だけど相手が悪かつた。

手刀ですぱりと首が落ちるのを見て、僕はあららどうしまじょうとお悩み主婦を演じた。

その悪魔の残骸がずずんと重力に従うのを待たず、ターゲットは変更される。

やがて沈黙は訪れた。可哀そつな全滅。

焼けた家と死骸。からうじて生きているタンパク質。僕、黒服、フーリム、ミニハウ、フィカソトリア。なんだらう、すぐ当たり前に広げられている風呂敷が、包む物を見つけるのに苦労している。単純に、強い。

まつたくもつて、認めざるを得ない事実だった。座布団を積み上げて殿堂入りさせるべきだ。

「はあ、終わった」

肩の可動域を確かめるように回しながら、フィカソトリアはこちらに近づいてきた。僕は後ずさりする。一歩ごとに一步。途中でそれに気づいた彼女は飛んでやってきた。跳んでない。飛んだ。本当に飛んだと思った。

「名前、教えて」

現実逃避を忙しくしようと、空を仰いだ。空には僕がいないのに、僕は楽しい気分になる。それはなぜだろう。どこに感情移入ができる二ツチがあるのか。投影しなくとも、人は面白がれるならば、要因はなんだろう。あるいはいるのか。もしくはこれっぽっちもいなことが快いのか。

「おーい」

宇宙とつながっている。否定はできない。しかしすべてはすべてとつながっているなどと信じると、僕はうすら寒くなつてくる。何

万もの人々が柔毛のように表面積を広げる役割を果たして動くと、火刑に処される魔女に憐憫を抱く。群衆の愚かさ、そのうちの一人でしかない自分に失望する。

「もし、もーし」

ちつ。なんだよ。ひとつ弱虫の僕は会話を開始してしまった。

「名前、な、ま、え」

言葉がわからないわけじゃない。共通言語でしゃべってる。僕は、アガイだ。ふるぶる震えそうになる太ももに、我慢辛抱ど根性とい聞かせた。

「あがい？ 足搔い、亜害、アガイ。意味のわからない名前、だね」意味の分かる名前なんて、どうするんだ？ 思わず本気で質問してしまった。

「フィカソトリアは、祝福の名前。フィカは愛、ソトリアは恵み。ジェクピアートは道から現れし女。新言語ではそう言われている「きちんとした説明をされて、僕は困ってしまった。迷子の子猫ちゃんを案内するより困った。だって、だからどうしたとしか言えない。

「きみの目的を尋ねてもいいかな」

黒服がようやっと助けにきてくれた。彼にその意図はないだろうが、フィカソトリアと交流するのが苦痛なため、僕にとつてはお助け戦艦「ラックスース」だった。

「アガイに会う。名前を聞く。もうやつたから、じゃあ、アガイと一緒にいること

「なんでだよ！」

ややキレ氣味に僕は嘆いた。放つておいてくれよ。真夜中にコー
ヒーを飲みながら恐怖映画を見てトイレまでの明かりを使用不能に、
けして家から出ないよう命じられてお留守番ピンポンを連打の音
聞こえどちらですかと尋ねたらおっさんの声でお母さんはいま
すかとひたすらに言われる、グラタニウス巨山の山頂で一人ぼっち
遭難山小屋で暖炉の火がなくなるのを見つめる、無人の旅する列車

に無賃乗車車掌から切符を拝見しますとの宣告、どんな罰でもいいから放つておいてくれよ！」

ぶつけてやつたのだが、風鈴がちりんと鳴るより涼やかにハテナ顔をされた。

「彼にこだわる理由はなんだ？」

「好き、だから」

「……まあいい。我々としては彼の安全さえ確保し、将来における魔力の行使に支障がなければ、かまいはしない」

おい！

「別にあたしは、魔力とか、どうでもいい」

「とにかく移動しよう。ここが嗅ぎつけられるとしたら相手は軍だと思っていたが、異方者と悪魔とはな。やつらの情報網を甘く見積もつていたか」

黒服は落ちていたフーリムとミミハウを足先で突いた。

「おい、出かけるぞ」

すわっと目を開ける一人。僕はあちゃあと額に手を添えた。死んでなかつたのか。

「驚いてくれると思つたんだけどな」

「ちょっと溜め過ぎたかしら」

けろりと胸に刺さつた剣を抜くフーリムと、ハンカチで喉を拭くミミハウ。せつかく黙つたと安心したのに、これだ。

盗んだ車は穴だらけぐしゃぐしゃレモンになつていたので、移動手段がなかつた。家の裏手にはもう一台あつたらしげ、そちらもかち割られスイカになつていた。

ふつپーとクラクションが鳴らされる。一斉にそちらを向くと、やや離れた位置、大型バンの運転席側窓から博士が顔を出している。「こつちだ、こつち」

近づくとバンの席半分ほどは黒服が詰めていた。お互いを温め合うペンギンを連想する。ただ暑苦しかった。

「こつち派手にやられたものだ。うむ、そちらの御嬢さんは誰か

な

「アガイの、これ」

フィカソトリアが立てそうになつた小指を全力でへし折ろうとするが、新手の超素材のように硬くて柔らかくてけして折れなかつた。つい触つてしまつたことに鳥肌が立つ。

「きみは……革命者か。ほう、革命者を虜にしてしまうとは、魔力が復活して神話性を發揮でもしたかね」

ああ、さつき魔力爆弾が落ちて復活したな、魔力。僕は思い出す。すぐに使つちやつたけど。

「なんと運がいい。いや、必然としてなんらかの作用があつたのかかもしれない。きみには謎があるからね」

謎？

「謎だ。楽しいなぞなぞだ。解明したいような、そのままにしておきたいような、くすぐつたい存在。その名は謎。まあ、人は解いてしまうのだがね。解いたことにしてしまつと言つべきか。これはわたしの持論だが、真理はわからない、という一点にある。だから本当に明かされる謎なんてないのだよ」

はあ、どうでもいいけど、僕の謎はなんなんだよ。

「移動しながら話すとしよう。皆、車に乗りたまえ」

フィカソトリアがついてくるので、僕は助手席に乗ろうとした。しかし黒服に先を越される。ぐぐぐ。仕方なく一列目、隣同士。慣れてきた自分が怖い。なぜか黒服に運転を代わつた博士も隣にきた。フレームとミミハウは後ろで黒服になにが嬉しいのかにこにこ血だらけ姿を自慢している。黒服やつぱり多いな。

なめらか発進とともに、博士がしゃべり出す。眠くならないかが心配だった。

「洗脑子が完成した。予見より幾分か早い。タケミチめ、どうやら偽つておつたようだ」

僕の話はどうした。

「おお、そうだそうだ。きみが殺したクラスメイトな、教師を含め

てもあの場にいたのは全部で一六人らしいのだが、報告を読むとどうも数が合わんのだ。多くても一五人分の死体しかない。一人生きている可能性があるのだが、心当たりはあるかな」

「なんだって？ 僕は虚を突かれた。

「ないかな？ 錯乱していたかもしれないし、聞いても仕方ないとか。しかし殺されたうちの一人は革命者だったことを考えると、重要にも思える」

「なんだって……。呆然とした。そんなはずはない。なぜなら僕の記憶にある僕が殺した人は、あの場にいたのは、サラスナ、ヒラタ、フフクベ、クラマサ、あとは先生……。五人だけしかいない。

あのカエルの医者が学校に革命者がいたと言つたとき、僕は気づくべきだった。

……いや、違う。僕は気づいていた。気づかないふりをしていただけだ。忘れたつもりでふたをした。コップについ手の甲を当ててしまい、テーブルから落としそうになる。反射的に掴むが、水がわずかにこぼれた。水は記憶だつた。びくりと身がすくむ。おぼえていない、おぼえていない。僕はなにもおぼえていない。

「わたしが追いつめているような気分になるね。ようするに連鎖性を察するのだな。直接精神に攻撃として言葉をぶつけたわけではないが、自らが対象に対して与えた影響のドミノ的広がりを表情や仕草から判断する。この場合、つまり今のきみだが、影響は固有性に左右されてるので責任はきみにあるはずだ。しかしわたしは己に責任があるように感じる」

僕の様子を見た博士が言った。冷静な分析なのか謝る前段階なんか。

僕の中の複数の僕が、あーだーだと喚きたてている。思い出せ、思い出せと机をばんばん叩く立派な僕。なにを言つているのか。忘却にもそれなりに理由がある。わざわざ忘れたものを取り戻してどうする、と煙草をふかしながら氣取る僕。それよりごはんが食べたいよ。いつ食事をしたのか、そつちを思い出したほうがいい。お腹が減った僕。ここは牢屋だ。息苦しくて、自由がない。いつそ死刑を望むよ。囚人の僕。翼はなくとも、精神は飛べるので。少しおかしくなった僕。

一番強いのは、空腹だった。なにか食えるものはないか？

「コンビニで買つたおにぎりがある

黒服にビニール袋を差し出された僕は喝采を上げた。ペットボトルのお茶まである。昨日はなにも食べていなかつたんじゃないかな？

朝は摂取したような気もする。どうだつたかな。

具材は鮭と梅干。ツナマヨがあればストライクだったが、最高の調味料がたっぷり準備されている現状なら十分だ。若干変形していおにぎりに付属の海苔を巻き付け、ぱりぱりとした触感からのもちつとをいただく。うまい。今なら大嫌いなピーマンでもおいしいかもしないのに、米を食せる喜び。

こほん、と博士が咳をした。風邪かな。移さないでほしいものだ。「わたしの話を聞いていたかね？」

聞いてた聞いてた。僕はすらりとおにぎりを平らげ、お茶をぐきゅぐきゅ飲んだ。ふはっと口を離すと、フィカソトリアが凝視していたのでびっくりする。ペットボトルがぶんどられ、飲まれた。一口で返され、唇の端がにゅいつと曲がる。

「間接、キス」

喜びが虚偽のようにしほみ、ぐつたりする。碟にされた善人を救えない傍観者の気持ちだ。

「詳細なレスポンスがほしい……」

博士がエアルービックキューブをしていじけていたので、本題に戻つてあげることにした。

僕がおぼえているのは、五人だけだ。一六人だか一五人だか、そんなんにたくさんはいなかつたはずだよ。

「だが、クラスメイトはあそこに全員いたのだろう？　なにせ授業中だ。休んだ人間はいなかつたと報告書には書いていたが」

クラスメイト。クラスメイト……。

ぴり。電流が通つたような軽いショック。僕はクラスメイトが四人しか思い浮かばなかつた。ようやく自分が変なことに気がつく。だまし絵ですつと坂を登る輪に組まれたシルクハットの人物になつたかのようだつた。

妙だ。

「妙だね」

「博士、妙です」

黒服が言つた瞬間、衝撃が車を襲つた。

横転しなかつたのは、幸運か不運か。天使の采配か悪魔の悪戯か。とにかく自動車は走るのをやめなかつた。暴虐な王に負けず、親友の信頼に報いようとしているのかもしれない。

「誰だ、移動中に仕掛けてくるとは。親の顔が見てみたいな」
親より先に本人の面を拝もうよ。

「違ひない。しかし困つたな。遠距離から狙われていたら対抗手段がないぞ」

博士は全然困つていなさそうだったが、とりあえず考え中とばかりに腕を組んだ。

「どういか、ヘリコプターですね」

黒服が窓から手を出し、人差し指を上へ向けた。天国への階段を示すジエスチャ。上空には音もなくヘリコプターが飛んでいた。人が乗り出して、おそらく銃器を構えているであろう姿がかろうじて見える。

「無音といつことは軍の新型か。厄介な発明ばかりしおつてからに。交通事故を起こしたらどうするんだ」

「どうします。やれないこともないですが」

黒服が幾人か臨戦態勢に入る。といつても、窓から身を乗り出す程度だが。ところてんみたい。

「いくらおまえたちでも、あれほど離れていては難しいだろう」
車とヘリコプターの間は、りんご五〇〇〇個分はありそうだった。
血も涙も届きそうにはない。

「革命者よ、おまえさんはどうだ?」

「無理」

塩ひとつまみを鍋いっぱいに溶かしたスープの返事。役立たずが!
「アゲイくん、魔力が回復したと言つていたな」

でも、使つてしまつたよ。アガイだしな。

「ものは試しだ。呪的発声をしてみてくれたまえ」

窓から顔をのぞかせ、消えろ、と言つてみる。しーん。風にまみれてドップラー。なにも現実化しない。夏休みの宿題、一行日記を最後の日に蝉の歌を聞きながらカリカリ鉛筆を躍らせる。あの寂しさよ。

「まあ、魔力が残つていてもここからではな」
「じゃあ、やすやすよ。

「ものは試しだと言つたろう。さて、どうするか」と、第一撃。今度はクリティカルヒットした。「ほつと嫌な音。
「退避！」

フィカソトリア以外のメンバーを抱えて、黒服が時速八〇キロメートルくらいからの急減速より、道路に着地しようとした。咄嗟には血液悪魔も間に合わず、黒服の肉体がクッショニンになる。がつ、どつ、じろじろじろじろじろ。黒服のカバーは広かつたが、痛みが臀部にくる。「コントロールを失つた車が脇へ突つ込んだ。

ようよう起きると、複数のアナクロ軍用ジープがやかましく僕らを取り囲んだ。ヘリのハイテクさに比べて、なんと無骨なのだろう。同じくらいに無骨な装備をした兵士たちがぞろぞろ現れる。量産型の印象を受けた。

「ここは俺にまかせろ！」

威勢よくフーリムが拳を握つた。ああ、いたんだ。

「いたたた……。おお、いたのかねフーリム。きみも魔力患者だつたな」

黒服を下敷きに寝転がつたまま、博士。

「私も私も」

い。
「いぐぞ、ミミ」
「オーケー、フー

なにも期待できないが、とりあえず眺める。無為に時間を過ごすことを認めるわけだが、今までずっとそんなようなものだったから、

これくらいで後悔もないだろ？。諦めですらない。はつと顔を上げると時計の針が思つていたより三〇〇倍のスピードで進んでいる。その連續なのだから。

「俺たちは概的感覚、心の動きが現実化する… さあ喰らえ、俺たちの楽しい気持ち」

「あんまりひどいめには合わないから大丈夫よ！」

相手が大丈夫だったらこっちが大丈夫じゃないんだが。

僕の霧雨は彼らの肌を濡らさない。きらりと兵士と僕らの間が光つた。

ことり。鉢植えの花が置かれる。

「あれ、派手さに欠けるなあ」

「死体のフリをするのに魔力を使つたからかしらねえ」

軍の代表が近づいてきた。なぜわかつたか。偉そうな雰囲気をしてからさ。周りが道を空けて、大股で、肩幅がでかい。装備は軽めだが装甲は分厚い。

「投降しろ。軍はおまえたちを殲滅、拘束する権利がある」

そんな権利は誰にもないよ。それらしい権威を振りかざしているだけだ。と言つたら撃たれるだろうか。

僕はいち早く降参の合図を出した。お手上げだ。黒服は応戦体制。フィカソトリアの姿がない。この際いなくなってくれたほうが…と思つてゐるうちに爆発音がした。見ると、ヘリコプターが墜落している。さすがにそうした音は消せないのか。

炎を背景にしたフィカソトリアは、指でブイサインを作りながら戻ってきた。

「勝利」

ほつぺじぎゅうぎゅうブイの字を押しつけられ、僕はデブのモノマネのように元にやめよう、ともじこ言つた。

「と……」

代表が口を開いて止まる。ヘリの残骸を、かつぼじらないまでもまぶたぱつんぱつんで確かめる。

と？
フィカソトリアにも投降しむと宣言するつもりだったのだ
るうか。
できるなら僕がしたいよ。

虫使いのカエル

「革命者だと？」テリロ博士、貴様、軍に反旗を翻すのか…」「がしがし襲つといて今更なにを言つてはいるのかねきみは。そのつもりでやっていたのだろう」

「革命者と手を組むのは話が別だ」

「ようするに思い通りにいかないのが気に食わないだけだろう」「呆れた博士はため息をつく。赤子のダダに付き合つてている暇はないとでも言つように。赤子ならまだいいが、大人のダダは最低だ。可愛げがないうえに乱暴すぎる。ほっぺもふにぶにしていない。結局やれただじゃないか。

フィカソトリアに不平を漏らす。出し惜しみか。わざびチューブを最後までぐりぐりせせずに「ハリ箱へお嬢にやつてしまつよつなものか。

「近くなつて、たから」

簡潔な釈明。それで済むなら警察はいらない。結果、警察はいらない。済んだから。

まだ事態は決着したわけではないが、どう考へても革命者以上の戦力が軍にあるとは思えなかつた。彼女の存在は想定外、軍だけじゃなくて僕も。

「革命者よ、その魔力患者はおまえの仲間も殺してはいるのだぞ！」代表の訴えに、フィカソトリアは首を傾けるだけだ。

「どうやらやつらの狙いはアオイくんのようだな」

間違えるのも面倒でしょうから、もつ呼ばなくともけつこうですよ。僕は感情が斜め四五度になるのを自覚した。

「鈍重な軍がきみの特別性に気づくとは、少々意外だが」

「特別性？ 謎がうんぬんの？」

「いや、それとはまた別だ。わたしが言つてはいる特別性は、あの事件の外観だけで判断した。しかしその外観は、軍にとつては一魔力

患者のちょっとした出来事に過ぎないはずだ。連中が保護という名目で集めている魔力患者にしても、理由は曖昧。なんとなく気にしている奴がいるようだから俺たちも手を出しておくか、くらいのものだろうな。とにかく軍はアドバンテージの確保をしたいだけだ。理由はどうでもいいのだ。いずれきみのもとへもきたかもしれないが、後手に回ることはなかつただろう。一応早めに絶対共同体を送らせてはもらつたがね」

眠くはなかつたが、博士の話が妨げられないことを不思議に思った。軍を見やると、全滅させられている。フィカソトリアは代表を転がし欠伸をしていた。一応黒服も手伝つたのか血液悪魔がいる。「注目すべき外觀は、きみが革命者を殺したこと、その一点に死きる。わたしは革命者が学校に潜んでいることを知つていた。偶然にもね。因子の活性化がなかなかに素晴らしい若者だった。彼を死んだ、と話を聞いただけでも、きみに接触するきっかけになつた。報告を読んだとき、生きているのは彼かとも思ったが……やはりどうも違つようだ」

あのや。

「ふむ？」

一人足りないとか言つていたけど、その一人つて僕のことだったりはしないよね。

「あ」

おい。

「いやいや冗談だよ。もちろんきみを除外しての一六人だ。計算に間違いはない。うん？ 間違いは……うん、ない」

ボケてるんじゃないか？

「このくらいの不安定さは若い時からあつたよ。それにボケてもかまわない。新しい扉を開くことだからね。さて、ようやく本題なのだが、そこに転がっている男は、きみが革命者を殺していることを知つていた。なぜだろう。彼があそこにいることを知つているのはわたし以外にいたということだ。そして遅ればせながらきみを確保

しにきた。重要性を認識してね。このタイムラグとつながり、理解するには材料がないね」

博士以外に知っていた人……材料。

あ、カエルだ。

「カエル？ カエルなんていないが」

違う、カエルによく似た医者だ。僕がみんなを殺してしまったあと連れて行かれた病院で会つた。

「その人がなにか言つていたのか？」

忘れてしまつたよ。でも、革命者がいたことは知つていたな。

「軍にリークしたということか。いくら魔力患者を扱うといつても、一介の医師が隠れていた革命者の存在を知つていたのは……興味深いな」

「拷問、する？」

「フィカソトリアが転がすのに飽きたのか行動不能になつてている代表に小石をぽつぽつ当てていた。物騒かつナイス提案に、僕は顔をしかめる。

「そいつはおそらく聞かされてないだろう。軍上層部が現場レベルに根本から教えるとも思えない」

「じゃあどうする？」

「車をいただいて、その医者に会いに行くとしよう」

「一台のジープをもらい受けれる。まあ、強奪。どうやつてもフィカソトリアとは一緒になるようだ。フーリムとミミハウが離れたのが不幸中の幸いか。財布を落として小銭だけ戻つてくる程度でしかないが。

代表がうめく声がエンジン音に書き消された。僕たちよく車に乗るね。

昨日の今日で移動しているわけもなく、病院は無事にそこにあつた。そこはどこなのかを考えるときもあるが、どこでもいいときは素直に思考停止した。

「どうされました？」

受付のブロンド女性が大所帯に困惑していた。家族でもなんでもないが、テレビのスペシャルで放送したらそれなりの視聴率は記録できるのではないか。聞かれるまでもなくどうかはしている。

珍しく女性のむつちりとした太ももに目を奪われた。スカート丈が短い。だからといって許可されているわけでもないだろうが、この際凝視してやつた。すると横から腕が伸びてきて、無理やり首の向きを変えられる。ぐき。いてえ。

フィカソトリアに視線を合わされる。なんとか逃れようとしてきよろきよろ動かす眼珠に、ことごとく彼女は反応した。視線もぐら叩き。勘弁してください。

「あー、ここに力エルに似た医師がいると思うのだが」変化球ながら、取りやすい球を投げる博士。僕もあの医者の名前を知らないので仕方ない。

「あ、ムロヅキさんのことですね」

わかつてしまうのか。そうだろうな。

女性が呼びに行き、力エルを引き連れてすぐに戻ってきた。

「ああ、待つていましたよ。こちらへきてください」

待つていました？

「待つていたとは」

僕の聞きたいことを博士が聞いてくれる。実は博士は僕が腹話術でしゃべらせている人形なのだった。なんてね。こんなに人間人間した人形がいたら、人間は混乱するだろうな。映画で限りなく人間に近づいたロボットを見たことがあるが、あいつらは自主的に動いて反乱を起こしたりするからまだいい。真の混乱は人形だ。身動きをせず呼吸の起伏もなく傍から見てまるで死体。突然力タカタと糸で吊り操られ、生の感情を裏方が表現する。人間が操る人間もどき。人力の道化。問われるのはこれからも自分はロボットなのではないか、ではなく、自分は人形なのではないか、だ。

ろくでもないことを考えているうちに、外に出ていた。力エルは

博士の質問に答えたのだろうか。

病院の裏手、駐車場スペースの端に案内された。くるとさきに自動車を置いて、帰るときに自動車を発進させる、そういう空間の端っこだ。端っこの中の端っこである氣もするし、端っこの中では比較的恵まれた端っこである氣もする。端っこに対する考察に僕は満足した。

「さて、あなたがたがなにを求めているのかは知っています
「ほう、どういうことだね」

医者と博士の会話が始まった。観客は主に僕と黒服で、フーリムとミミハウはそのへんの車のサイドミラーに細工をしているし、フィカソトリアは僕のそばにいるものの、上の空でぼんやりしている。僕のぼんやりを奪われたようで憤りしかった。おい、それは僕のぼんやりだぞ。

「軍に情報を教えたのは私です」

ずばり核心を言われる。もう少しもつたいぶつても恨みはしなかつたのだが、もしかして悪役ではないのかもしない。

「そもそもきみがなぜあの場に革命者がいたことを知っていたのかね」

「こいつらを使うんですよ」

耳障りな羽音が通り過ぎる。蠅だ。僕の嫌いな虫。カエルの足元には蟻が集まっていた。まあ嫌いなほうではない虫。うじやうじやといつほどでもないが、下唇を突き出してしまつくらいに数がいた。

「虫使い？」なるほど、話には聞いていたが、きみがそうなのか

「そうなんですよ。私が虫使いです」

さも了承済みのようなやりとりに苛立ちがある。ほら、私って、辛いの苦手じゃないですかあ。しらねーよそんなの。

「目的はなにかな」

「あまり明確な目的はありません。しいて言つなら、あなたがたと同じように戦争の終結を望んでいます」

「ならば邪魔はしないでもらいたいものだが

「現状、最も強力な立場にいるのは軍だと思います。ならば彼を軍に預け、しかるべき方法を取つたほうがいいのではないかと考えました」

「軍にまかせれば、確かに戦争自体は早く終わるかもしけん。だがそのあとが大変だ。私が考えているのは、パワーバランスの整った形での終結なのでな」

「個人的に、革命者が嫌いなんですよ」

最初からそう言つてくれれば、理解が簡単なのに。やはり悪役か。「腹が立つんですね。ああいう存在は。でたらめで、唐突で。タケミチさんが対革命者用の研究するのもわかります」

そうだな。同意だよ。肯定する。フィカソトリアはふーんとなぜか感心している様子だった。おまえ、含まれてるよ。

どばし、つとフーリムとミミハウが吹っ飛んできた。きゅうとばかりに氣絶している。よくしゃべるやつらがしゃべれない状態になつていると、心がほんわかした。

飛んできた方向には、どこかで見た子供たちがいた。

「洗脳子……」

博士が借金を踏み倒すような表情を浮かべた。自転車操業に限界がきて、取り立てがドアを蹴破ろうとしている。十日で十割はきつい。

「タケミチさんが遺してくれた彼らは、とても優秀です。きみらを倒せてしまうかもしません」

カエルは淡々と言った。ゲコゲコというよりはケロケロか。僕はカエルが周りの蠅に舌をしゃばりと伸ばして食事をするのではないかとひそかに期待していたが、そぶりも見せない。

「ムロジキさん、かもしれないじゃなくて、完成した私たちに倒せないものはありませんよ」

自信をみなぎらせた赤い長髪。すでに少し懐かしさを感じる少年だった。似合つてないよ、長い髪。切ったほうがいいんじゃないかな。

「博士、アガキ、下がつて」

黒服が壁になるかのように僕らの前に出た。人数は五人いるのかいないのかわからないが、ちょっと戦隊ものっぽい。全員ブラックだけど。

「フィカソトリアだつたか。今回は意識的に、おまえにも連携してもらつぞ」

「あたし、あなたに、名乗つたつけ」

「耳は悪くない。彼に名乗つたのを聞いていた」

僕を親指で差す黒服。人を指差すなよ、と言ってやつてもよかつたが、まあ親指だから許そうか。一番許せるのは薬指だと思つ。

「完成した洗脳子は革命者に匹敵、いや凌駕する。おまえは並みの革命者でないようだが、油断するな」

戦闘態勢に入る二人。

赤長髪が、余裕のある様子で口を開く。口の減らないガキ、とう言葉が頭に浮かんだ。

「博士、あなたには恩がある。その革命者と魔力患者だけ置いてい

つてくれれば見逃しまぶろう！」

話している最中に黒服は彼の顔に蹴りを放っていた。左頬から右頬にかけて衝撃が伝わっているさまが見て取れる。回転が加えられつつ地面に叩きつけられる姿はなにかの生地のようだつた。

「卑怯な！」

他の洗脳子たちが色めき立ち、遅れた対応に移る。卑怯かなあ。赤長髪のカバーと黒服への積極的打撃。速い。音速の何十分の一か何百分の一か。黒服が黒服の後ろから血液悪魔でガード、足払いを仕掛けられすっ転ぶが馬跳びで乗り越えるように黒服、手首から剣のごとく悪魔を尖らせ、洗脳子に切りつける。もうなんか黒服ばっかりで疲れた。

不意に洗脳子がこちらに向かっていることに気づく。え、まじかよ。なんとなく危害は加えられないだろうと高をくくつていたのだが、まさかの標的にされ、ああそつか人質とかあるもんなど、苦々しく唇を曲げる。口笛を吹いて無関係を装うも間に合わず無意味で、子供の表情に宿る幼さに舌打ちした。

メキ、ときしむ音がする。フィカソトリアが右手で洗脳子の頭を掴み、握力を発揮していた。とても大きさが釣り合っているとは見えないので、吸盤でもついているのか洗脳子の体が浮き上がる。そのときの僕の顔は相当うわあという感じだった。うわあ。

浮かんでいた洗脳子が、フィカソトリアの腕にしがみつき、体を持ち上げてきゅっと縮め、解き放つように両足をフィカソトリアへ喰らわせた。

吹き飛、ばない。

直撃を受けた腹を中心にはけぞつたが、大樹のよつにフィカソトリアはそこに居続けた。なんだこれは、と思った。新しいダンスを見ている心地。

ぱつと手のひらを広げ、なおもしがみついている洗脳子の首を自由な左手で締める。派手さは欠片もない。ただ不能にするためだけの行動。静かに、たおやかに、若い花をへし折ろうとしている。

まつ。

待て、と言いかける。なぜだ？ 僕は匂の声帯に疑問を抱ぐ。あるいは脳か。いや、すべて？ 細胞細胞の一片一片、ミトコンドリアにいたるまで疑問を浸透させれば、答えは見つかるのか。どこかの哲学者ならそうだと言いそうだ。それは否定だが、肯定に至るまでの過程でしかない。ていていうさい。

フィカソトリアは動きを止めていた。握力の判定ができるはずもないが、殺さず生かさずで寸止めしているようだつた。洗脳子は気絶しそうなかした後なのか、うめいてぴくりぴくりと軽い痙攣を起こしていた。

田が呟う。彼女と。祝福の名前と。

どうするの、と問いかけている。僕に決定権があるというのか。違うな。どうでもいいから、余裕があるから、委ねてもいいよ、なのか。どうして伝えてこない。言葉で。殺すな。

絞り出しつづると、意外に薄いジュースだった。果汁三〇パーセント。

フィカソトリアは洗脳子を開放する。しおれるように横たわる子供。

「殺さないほうが、いいの？」

……ああ。

説得力があるのかないのか、人殺しが人殺しをやめろと言ひ。いい加減してくれよな、まったく、勝手ばかりだ。

僕は僕自身に僕の不在を感じ、僕が嫌いになつた。

黒服と洗脳子の戦いは、黒服の劣勢だつた。血の使い魔と黒服の肉体のコンビネーションは正常に機能していたが、やはり速さが違う。技術と地力の勝負か。老人と若者の勝負か。黒服はいくつなんだ？

フィカソトリアはそこに参入する。

寡占が独占になるかと思ったが、意外や混戦になつた。洗脳子の

力はちくわ、ガラハロンドル・ナックトイテを上回つてゐるようを感じた。フィカソトリアといい、あいつら名前長いよね。でも僕は間違えないんだ。

洗脳子は敗れたやつを参考にしたのか、フィカソトリアに対して間合いを保ち、無理をせず牽制を続けた。黒服の負担が減った分優勢にはなつたが、決定的ではない。ミスをなくしてやや膠着状態になつたようにも見える。

「ごしんり、と洗脳子が車にぶつかる。ここは端っことはいえ駐車場だから、当然自動車が近くに並んでいる。そのことを初めて意識した。けつこう狭く戦つていたのかと、なんだか不思議だった。演劇で観客をかぼちゃだと思うようなものだろうか。パンプキン・バトル。お父さんとお母さん、来るつて言つてたのに、いなかつたね。カエルと博士はどうしているのか目をやると、どうもしていなかつた。博士はもっと逃げたほうがいいし、カエルはその虫でなにができるのだろうか。

そしてなぜ僕はここに留まつて、棒立ちで観戦しているのか。正義の前口上を全部聞いてやる悪の幹部に転職しようかな。チアリーディングもできないしね。

黒服が血の魔羅をびしやりと大量にぶつかけて肺に入り込ませる例のやつをやつた。ガラハロンドルは降参したが、洗脳子はおかまいなく前進してくる。血の魔羅の操作で隙ができた黒服は、抉り込むような拳を受けて崩れ落ちた。本当にえぐられて、拳が貫通していくのを確認し、僕はこみ上げるものを感じる。

「むう」

博士が反応らしい反応をした。黒服が死ぬなんて想像はできなかつたが、明らかに致命的だつた。

やばいんじゃないか。

「洗脳子の力を甘く見ていたわけではないが、どうもタケミチの目標は達成したと認めざるを得ないな。革命者の平均は上回つてゐるようだ。あのお嬢さんにかないはしないだろうが、まともに戦つて

は絶対共同体に勝ち目はない。そもそも戦闘行為が彼らの得意分野ではないからな

やられることか。

「絶対共同体に敗北はない。ガラハロンドルはわかつてていたから退いた。あの子供らはわかつていなかから退かない。あの傷はその差に過ぎないよ。ただ、このままだとまずいことは確かだ」

敗北はないのにまずいのか。青汁みたいな？

「違う。事態を開く術がない、ということだよ」

冷静にご指摘ありがとう。

戦いは続いている。線路のように。フィカソトリアが相手を圧倒できないのが、短い付き合いながら妙だつた。付き合いつて、まあ、あれだけど。

僕のせいで手加減しているのか、彼女は一步踏み込みが浅かつた。砂浜で波が来る前に引くように。遊んでいるようですが、あつたが、表情にはわずかに焦りが浮かんでいたので僕はびっくりした。

焦り？ フィカに一番似合わない感情だ。

「彼女が焦っている？ そうなのか？」

博士が僕に聞いてきた。うーん、勘違いかもしれない。

「めん、どう」

つぶやきが風に乗ってきた。剣道？ フィカソトリアの手刀が洗脳子の首を捉える。えー、殺しちゃうのかよ。吐くぞ、僕は。悪魔のときは大丈夫だったから、もう大丈夫になつたと考へるのは早い。僕は差別するから。

洗脳子はなんとかそらそらとしたが、喉をざつくりと切り裂かれた。血がどぼどぼと溢れる、と僕は覚悟し、目を閉じた。視覚情報を隠してしまえば、なんとなるはずだ。現実逃避の常套手段。

ややあって目を開けると、やっぱり喉から血を流す洗脳子がいたが、わりと平然としていたので拍子抜けする。特殊メイクかな。

「おかしいな」

「はい？ そりやおかしい。うん、おかしい。で、なにが？」

「傷がふさがつている」

うなる博士。洗脳子は汗を拭つかのよつて血を手で除けた。傷は見えない。しかし新しい血液が溢れてくることはなかつた。目を閉じていた数秒のうちに治つてしまつたといつのか。

フィカソトリアが、さきほど焦りだと思っていた表情を進化させ、手についた血を払つた。ああ、これは焦りじゃない。これは、昂揚だ。

ガラハロンドル・ナックトイテを含めた革命者たちが現れたのは、嵐らしい嵐はおさまった後で、僕にとってとてもタイミングがよかつた。

なにせ洗脳子を倒してからも、フィカソトリアに灯つた炎の勢いは衰えることがなく、矛先が僕に向いたからだ。獸にしては理性的で生物にしては秩序的な凌辱の腕が伸びようとしていた。博士は考えごとに夢中になつて助けてはくれない。黒服は倒れた洗脳子を拘束するのに、労力と時給の対比を都合よくしようとしているのか、やたらと時間をかけていた。

誰にしたつて彼女を止められるわけもないが、今まさに傷つきそうになつていてるときに他人が無関心を表明していると、螺旋状の無限穴で光を目撃しながらも遠く落ちていきそうな気分になる。

フィカソトリアの唇が首に当たられた。噛むように吸われる。地面に倒され、あちこちをまさぐられる。

真空でもがく労働者がつるはしを片手に虹を見る。このまま一生働いて、年老いていくのかな。汗が頭皮、額、眉間、鼻、頬、顎、と流れる。雲が描く終わりのサイン。意地汚いつさぎの幻影につられて、薄い月が拡散する。

僕は柱のように動かすにいた。一種の耐震構造として精神はぐらぐら揺れていたが、張り巡らされた糸の一本一本に至るまで硬直し、勤めて死んでいるように生きようとした。死んだフリ。あるいはフリのまま死んでしまうかもしねなかつたが、諦めてはいなかつた。出会いがしらのフィカソトリアに感じたものと今回は違う。今回は、理解できそななものだつた。性的であつたり感情的であつたりだ。しかしこの延長線上にあれがあるとするように思つことはできた。程度の問題か。考えるのをやめた。考えるだけで死にそなだつたから。

精一杯人形化はしないで、己の自由を限定的に勝ち取ろうとしている」と、ジャケットが脱がされる前に空気の流れがあった。

「因子の活性化を強く感じたが、きみだつたか。……なにを興奮しているんだ?」

助けてくれ。

ガラハロンドルならばいけるかと懇願する。義理はないが、この事態のおかしさを解消するのは義務ではないだろうか。

「おふざけよりも説明をしてくれないか。あー、フィカソトリニアだつたか。洗脳子はきみがやつたのか?」

ガラハロンドルはねずみに食い散らかされたちくわのようだつた。ねずみがちくわを食べるかどうかは知らない。衣服ぼろぼろ。もう僕とは趣味が合わない。そつちのほうがふざけてないか。

「そうだ、彼女がやつた

答えたのは博士だつた。ようやく思考回路を通常運転に戻したらしい。

ガラハロンドル以外の革命者も、彼と似たようなものだつた。怪我だらけぼろだらけ。

「完成した洗脳子を、一人で? ぼくたちは逃げ帰るしかなかつたのに。……因子の活性化を皮膚で捉えられたはそのせいか。革命の因子について、ぼくはまだなにもわかつていなかつた、といつことかな。」

落ち着いて会話をしている場合じゃない。

ズボンをずり下げるやれやれとばかりに革命者がフィカソトリニアを引きはがす。わりあいに簡単で拍子抜けした。

「ムロヅキがいないな。さすがにあの光景を見せられては退かざるをえないか」

気づいた博士が言った。

不死性を発揮した洗脳子に対し、すがすがしいほどの暴力を振るつたフィカソトリニア。洗脳子の全滅に、カエルのなす術はなかつた。

「予想通り、イージー・マスカットのタケミチからすれば予見通りに、洗脳子は完成し、戦争加担人になった。僕らには完成してから抑えられる自負があつたが、正しくもあり間違つてもいたわけだ」

ガラハロンドルが明瞭な顔面を没くした。

「タケミチは戦争加担人を作ろうとしていたのではなく、革命者を超える存在を創ろうとしていた。細かいことだが、訂正しておく。そして彼の見積もりは甘かつた。結果が出ると、なんだか寒くて、寂しいものだな」

しわくちゃの博士とガラハロンドルが並ぶと、おみやげの置物みたいで面白かった。

「洗脳子をどうする」

「どうしたものかね。このままにしておくと、また革命者に明確な敵意を持つて行動するだろう。わたし個人としては、できる限りのことを荒立てるのは異方者と、それに組みする悪魔に留めておきたいところだ。あと、軍か。扱えない洗脳子を管轄におけるないしきみたちが見逃してくれるとも思えない」

「そうだな。ぼくらがすぐに戦闘を開始しないのは、状態と状況を踏まえているからだ。洗脳子にはやられるし、異方者と悪魔との同盟は破棄されだし、化け物じみた同志、フィカソトリアを発見するしで、革命者は混乱中だ。正確には整理中かな。軍に仕掛ける力を準備しておく必要もある」

「またオフェンスか。少しばかり待ちをおぼえてはどうかな」

「因子を持ち、革命を遂行するから革命者なんだよ」

僕は話の半分ほどで、太陽の光に目を細めた。昼と夕方の間だらうか。身に染みる陽光だった。処分、拘束、軟禁、といった物騒な言葉が飛び交っているようだが、眠気に誘われてそれどころではない。フィカソトリアはとりあえず離れた。落ち着きはないが、僕に用事がある人もいない。昼寝を決め込んでかまわないだろう。そこでここが駐車場であることを思い出し、ベッドを探そうとよろよろ起き上がった。なんでみんな病院の駐車場にいるんだ。おかしい

ぞ。

「……フィカソトリアはいつたん預かるが、またそちらに行くだろうから頼む」

ガラハロンドルが言った。どうやら僕に向けられたようだ。
なんで頼むんだよ。

僕は泣きそうになつた。いや、泣いた。泣くだけで済んだのだから、褒められても罰は当たらないよ。間違なく体をペシャンコにする重りを投げるぞと言われたんだからな。

「彼女ほど因子を活性化できれば……無理だな。しかし少々試した
い」

嘆きに耳を貸さず、自分との「//コニケーション」を始めたちくわ
に、僕はぐつたりした。

拾つてもらつた消しゴムを受け取る僕の手のひらはどこか曖昧で、
そのままだとまた消しゴムが地面に落ちてしまいそうだつた。

クラマサの微笑みも、ゆるやかなイメージの中で崩壊していた。
つなぎとめていたサラスナの一言一言が、ヒラタの情けなさが、フ
フクベの雑さが、こぼれていいく。

「……多重に行使される神話性現実化病はどういった形で現れるのか、僕らの能力にかかっている。つまり人間についてどうやって定義できるのか、想像できるのか、線引きを不明瞭にするのも手段ではある」

「前例がないだけだ。現実化は現実化だう」
「神話性に期待するしかないんじゃない？」
「あるいは考えるべきなのは、生まれてしまった後、ではないでし
ょうか」

「それ自体が危険であると？」

「肉体と魔力の境目がない以上、魔力爆弾の影響を十分考慮しなく

てはなりません」

「誰だ。おまえたちは誰だ。僕か。僕だというのか。すべては用意されているはずなのに、パズルのピースは欠けて、海に飲まれた塩が尽きるのを待ち続けた。

起きたのはベッドではなくてソファーダった。

壁にかけられた油絵に目がいく。だだっ広い、砂漠のようなにもなさを草に置き換えた原っぱで、鎧を着て剣を振りかざした人々が羊に乗って狼を追いかけていた。羊の顔は怒りに燃えて残虐なほど凄み、毛をまとった肉体は筋肉を皮膚よりも早く外側へ放出される躍動を持っていた。

追いかけられる狼は、大きな体格に鋭い牙を備えていたが、どうも気迫が負けている。マスマディア的操作が宿っているのを感じて、眺めるのをやめた。

部屋は間接照明のみで薄暗く、夕方を小さくしたようだつた。暖炉があつたが火はついていない。そのわりになんだか暖かかった。僕のいるソファーは部屋の隅のほうにあるようで、真ん中には脚の長い丸テーブルがある。囲むように皮ぱり椅子が並んでいた。壁際にはいくつか本棚がある。書斎と居間を足して二で割つたようなところだつた。

「お目覚めですか」

僕が気づくより早く、部屋の主は声をかけてきた。そいつの姿は起きたときから見えていたのだが、なぜか気づけなかつた。まるで、そいつが許可したから気づけたような。

「どこだここは。

眠つていたようではあつたが、いつ眠つたのか思い出せない。ベッドを探していたはずだ。探したまま眠つたような感覚。

「お呼び立てして申し訳ありません。緊急の用件ができてしまつたもので」

「誰だ、あんた。

「わたくし、悪魔で」ござります。我々は自分で悪魔とは名乗りませんので、ま、あなたがたによれば、といつわけではありますか」

悪魔？

そいつは悪魔には見えなかつた。どちらかといえばサンタクロースだ。ナイトキャップのような帽子をかぶつて、ひげは生えていなが真っ白な髪が胸まである。造形は全体的に希薄で、小麦粉みたいだつた。

悪魔つぽくない。ふーふー。とヤジを飛ばした。

「悪魔らしそう、などというものはないのですが、まあそうかもしません。あなたの言つてこいるのは見た目だと思ひますが、それはどうしようあります。しかしその他、悪魔の現世界への意思伝達については、最近負け続けで、わたくしも我々らしくないなとは思つています」

僕はこうやつて急に話を進められることに慣れているのかもしれなかつた。突然知らないところに連れてこられるのも。帰りたいとか、話を聞きたくないとかではなく、終わらねえかな、が僕の最優先になつていた。

「妥協をする必要があります。我々は目標を低く設定しなおすことにしました」

はあ。鼻でもほじつちゃおうかしら。

「あなたに関係のある部分から説明しますと、まずあの革命者、フィカソトリア・ジョクピアートとあなたがともにいらっしゃるよう、我々は便宜を図ることにしました」

僕は鼻の穴に入れかけたひとさし指を向け、死ね、とほつきり言つた。

悪魔がばつたりと倒れて動かなくなつたので、僕は驚いた。顔が接触している地面から、血がどくどくと流れてくる。

神話性呪的発声現実化病のことはすっかり忘れていたのだが、思い出してみても魔力が尽きている僕には現実化はできないはずだった。

とつさに相手を否定する言葉として、死ねという選択はいかにも幼稚以前に薄っぺらい。でも僕は使つてしまつ。なんだか僕は人に死んでほしいのかもしない。

みんな死んじまえ。

あの妄想が実際に起こつてしまつたときから、言葉が現実と並んでしまつたときから、狂つた。終わつた。

最も危惧すべきは、狂い終わることかもしない。

「ダメですよ。迂闊に呪的発声をしたら」

声は底から響いてきた。悪魔が腕立て伏せの態勢を起こすようにして立ち上がる。穴という穴から血が若干の怠惰を混ぜてだらだらしていたが、悪魔がこほんと咳払いすると消え去つた。

僕は呆気にとられる。ぽかんと開いた口から空気が出入りした。「この空間は魔力に満ちていますから、あなたのちょっととした現実化の方向性に従つてしまします。わたくし、一応肉体を持っていますので、いちいち死ななくてはならないのですよ」

今、あんたは死んだのか。

「ええ、あなたの言うとおりにね。不死身じゃないのですから、死にます。そのたびに蘇らなくてはならない。意外と大変な仕事ですこれは。さて、説明に戻りましょう。それとも、なぜ説明するかといふ説明をすべきなのでしょうか」

別に説明しなくていいけど、理解させてくれ。僕とフィカが一緒にいるように悪魔が仕向けるなんて、どうやっても理解したくなり

そうにはないが。

「仕方ありません。あなたは最も強力な神話性現実化病に感染したのです。あの教室で起きたことのすべてを把握していませんが、その結果は変わらない。さらに、フイカソトリニアは革命の因子を覚醒させ、あなたとの出会いで絶頂を迎えるようとしている。ここまできてしまふと、もう我々は止められません。ならばせめて我々にとつてできるだけ都合のよい方向へ誘導します。ひたすらに比較的有益帰着を求めるほかには、ないのです。あの洗脳子をかませ大ぐらに甘く見ていたのが問題でした。心臓求めて尾を忘れる、ですか。ムロヅキの余計さには、少々腹が立ちます」

僕の目は冴えていて、眠るどころではなかつた。言つている」との一分の一もわからないが、とにかく耳ぶたがない以上、手でふさいでも完全防音でない以上、僕は音を通す。ザルと水よりはマシのはずだ。

「あなたとフイカソトリニアによつて、形はどつあれ戦争は終わるでしょう。それ自体は問題がありません。問題は去勢的に終わることなのです。不安定要素が排除されることなのです。もつとこの戦争は長引かせるつもりでしたが、軍も滅ぼされかねなくなつた現状では難しい」

飽きてきたので、脱出する方法を考えた。魔力が満ちているのなら、呪的発声で逃げられるのではないか。久々の閃きだ。

「ここから出、

「おつと」

言い切る前に口をふさがれた。瞬間移動したとしか思えない。悪魔の手は唇よりも速く動いた。

「せつかく説明していたのに、ひどい」
「むぐむぐ。

「わかりました。伝えなくてはならないことだけ伝えましょ。この先、あなたは魔力を使わなければならぬときがきます。そのときに魔力を用意するのは我々です。疑いなきようにお願ひします。

いいですか、重要なのはフイカソトリアの行動は我々には制御できませんが、あなたにはできるということです。我々が最終的に協力するのはその点についてです。そのためあなたには彼女とともにいてもらわなければならない。これが表面的な協力です。この二つについて理解してもらえればよろしい

「うむぐ。なんなんだ。僕になにをさせたいんだ、と言いたかつた。すると悪魔が心を読む。

「本音としては、なにもさせたくないのです。しかし力は動いています。スカラ―ではなくベクトルとして。しうがないのです。戦争は終わってもかまわない。世界が終わるならば」

悪魔の瞳が比喩なく光った。闇を奪う光。宙より踊りいでし善を封じ、谷より登る賢きを罰し、夜を白く塗りつぶす。

「さあ、これ以上話すべきことはありません。まだ話題はありますが、望まれていよいよです」

手がだけられる。あつたはずの感触がまつたく残らなかつた。

……どうしてもフイカと一緒にいなければならぬのか。

「別に危害を加えられるわけでもないでしょ。彼女は自ら望んで生まれた者ですから、あなたが嫌惡するのもわかりますが、諦めてください。人間の得意技でしょう」

諦めがあるのは、諦めたくない、があるからなんだけどな。

僕は捨て台詞を残して、くるときより唐突にいなくなつてやろうと脱出の呪文を口にした。ここがどこだかわからなくとも、行くところがあれば現実化できるはずだ。ここから出る。

がくんと、もとの世界に戻つた。

病院の駐車場は特段変わつた様子を見せていない。しいてあげるなら博士とガラハロンドルの話が終わり、洗脳子が黒服から革命者に受け渡されているくらいだ。フイカソトリアがそばにいない安心感や、消えた眠気も。フーリムとミニハウが起きてどんちやんやつているのも。あれ、けつこう変わつているな。

じんじんと、「わかつたようなつもり」のやつが僕に説教をしている。

白昼夢か世界移動か知らないが、僕は飛ばされていた。そんなことはどうでもいい。あの悪魔の話が真実だとして、僕が戦争を終わらせるとか、フィカソトリアと一緒にいなればならないとか、そういう反逆の動機が与えられる、いい加減で勝手なものに対してもうどう考えるのか。

黒服や博士に会ったときから、いや神話性現実化病にかかつたときからだろうが、降つて湧いたことに追いつめられている。ベルトコンベアーが異常な速さで流れ、周囲の情景は目まぐるしい。行きつく先、一寸先どころかずっと暗闇だ。逆方向に走つてみよつものならこけてしまいそうな予測も立つ。

なんなんだろうな。

不理解こそこの世の真理だ。

どこかの有名な人が、一番わからないのは私たちがなぜわかるかということです、などと言つていた。有名なのに名前が思い浮かばない。有名だということしか浮かばない。むしろそれこそが有名だということだろうか。

この場からこつそり抜け出して、博士や黒服やフィカソトリアに見つからないよう、隠れてしまつのはどうだろ。ダメか。フィカソトリアはにおいて僕を見つけた。眞偽はともかく、隠れ切れそうにはない。

事態は動いているのに、僕は手足がくもの糸で固められてしまつたような感覚が拭えなかつた。助けてくれ！ 僕の叫びはみんなに聞こえるだろ。でも、彼らの助けは僕を縛るばかりだ。善意で自由を殺される。関心がナイフになつて、僕を傷つける。

ふと、体が魔力を知覚した。今まであるかどうか不明瞭だつた魔力が、僕に満ちていることがわかる。あの悪魔の部屋にいたせいだろうか。第七感が冷気に似た波を伝える。

狂氣は数瞬間、僕を解放するだろ。祭りは僕を躍らせだらう。

飲まれて楽になればいいとは思えない。だが、フィカソトリアをも殺してしまったかもしれない己の病に魅力を感じた。

ピクリと心臓がうずく。ずっとドクドクしているこいつが、そんな急かつ微細な反応をしたらそれも病だ。心臓の近くがうずいただけだろう。うん、そうだ。心臓はうずかない。

ふつふつ、と短く息を吐いた。吐くという動作にやける。死体はない。腹は減っている。もう昼食を食べてもいい時間だ。時間が昼食を許可する。朝に食べれば朝食。晩に食べれば晩食。そうか、決めているのは僕じゃなかつたんだ。

呪的発声。神話性現実化。食べ物すらも現実化できるのか試した。親子丼が食べたい。

なにも起こらなかつた。あまりに間接的すぎるのか空氣の振動が霧散するばかりだ。

この病を治そうと現実化させることを考えたが、叶つてしまつても今は困るな、とやめた。病によつて病を治すとは、血で血を洗うのにも似て不思議だつた。

僕はあまりにこの力について、思考をめぐらせよつとしていなかつたことに気づく。昨日の今日だから仕方ないか。仕方ありません。悪魔の言葉が蘇る。あいつのほつが諦めていたようだけどな。

「おーい、食事を取ろうではないか」

博士が僕を呼んだ。すぐ当たり前のことだが、なんだか初めてみたいだつた。もちろん博士が僕を食事に呼ぶのは初めてだ。もつと根本的に、経験の最下層あたりから初めてな気がした。

初めてじゃなく感じるのは全部デジヤビュなんじやないだろうか、と引っかかった僕は、思考の全自动洗濯機に巻き込まれた。

回転、回転、大回転。

ぶるっと背筋をなでる、己の中にある未知に恐れを抱いた。

軍用ジープには博士と黒服と僕が乗つた。フーリムとミニハウはうるさいから置いてきた。くさいものにはふたをする。うるさいものは置いていく。

病院から五分ほど離れた食堂で、チャーハンと中華スープを飲む。チャーハンは米がぱらりとして玉子がぐつときて塩コショウが効いていてほふつときた。スープはふつうだつた。ふつうでよかつたよ。通常の三倍の遅さで食べる博士を待っていたら、軍の兵士が入ってきて、僕らに銃を突きつけた。

「投降しろ」

なるほど、これがここいらの挨拶なんだな。

黒服の血液悪魔がその兵士を昏倒させ、博士がラーメンを名残惜しそうにしているのを引っ張つて店の外に出ると、バームクーヘンの中心にいるように取り囲まれていた。用意がいいなあ。

「軍に対する反抗は鎮圧されねばならない。そうだろう、デリ口博士」

ざつと前に現れそつたのは、高級感を若干鼻につかせる白い軍服を着た男だ。軍つてやつは男ばかりだ。たまには妖艶な女性に登場願いたい、と思つた。

「きみがきたということは、わたしたちが相当重要な立ち位置にいると理解されたわけかな？」

博士が口をとがらせる。頬には苦さが走つていた。

「ムロヅキからなにか吹き込まれたか。それほどうまい男だとは考えられなかつたが……」

「ムロヅキ？　ああ、あの力エル男かね。あんな奴一人の言動で軍が、ましてや俺が直々に動くものかね」

わりと気軽に軍が動いているイメージのあつた僕は、そうなの？　と黒服に尋ねた。あいつらのことをいちいち気にしないほうがいいぞ、と忠告される。なるほど。

「そこの青年が魔力患者であることはわかっている。すべての魔力患者は軍の管轄におかれなければならない」

どうして？　率直な疑問。

「人が人であるように、そう決められたからだよ。一足す一が二であるように、皆がそういう共同幻想を抱いたからだ。軍の権威も幻想だ。しかしどうやっても従わねばならない幻想だ」

彼の答えは意外にも僕の満足に届いた。本当に意外だった。第一印象からして唐突に軽拳妄動を発し、迂闊さの中で死んでいくタイ

プであると錯覚したが、どうやら多少は生き残るのかもしれない。

「さて、その魔力患者を渡すならば、テリロ博士と絶対共同体には手を出さないと保証しよう」

男の誰に語つていいのか判然としない口ぶりに、黒服は臨戦態勢

で答えた。

「その自信はどこからくるのかな。わたしが作った絶対共同体は、きみらに負けるほどヤワではないよ」

そう言つ博士ではあつたが、なぜか自信はなさげだった。なにかを疑つてゐるふうでもある。僕は、人はいつでも疑心暗鬼になつてよろしいと思うが、博士には似合つていなかつた。

男が腕をざつと振つた。大雑把で軍的なきびきびさはなかつたが、周りの洗練された軍人たちは一斉に反応する。梅干によつて刺激され、唾液がじゅわっと広がるようだつた。

彼は重火器を持っていたが、使われなかつた。後方に待機してゐる連中は静かに構えている。実際に仕掛けってきたのは大型のナイフを持つたやつらだつた。暗殺者もかくやといつた滑り出しで黒服を狙う。

黒服が負ける要素はなかつた。僕の思いというより、習慣としての常識がその判断を下す。軍人の働きは悪くなかったが、蜜を集められても巨人は倒せそうにない。

血の使い魔が正確に頭を打つ。ばつたばつたと昆虫のようにぐつたりする数が増える。

ところが途中で、まだ相手の半分も倒れていないのに、血液悪魔が一時停止ボタンを押された。黒服の動きも鈍くなる。

「なんだと？」

「くつ……」

博士も戸惑つてゐるが、黒服自身も異変に理解が及んでいない。急に衰えた老人となり、蹴りが間抜けなシャドーになる。あつとう間に抑えられてしまつた。

「おやおや、どうしたかね」

愉快そうに男が言った。誰かが愉快だと、どうして不愉快になるんだろう。

「なにを、した」

びりびりと静電気に支配されたように、黒服の体が細かく震える。

「俺はなにもしていない。己の胸に聞いてみたらどうだ」

「まさか、悪魔が？」

博士はぶつぶつと熟考のモードを披露した。こんな状況で大したものだ。皮肉でもあり素直でもあつたが、つまりこれは窮地なのでないかと僕は頭をかく。

「軍と手を結ぶなどありえん。軍を利用する算段をつけた？ いやしかし異方者の不利はいかんともしがたい。そもそも時間の問題だつたとはいえ、革命者が独立した以上、悪魔も人間に合わせたというのか？ やつらにとつて論理的ではないが……。むしろこれからが悪魔の計画の内側に寄せられる、とでも」

お悩みもいいんだけどさ、どうやら連行といひやつらしいよ。

僕と博士は身柄を拘束された。手を後ろに回され、錠をかけられる。博士は気づいていないのか、ぶつぶつぶやきながらされるがままになっていた。あれだと知らないうちに溺れたりできそうだ。黒服は直接拘束具はつけられず、檻に入れられた。動物園にでも連れて行かれるのだろうか。確かにたくさんいる姿は見ものではある。

手を出さないって、言つてなかつたつけ？

「ふむ、確かにおまえを渡す結果にはなつたな。なるほど、約束は守る」

本当に男が部下に指示するのを聞いて、なんなんだこいつ、と僕は困った。

「だが、いったん自由を封じておかないと物事がスムーズに行きかねるのでな。まあ、しばらくは我慢してもらつとしよう。そのうちに解放する。アマイくんだったかな。俺はゼルバ。軍の現場総指揮官だ。短い道中だがよろしく頼むよ」

僕の呪的発声によつて事態を開拓できなくもないと予想はしたが、黒服が動かなくなつたのが気にかかる。僕は僕の能力、病を最終手段にすることに決め、成り行き通りに進むことにした。死にそうになつたら、使うとしよう。魔力は体に満ちているが無限ではないようだし、消費がどういつたものになるのかわからない。珍しく僕はそういう計算をしたわけだつた。僕がおぼえている範囲では、精々最大で五人ばかり殺したに過ぎないのだから。

乗せられたのは軍用ジープではなく、メーカーのわからないセダンタイプだつた。僕は車のメーカーなんてガダビエレしか知らないからどうでもいいけどさ。

わざわざシートベルトを着用され、背中と背もたれで手が圧迫される状況になつた。本気で苦痛だつたが、どうしてかそのままにされた。ある種の軽い拷問だろうか。

やがてたどり着いた軍の施設は、イージー・マスカットに似ていた。デザインも違つたし柵はなかつたが、構造は同じようだつた。中に入れられると、内装もやはり似ていたが、全体的にグレイがかつていて、くもり空を思い出す。ああ、僕は空が好きなんだ、と気づいた。

受付の女性が美人だつたので、ここがイージー・マスカットでないことは確実だつた。もしかしてあのパイぶつけ顔の存在こそが、イージー・マスカットを決定するのかもしない。定義というやつは、簡単に決められるものだ。僕を僕とすれば僕になるように。

軍人以外にも人がいたが、明るい者はいなかつた。気分がよくなつて、これから連れて行かれるとこはどこだろ、と想像を膨らませる。ベーキングパウダーの分量と焼き加減を間違えて、まつたくおいしそうにはならなかつたが、硬そうなパンにはなつた。クッキーを作りたかつたはずなのに、おかしいな。

「ここに入れ」

ゼルバが大きな扉の前で立ち止まる。拘束を解かれた僕は血流をよくしようとマッサージする。

扉は象向けなのか、横幅も縦幅も人類が使うには不釣り合いだった。ドアノブに手をかけて力を込めて引っ張るが、びくともしない。

「押すんだよ」

……ああ、知つてたよ。

それでも重かつたが、なんとか扉は動いた。「じじじ」という効果音すら聞こえる。隙間から見えた様子に反射的に締めてしまいそうになつたが、覚悟して完全に侵入した。

とてもなく大きな広間だった。コンサートホールとして差し支えない。柱があるほかは空間を占める人間以外の物体はない。人間の量が直視できないほどであるが、とりあえずはそう思った。ずらりと並んだ人々。それだけで人間性を排除したかのようだつた。個を読み取れず、集団にすべてが埋没している。顔、顔、顔。

ホラー的な光景に僕は目を閉じてしまった。

「彼らは魔力患者だ。おまえと同じな。ここで一日過ごしてもらう。一日で済まないかもしねだが、それはおまえ次第だ」

なんだつて？ 僕は悲鳴じみた声をあげた。ここにいふと言つのか。

「ここには多少の魔力が供給されている。それだけでおまえらは大した不自由はしないはずだ。言つておくが、魔力の安定供給なんぞ、贅沢中の贅沢なんだからな。ここは牢獄ではない。まあ、ここにいなくてはならないという制約は、牢獄的だがな」

咄嗟に僕は自由衝動に基づいて、呪的発声を行使しようとした。その前にゼルバの腕が部屋の奈落へと僕を落とす。ちくしょう！ 叫んだ。閉じかけた扉でゼルバの無表情が見える。悪魔のささやきのようだつた。妙な直感が僕に靈を乗り移らせる。悪魔が僕をここに入れたのだ。魔力を用意すると言つたのはこれなのか。僕には十分な魔力があるぞ。あの食堂に戻る！ 現実化しない。なぜだ。疑問を浮かべる。魔力が足りないのか。違う。振り返つた。ここにはあらゆる神話性現実化が交差していた。僕はそのノイズに対抗できていないのだ。

ふざけるな！

周りの魔力患者は不思議そうに僕を見ている。その不思議さが僕には不気味だった。

ひつもしない

僕は埋没する顔の一人になつて、途方に暮れていた。

病人だらけの部屋では、誰もが祈つているような眠つているような、それともただ生きているだけのような姿で過ごしていた。嘗みという風は感じず、そこに「ある」置物として存在している。人形と人間の狭間で、ぼんやり糸を眺めている。

胸くそが悪くなつて、僕はスペースを探した。魔力患者で占められた部屋にはどこにも居場所なんてなかつた。必死でパーソナルを確保しようとする。個人を維持しようとする。息苦しさでまいりてしまう前に。

意識はあるのか、縫つて動く僕に視線を当てる者はたくさんいた。だけど誰も話してはこない。席を譲るわけもないだろうが、動きやすいように詰めてくれる気配もない。

広間の限界は近く、扉とは正反対の壁にたどり着く。だからどうしたこともなく、僕はするすると座り込んだ。

とにかく数が憂鬱なのだ、と考える。人は許容以上に集まつたときからごみになる。ごみは捨てられなければならない。

消えろ、きえろ、キエロ。

呪いを吐いてみても、人々の数はいつこうに減らなかつた。

こいつらは、常に神話性現実化をしているのか……？

確かに魔力は供給されているようだった。悪魔に招待された部屋ほどではないが、それを感じる。この最近身につけた魔力感知は僕にとって便利だったが、もしかして元々あつたもので、魔力爆弾による取り込みが雀の涙だったのではないか、と思った。なぜなら、今の状態のほうが、自然であると確信が持てたからだ。体がおぼえている僕のありのままに従うとするならば。

じつと、眼球に力を入れる。可視化できないだろうか。ようやつ

とこの病に向き合つ機会ができたと、強引にこの事態に対する僕の気持ちを片付けて、前向きに捉えるとしよう。そう、ここにはフィカソトリアもいなし、命も狙われていない。別の不快さが横たわっているが、それだけだ。問題は小さくなっているじゃないか。

いくら田を凝らしても、なにも見えてこない。魔力の欠片すら。ちっ、と舌打ち。

ゼルバは一日ここにいろと言つた。あるいは僕次第で伸びる可能性も、なにか解決するべきものがあるということだ。あるいは、自力で抜け出してみろとの挑戦状か。一日で解けるパズルだが、きみはどうかな？　とでも投げかけられているのか。

ヒントがあるとすれば、魔力がここに供給されていること。神話性現実化病患者でこの部屋が埋め尽くされていること。僕自身に備わった諸々。

どれだ？　すべてか？

魔力が流れてくる穴がある可能性。神話性現実化の方向性を揃える可能性。僕が八〇〇〇倍強くなる可能性。

ありえそうで、ありえない。ありえなさそうで、ありえる。これは選択なのかもしれない。武器を取れと言われているのかもしれない。なんだか億劫な話だった。

僕になにができるっていうんだ。

今更のつぶやきを漏らし、周囲のやつらを蹴つ飛ばして、僕はごろんと横になつた。

眠りは訪れない。魔力がカフェインの代わりでもしているらしい。まさかの声で僕は眉を跳ね上げた。僧侶のような白い衣服をまとった女性が、顔の前にしゃがみ込んでいる。

軍の人か、と勘で尋ねる。すると彼女は素直にうなずいた。

「ええ、そしてわたしも魔力患者です。あなたのお手伝いをするように言われました」

手伝い？　軍のやつがここに入れたんだぞ。

「必要だからですよ。あなたはここにしなければならないことがあります」

なんとなくはわかる。でも、なんとなくしかわからない。
これが悪魔の用意した魔力を得る方法だとしたら、「使わなければならぬとき」が迫っているとしたら、面倒なときが迫っている。
しかし、この程度の魔力でいいのか？

わずかずつ満ちてはいるようだが、締りの悪い蛇口でしかなかつた。ぽちゃん、ぽちゃん。

「ここで普通の神話性現実化はできません。あなたは、普通でなくならなければ」

普通つてなんだよ。もうとても普通とは呼べない。ここにいるやつらも、僕も。

「いいえ、数が生まれ、平均が生まれ、感覚が育ち、差別が育ち、自分が自分であると固執したら、もう普通はそこにあります。牢獄はあっけなく、瞬きする間に作られるのですよ」

魔力患者が動き、彼女の背中を押す形になった。しかし彼女は揺らがない。ここの中は空間を占めているくせに、まるでいいかのように、ただ占めているだけのようだ。氣味が悪かつた。

それが物質の本質？

僕は首を振った。本質を巡る戦いは、いつだつて間違っているんだ。

僕に試せと言つのか。超越的にでもなれど。

「さあ？ わたしは手伝うだけです。神から人になつて失われたものを取り戻す病に、祈りを捧げるだけです」

病は病だ。なにも取り返しはない。

「違いますよ。手に入れたから、失ったのです。病は不健康を手にします。我々は健康を手にしていた。健康を否定して、病にかかるば、不健康を取り戻せる」

神は不健康？ そうかもしれない。

僕には神様の話なんてうんざりするもの以外の何物でもなかつた

が、それはちょっと面白かった。

「神話性、つまり超越的想像は、本来現実化してはならない。できないではなく、してはならない。禁止です。大変ですからね。世界より大きい巨人が出現でもしたら、対処は不可能です。ところが、分散によって可能になつた。神話性の分散、役割の細分化、分類。矮小にして可能にすることで、現実化してもよいと許可が出るほどに、神話性は薄まりました。分子になるほどに。その最小単位が魔力です」

一番理解できたのが、「禁止です。大変ですからね」だ。博士の説明はまだましだった。だけど、わかるような気もした。僕の身体、精神にしつとり染み入る部分がある。彼女の話術による錯覚だろうか。うまいとも思えないが、催眠術かなにかにかけられているかもしない。

「……まだ、わたしのことがわかりませんか？」

ふいに女はそう言った。会つたばかりで、わかるわけがない。「確かに会つたばかりです。でもあなたはわたしのことを知つているはずでしょう」「僕は彼女の顔を見た。初めて、いや、前にどこかで、見たな。見たよ。

ああ、ここまで出ている。鼻の奥あたりで止まっている。上あごがかゆい。もどかしい。

んっ！ ぽんと、膝を打つ。

クラマサか。

え、クラマサか？

殺したはずのクラスメイト。記憶を掘り起こして、もはや重機を使わなければ届かない領域まで進み、ようやく掘む。それでもあやふやな思い出しか浮かばない。消しゴムを拾ってくれたのは、きみだつたかい？

「いいえ、わたしではありません。そもそも、あなたは消しゴムを落としていない」

落としたよ。肘がぶつかってさ、机からこぼれないと。

「あなたの記憶じゃない。おそらくサラスナかヒラタかフフクベか、他の人の可能性もあるけど、とにかくあなたの記憶ではない。誰かの記憶です」

「なにを、言つているのか、わからないな。

「あなたは教室で生まれました。一二人の魔力患者によつて生まれた、あそこで。

待つてくれ。あ、待たなくともいい。ん、やつぱり待とう。

「革命者だつたサラスナがあなたを始末しようとした。いえ、違いますね。サラスナは革命者の因子に過剰に動かされてしまったのでしょうか。このあたりはわたしの想像です。サラスナがすべてを予測してあの場にいたとは思えない」

サラスナは僕の友人だつた。

「それはヒラタの記憶？ 彼はサラスナの正体に気づかなかつたけれど、仲はよかつた」

ヒラタはお調子者で……。先が続かない。ヒラタについて、僕はそれ以上知らない。明るいやつだつた。だから？

「フフクベは気づいていたかもしれない。彼は見て見ぬフリばかりでした。最後まで

フフクベは嫌いで、僕はすぐ殴るんだ。殴られたおぼえはない。性質だけスクランプして持つていて。

「あなたのおぼえていない——一人は、サラスナとヒラタとフフクベの記憶を材料の一つにした。混線して、わたしを含めた——自身の記憶も含まれたでしょうね」

きみは、誰だ。

「クラマサです。そこは正しい」

正しいだつて？ 意味のない言葉だ。

なによりおかしいのは、彼女の言うことを僕が納得していることだ。ふつん、ふつんと古い糸は断たれ、より古い糸がつながれる。そつちのほうが丈夫で、懐かしくて、真実をまとっていた。

僕は、誰だ。

「魔力患者——一人のうちの一人、アマガイと置き換わる形で誕生した、神話性の結晶。意思感染による多重魔力患者。その存在を高めないようへりくだり、わたしたちはあくまで紛い物であるとして、そしてアマガイを残す者として、マガイと名付けました」「僕は、アガイだよ。

「そうですね」

あっさり答える彼女に、僕は。
どうもしなかった。

やがて、ふう、とため息を一つ吐く。それがようやくの反応だ。
たぶん、きみは僕に語りたいだけなんだ。今の話で決まった僕の
すべきことは、あの教室から病院へ担ぎ込まれたときより前の記憶
を、役に立たないものとして切り捨てようつてことだ。

「真実から目を背けるのですか？　あなたのものではなくても、偽
りではありませんよ」

真実を直視すると、今度は現実から目を背けることになる。真実
は僕らを構成する一要素に過ぎないんだ。真実は一つしかないかも
しないが、現実はたくさんあるのさ。きみの現実、僕の現実。た
くさんあって、それが困るのだけど、でもきっと向き合ひべきな
は現実のほうなんだ。

僕は自分が饒舌になつてゐると感じた。やはり多少の衝撃は受け
ているのだろうか。彼女の言つていた大半は耳を通り過ぎて行つた
だけだし、断片的だつたが、僕の根幹たる部分に触れて、理解をも
たらしていた。

おそらくだが、僕は複数の神話性現実化病患者によつて創られた、
いわば人造人間なのだろう。ふーん。まあ魔力と人手があればそこ
まで現実化できるのか、くらいに思つ。戦争を終わらせる云々言え
るのならば、可能是可能だう。

「現状で最も現実を左右できるあなたに言わせると、説得力があり
ますね。あなたなら、真実を捻じ曲げることもできるかもしれませ
んし」

捻じ曲げられたら真実じゃないだうに。僕はなんだか疲れた。
言葉を自由に使われると、混乱してしまつよ。自分のことは棚に上
げてホコリだらけにした。

話に付き合つてゐる間、物事はこれっぽっちも進んでいない。＝

ジンロ一匹も。粒子ほども。こんな閉じられた空間で密集の憂き田に呑わせて、恐怖症だつたらどうしてくれる。
不自由だなあ。

考えてみれば、僕は一度も自由を感じたことがなかつた。相対的に不自由を感じるばかりだ。さつきの不自由よりもさらに不自由に。不自由スパイラルだ。螺旋をわずかに戻つたところで、大して変わつてない。

ここから脱出するべきだ、と思つた。僕は別にきたくもないところへきては、脱出ばかりしている。

どうしたものか。どうする？ いつだつて突きつけられるのは、その問いただ。

周りの魔力患者に動きらしい動きはない。」いづらは本当に生きているのだろうか。協力が取り付けられれば、あるいは。まったく話しかける気は起きなかつたが、なんとか振り絞つて一人の肩を叩いた。叩けた。うん、叩けるのが奇妙に思える。ややあってから、緩慢にそいつは、はいと返事をした。なにを話せばいいんだ？ ええと、なにをしているのかな。

「なにも」

きみはどういった形で現実化させるの。

「まあ」

……ぱーか。

反応は返つてこない。無機物のほうが面白い粘りを見せてくれるというものだ。何人かに試してみたが、まったく同じだった。第一印象通りの没個性集団だ。泥沼に沈んでいくよつて気持ちが悪かつた。

クラマサを見る。彼女は他とは違う。手伝つとも言つていた。なるほど、瞳に宿る光からしても個性はあつたし、殴れば響きそうではあつた。

手伝う、か。

「どうしました

僕は彼女の手を取り、そのへんの適当なやつに接触させてみた。僕に伝わってくる抵抗。ぐいぐいと押しつけてもみる。彼女は平気な様子だった。

きみは、見えているのか？

「なにをでしょ？」

こいつらがや。

「見えていますよ、もちろん」

何人？

「何人……」

彼女の目線が左右揺れて、とにかく止まつた。

「……わかりません」

そうか、僕はわかつたよ。真実かどうかは知らないが、現実は。これは幻覚みたいなものだ。博士が言っていたのは、暗示だつたつけ。とにかく僕が見ているこいつらは、本当はいない。クラマサの様子からして何人か幻覚じゃないやつが含まれているかもしれないが、面倒だから確かめるつもりはない。ここから出られれば、それでいいのだ。

試しに両手を広げ、ぱちんと手のひらを打ち鳴らしてみた。変化なし。素人が五円玉を揺らしたところで、という話か。

ここに飛び交っている神話性現実化の妨害は、万能だらうか。ここから直接出ることはできなかつたが、魔力が供給されている以上、まったく使えないはずはない。

うつとうしい幻覚なんて、破れる。

一瞬、視界がぶんつと明滅した。驚いた顔の魔力患者がちらほらいる。だが数は圧倒的に少ない。すぐに陰鬱な世界へ戻った。惜しいな。

「もうからくりはわかつたようですね」

あとは力の入れ具合か。

ここに神話性現実化の影響が及んでいることは間違いない。さきほど垣間見た魔力患者たちが、僕を妨害しているようだ。律儀に幻

覚を維持し続けている。いい加減この連中から離れたかった。

僕が強力な神話性現実化病の持ち主と言うのならば、このくらいあっさり打ち破る力があつてもよさそなものだ。それとも口だけか。おまえはやればできる子なんだよ。いいえ、僕はできない子です。

できない子のだいたいは、やらないだけだ。

とすると、やれるのかもしれない。記憶を探る。確信を持てるパスルのピースを手に取る。呪的発声、静的思考、概的感覚。多重魔力患者。僕は誰だ。

わからないが、やつてみよう。要素は揃ってるんだろ？

魔力の流れを感じる。霧雨の一滴。僕の容量はがばがばに空いている。構成は単純で、願えば望みが叶う。高ぶる。天使が降ろす。呪う。知識にあるあらゆる願い方をしてみる。神話性へのアプローチ。神へ近づく一手段。不健康になる。失う。進化逆行する。退化する。

神へ退化する？

僕はいつの間にか閉じてしまつていた目を開き、幻覚を打ち破るべく魔力を行使した。

世界が歪む。いや、正しくなる。偽りの魔力患者はどうどう溶けて、幾人か本物の人間が姿を現す。

「こんなに簡単に？」

簡単じゃないさ。やつたらできただけだ。

クラマサに答える僕の声は、みなぎっていた。全能感と無力感の間で、針がぴんと一一時を指している。僕にはなんでもできるし、なにもできない。デジタル。レイカイチ。結局はそこそことんだる。アナログ。ある程度をふらふら。

部屋は軽く走ればすぐ壁にぶち当たるほどになり、疲労を見せる魔力患者と立ち尽くしているクラマサと現実感に溢れた僕だけになつた。

さて、帰らせてもらおうかな。

「どこに？」

ふむ。僕に帰るところなんてない。どこに行くか聞かれる前に、僕は自問自答すべきだった。帰るとか、迂闊に言うものじゃないね。どん、どん、と扉が重いノックをされた。と思つと、すぐにこなごなに碎ける。扉の扉たる優雅さと役割を踏みにじつたのは、ここにきてほしくない筆頭だつた。

「帰ろう、アガイ」

フィカソトリアが僕に手を差し出す。無視して元扉を中心にぼつかり空いた穴から部屋を抜けた。
道がわからないながらとりあえず歩く。どこかに案内板でもないだろうか。

悪魔に動かされているような気がしてならないが、だからといって僕の待遇がよくも悪くもなるとは思えなかつた。違うか。これ以上悪くなるのは当然で、悪魔に反抗したところでよくならない。これだ。

「せっかくきたのに、一言もなし、なの？」

フィカソトリアが後ろから圧力をかけてくる。悪魔よりこっちのほうが問題だ。

おまえと話すと減るんだ、色々。

ぞろぞろと軍人が僕の前に立ちふさがつた。連鎖で倒れるとかなり爽快感を得られるのではないかといつ並びつぱり。

「まだ用は済んでいないのだよ」

ゼルバがぬつと現れた。

これは脅しなんだけど、僕はここにいる全員を葬る方法を見つけたんだ。もう大人しく帰してくれないかな。

「なるほど、多重魔力患者としての力を發揮できるようになつたか。しかし魔力がもつかな？」

フィカソトリアをちらりとうかがう。

「都合、よすぎ」

ふん、とそっぽを向かれる。僕にも制御できないじゃないか、悪

魔さん。

「おまえにはもつと必要なものがある。なに、そういう時間は取らせんよ」

「ひしひへじこと手招きするゼルバを、僕は怪訝に思つ。あんたはいつたい、どういうやつなんだ。

「おまえが片付けてくれると助かる課題がいくつかあつてな。どうやればいいか教えてくれる存在が俺のもとへきた」

警備が留守番か、直立不動の兵士に、「苦労と告げ、厳重にセキュリティがかかっている場所にゼルバが僕をいざなつた。やや豪華で清潔な牢屋といった部屋がいくつもある。そのうちの一つが開かれた。

今度こそ本物の魔力患者が、五人ほどいた。皆不安げにこちらを向く。あきらかな人間臭さで、僕はほっとした。

「一部だが、ここには軍の保護している魔力患者がいる。おまえに全部を処理してもらおう」

シヨリ?

野菜でも剥くよつな響きに、僕は首を傾げた。

不健康に慣れそう

ここにいる魔力患者たちは僕とそう変わらない、迷いがあれば悩みもあるし、戸惑いや怒りや哀しみや空腹を感じている連中に思えた。処理という単語が相応しいとは思えない。思えるか思えないか。僕が生きるうえでかなり大切な要素だ。

「魔力患者は実に厄介なのだよ。神話性だか現実化だが知らないが、簡単に我々の生活を乱してしまう。はつきり言つて革命者よりも邪魔なんだ。形だけでも保護しているのは、野放しにできないからだよ。上層部は利用価値があると考えているかもしれないが、俺はこいつらを消してしまいたくて仕方ない」

まくし立ててから、ゼルバはにやりと唇を吊り上げた。金持ちや権力者、まあ権力者はだいたい金持ちだが、そうしたやつらに特有の、一種の余裕があつた。

「これは俺の個人的な感情だ。組織なんぞどうだつていいが、軍人としては市民を守つたほうがいいんだろうな。くそくらえだ。迷惑なやつは全員死ねばいい。俺は現場を預かる指揮官で終わるつもりはないから、まだおおっぴろげには言わないがな。戦争中でも、言動に気をつけんと偉くなれない」

結局のところなにが言いたいのかわからぬ。僕になにをさせようつていうんだ。

「俺は悪魔と契約した」

「俺も自分を笑いたいよ。ようするに、実力で成り上がるのをやめたわけだ。軍の上層は詰まりっぱなしでね。空きがなかなかできない。できないならば、作ればいいというのが俺の考えだ。そして目的のためには、最も確実な手段を選ぶ。悪魔は俺たちとは別な倫理

や価値観で動いていいるから、うまくやれるはずだ。とはいっても、さきに持ちかけてきたのは悪魔側だが」

さつきからあんたは自分の話ばかりしているよ。僕が聞きたいのは、僕についてのことなんだ。

「背景から始めてわかりやすくしようとしていたのに、語りがいのないやつだ」「

ゼルバが肩をすくめる。フィカソトリアが静かだな、と思つたら、ちゅうちゅうと部屋をのぞきまわつてゐる。放つておくのが最善なのだけど、放つておかざるを得ないといのが最悪だ。

「悪魔はおまえを使えと言つてきた。おまえが戦争を終わらせる。そういう役割を持つとな。まったく氣に入らん言い草だが、なるほど、俺は戦争などどうでもよくて、早く終わるに越したことはない。問題は終わらせかたで、軍の上のほうが適度にやられてくれればいいわけだ。悪魔はそれを約束してくれた。少なくとも助力してくれるとな。悪魔が求めたのは、軍の保護下にある魔力患者四六七三人だ」

なんか増えていないか。僕が聞いたときはもつと少なかつた。「魔力患者は増え続けている。魔力爆弾の投下量を多くしたしな。市民の半数は予備群だというから、もつともっと増えるだろう。おまえにはそれを全部処理してもらつ」

その処理というのがわからない。具体的には?

「魔力を取り込むのさ。神話性のとな。悪魔は病を喰うと言つていた」

不健康になる。神に退化する。

僕の頭がうずいて、しきり訴えてきた。存在を問う根本理由。おまえはそのためにいるんだろう? と僕を創つたやつらがうるさい。こんなときばかり、人の記憶に出てくるんじやねえよ。

「俺に方法はわからない。わかるのはおまえだけだ。クラマサとかいうやつもわからないはずだ。ま、こんなものかな。俺のお知らせは。とりあえずここにいる魔力患者どもは好きにしていい

ゼルバは去つていった。この世界のどこにでもいる好き勝手な人だ。野心に振れ幅は寄つてはいるようだが、僕とそう変わりはしない。つまりはあいつがさも物のように扱つてはいる魔力患者とも。馬鹿らしいところで僕らは平等なのだ。あるいは、それこそが平等の使い道だ。

幻覚を破る過程において、僕は複数の神話性現実化病行使できるようになつてはいる。僕が生まれる際、あえておじつた言い方をするなら僕の創造主たちが僕に意思感染させた神話性現実化病だ。おそらく呪的発声は、アマガイのものだったんだろう。憶測は憶測でしかないが、僕の憶測は当たる。自分のことだしね。腹のあたりが痛いなら、腹のあたりに異常があるのは確実だ。昨日食べた酸っぱいおにぎりのせいかな。そのくらいの憶測。

基本は現在の僕として、応用すれば病を食べることができるのかもしれない。口を開けて粥が入るのを待つていた赤子から、スプーンでプリンを掬う子供へ。

さて、試してみるのが早い。僕は怯えを見せる魔力患者たちに近づき、考えつくかぎりの方法でやつてみた。神話性現実化病や、祈り、シンクロ、会話。現実化が最も効果があつたが、どうも根こそぎ病をはぎとつてはいるという感じではない。たんに魔力を奪つたり、病を抑えつけたりすることしかできなかつた。

「なに、やつてるの。楽しそう」

興味深げにフィカソトリアが僕のところにきた。おまえのものをいたぐだとか奪うだとか呪的発声でぶつぶつ言つ僕のどこが楽しめなかわらない。

いや、そうか。まだ僕は呪的発声でしかうまくやれていないので、幻覚を破つたときのように複数の神話現実化病でなら、やれるのではないか。

やつてみたら、できなかつた。

あれ。ぶつんぶつんと、雑音が入るよつに僕の病気は病気足らぬい。うまく健康を損ねられない。

魔力がないのか。第七感に集中して、原因を特定する。

まいつたな。さつきの部屋に戻るべきか。しかしうまく言えないのだが、それでも足りない気がした。僕は魔力に飢えをおぼえている。塩水を飲み続ければ喉が渴くようになる。まさか麻薬的な効果があるのか。どんどんどんどん、ほしくなる。

ふと、足元に奇妙な生物がいるのに気がついた。植物のようでもあつたが、半裸のおっさんのようにもあつた。合わせて考えると、草花で装飾された半裸のおっさんだ。しかも小さい。高さはくるぶしにも満たなかつた。左足に一人、右足に一人いる。

ぱらりと、天井から砂粒が落ちてくる。今度はそちらを見やると、なんだか天井の一部が崩れてきていた。やがてぱっくりと、左右に割れて、青い空が見えた。うん？　ここは何階建てだろう。ここは一階建て部分しかないのか。

がしり。足が掴まれる。おっさんが僕の靴の下に指を入れ、持ち上げた。いともあつさり僕は浮く。最近、というか生まれてからこつちあまり食べていないから、体重軽くなつたかな。

ぶつぶつと重く空気が振動した。外から聞こえてくる。ああ、飛行機が上空を通過しているのだろう、と思っていると、僕は飛んだ。

天井の穴から空へ。

ええ？

驚きによる支配はやつてこなかつた。ただぽかんと漂う。飛行機が見える。なにか落ちてくる。くすだまのような物体。ぶつかる。ぶつかる。ぶつかつたら死ぬんじゃないだろうか。くすだまの質量。重力加速。僕の脆さ。

僕とくすぐさまが接触しそうになる。直前、くすだまが割れた。おめでとうという垂れ幕でも出でくれば冗談で済むだろうか。割れても僕は死ぬ、などと考えている時間もない。

光と闇と煙を混合した空氣的なわからないやつが、僕を直撃した。僕は溺れる。ぶろろ、ぼるむぶ。そして落ちている。死なずに落ちている。落ちたら死ぬ。

また元の魔力患者たちの部屋へ重力は僕を戻す。

地面への激突を防いだのは、フィカソトリアだった。

「お姫様、だっこ」

両腕にかかつた負荷はとても人が支えられるものではないが、まあこいつは人じゃないからな。納得しかけて、納得するのがおしくなった。フィカソトリアに理解を示すようで。

「ねえ今のお姫様だっこ、だよ」

ちよつと興奮した様子を見せる彼女にやりきれないものを感じつつ、腕から逃れる。お姫様、お姫様、とはしゃいでいた。王制反対。僕は魔力が体に十分宿っているのにびっくりした。これまでにない充実。あれは魔力爆弾だつたのか？ 悪魔が魔力を用意すると言つていたのは、さつきの部屋のことではなくて、これのことだったのか？

考えるのが億劫になつてやめた。だいたい考えるなんて、そういういつもやつていられないんだ。

神話性は薬指を曲げるより簡単に現実化された。下手をすると、僕の一つの言葉が現実化しそうな勢いだつた。

魔力患者の病が僕に吸収され、彼らは普通の人になつていく。元魔力患者、なんてレツテルを貼ろうと思えば可能だが、意味があるわけでもない。前世があるとして、元虫なんて名乗らない。名乗らせない。

米の一粒一粒を茶碗から箸でつまむ。ここにいるのは百人といつたところか。まだ四十倍以上いるのか。面倒だ。こう、しゃもじで、がつといけないものか。しゃもがつと。

終わつてもゼルバは現れなかつた。てっきり監視していると思ったが、あいつに残りの魔力患者の場所を教えてもらわなくてはならぬい。

自然、僕は戦争を終わらせよつとしている。なんとも奇妙だった。いつからそんなにやる氣のある男になつたのだろう。組み込まれている？

魔力を手に入れたことで、スイッチがオンになった可能性があるのは確かだつた。遺伝子のように。もしや僕を創つた目的がそれだとすれば、本能かもしけない。

気に食わないな。

僕は自分に逆らう方法を模索し始めた。

聞とねじれ

一枚の地図が空から舞い降りてきた。啓示のようで腹立たしかつたが、受け取る。乱暴に掴んだので、ぐしゃぐしゃになつて読みづらかつた。

僕は地図を把握する能力に欠けていた。そうした性質をあらかじめくんでいたのか、地図には目的地のところにぐりぐりと濃い赤丸がしてあつた。童話じみた地図だな、と思った。

不思議な市役所に出かけるように、僕は地図の場所へ向かおうとする。どうやってかわからないが、向かおうとする意思はあつた。はたと、テレポウティションが魔力によつてできるのではないかと気づく。赤丸の場所そのものはわからないが、近くのファストフード店はどうやら知つているところだ。それは僕を構成する魔力患者の記憶で、他人の口蓋を利用してゐるみたいな感じが氣色悪くなつてきたが、仕方ない。

ファイカソトリアを連れて行くべきなのだろうか。どうせ置いていつても、またこいつはくるんだろうな。諦めと割り切りの果てで、僕は彼女を手招きした。

なげなしの勇気で肩を引き寄せせる。ファイカソトリアが僕を、虚無の反対の瞳で見た。虚無の反対はなんだ。みつちり有かな。

もはや意識の第一層に足跡をつけようと/or>するだけで、僕はファーストフード店へ飛んだ。走馬灯のごとき景色と隣あつてゐる絶望的象徴に、このまま死を迎えるのも悪くない気分になつてくる。考えてみれば、僕は生きて数日なのだから、一日なのだから、死を覚悟するのはおこがましいのだけど、むしろ一番覚悟のできる年齢だとしてもおかしくない。覚悟なんて、できないほつがいいんだ。ぼくはまだできないそこないだ。

僕らが出現したファーストフード店はずいぶん閑散としていた。

店員すらいない。だとしたら営業していないということになるが、「やつている感じ」はする。ライブ感だ。整列された椅子ですら、空気がよつこいしょと座っている。オーディエンスとバンドメンバーを引き抜いていても、空間に漂う匂いは消されていない。

熱気と束ねられた短い杖が、ここにはあった。ひとつそりとした静けさと、どつさりとした騒がしさが同居している。矛盾を体現したような場所だった。

フィカソトリアがとことこ歩いていき、白い柱を拳でとん、と叩いた。すると、ごふ、と吹き出す音がして、柱からなにかがはがれた。

忍者かな、と確かめると、忍者っぽいなかだつた。迷彩が解けて人のかたちになつていて、忍者でもない。

一斉に壁からやらなにからやら、忍者っぽいやつが出てきた。パチモン戦隊だ。本物に許可をとつていてのならいいけどな。

いちいち相手をするのも面倒で、外へ逃げる。僕の頭の中は、望めば入つてくる情報で忙しくなつていた。いたさか退屈になるほど、僕は退化しつつある。

忍者もどきの異方者たちは、フィカソトリアに順調に撃破されていった。頑張つて望まないようにしているのか、彼女についての情報は全然入つてこない。プライバシーが保たれているようでなによりだ。

僕は目的地である刑務所に向かつた。好んで行きたくもないところだが、赤丸で示されているので、まあ、行くべきだろう。そこに魔力患者たちがたくさんいることがわかつていて、やらなくてはならないことが山積みだ。遺伝子に従つて、飯を食べて排泄をして睡眠をとる以外に従う行動なんて、まったくうつとうしい。

守衛らしき人物がいる。眠らせるか氣絶させるか、ああ、気づかれなればいいんだ、と僕は姿を消して、そのまま通り過ぎた。想像が現実になる。思いのほか想像というのは不自由だと思った。もつとうまいやり方があるだろうに。

刑務所はどこか病院に似ていた。病院よりは生活の匂いがした。
健康的で、健全な。

そこにいた人々は、みんな魔力患者だつた。保護じやないんだ。
罪人扱いか。余っていた施設なんだな、ここは。そう、戦争中で、
捕まえるより撃つほうが早いんだ。だから空いている。吐き気がす
るなあ。

会う端から奪つていぐ。喰つていぐ。僕は魔を用いて神に近づく。
単純で退屈な存在へと。

いつたいぜんたい、どこから神様なんて持ち出されてきたのだろう。いつの間にかいたそいつは、僕や世界に住み着いて、勝手気ままに運命を振り回して暴れまわっている。警察は逮捕すべきだ。法のすべてで。市民は対抗すべきだ。嘗みのすべてで。経済は対処すべきだ。幻想のすべてで。

厄介な話だよ、まったく。

おっぱいを離さない赤子のように、僕は現実を作り続けた。魔力患者の患者たるゆえんは僕に吸収されていく。星を数えて、途中でやめた。三より先の数は、手に負えないんだ。ちゃんと右手に五本、左手に五本、指はあるんだけどさ。指と脳は、必ずしも連動しないようだね。

どんどんどんどん、どんどんどんどんどんどん、太鼓のリズムで僕は侵されていくし、侵していく。犯していく。これはレイプなんじゃないか？　ここにいる誰が、「私からこの病を取りさつてください」と言った？　勝手に奪つていぐ。もしかしたら自由だつたかもしれないものを、出そうな杭を打つているんじゃないかな？

僕は自分がシステムになつていてを感じた。高まっていく、全能になつていく恍惚と、果てしない連續性に抗う蔑み、普通と特別をがちがち戦わせる歯車に、混乱する。

ああ、僕は人でありたいとも思わないが、神になりたいわけでもない。でも、僕はどちらか極端なほうしか選べないと宣告されている。言葉がそう決めている。いやだ、いやだ。僕は間にいたいんだ。

ねじれにいたいんだ。アイダ・ネジレ主義だ。

軍の管轄下にあるすべての神話性現実化病が僕のもとへ収束するしつつある。した。

だから、なんなんだ？

嵐のように刑務所内を抜けて、僕は止まつた。外にいた。外のはずだ。ここが内で、刑務所が外だったとしても、なんらおかしくはなかつたが、ここが外だと信じずに生きるのは億劫すぎた。力がみなぎつている。しかしその力が、僕が僕に逆らうための助けになつてくれる余地はなさそだつた。

タン、と銃声がした。足元のコンクリートが削れる。タタタタタタ、と連射。狙われていた。

一発目で殺せなかつたら、ダメだろ。

僕の意識は防御態勢になつて、ことごとく攻撃を弾いた。殻に閉じこもるイメージ。人間の可能性では、僕を殺せない。僕を超える想像力を、ここでは持つているやつがない。

接近戦を挑もうとしているのか、何人かが僕へ駆けてくる。失せろ、と念じると、存在を消失させた。そのあつけなさに、胃袋がきしむ。

脆すぎるじゃないか。

可哀そうな異方者たち。悪魔の協力を失つて、半端な抵抗を続けるしかなくなつていて。僕までたどり着いただけでも、褒めてやらなくてはならない。

帰れよ、帰れ。

しつし、と全員それぞれのつながりある場所へと移動させる。いつも容易く、誰もいなくなつた。

……つまらないな。

「アガイ、大丈夫？」

フィカソトリアが、珍しく憂いを帯びた表情で近づいてきた。

珍しく？ 僕は彼女の表情なんて、注視したことがあつたつけ。

今なら彼女を、いとも簡単に、長い爪を噛むように殺せるだろう。

死

ぐぐぐ、と思考にブレークをかける。

いいのかよ。そこまでこいつにいなくなつてほしかつたか？

思つちやだめだ、思つちやだめだ、と思つほど、禁止の内容を思
いたくなる。ずぶずぶ沼に沈む。呼吸困難になる。頭を打ちつける
手ごろな硬さを探した。地面まで頭を移動するのが面倒だ。くそつ。
「危ないよ」

倒れそうになつた僕をフイカソトリアが支えた。いつそ倒れたほ
うがいい。邪魔しないでくれ。

はあ、もうや、もう、全部反射でいきたいんだよ。

フイカ。

「ん？」

死ね。

一番得意な呪いを僕は口にした。

平然としているフイカソトリア。

「死ね？ 死ねって言われて死ぬ人は、あんまり、いないよ

こともなげに言つ。そりやそうだ。そうだけどさ。

僕は泣いた。どうして嬉しくも悲しくもないのに、涙が出てくる
のだろう。

「どうしたの。つらいの？」

ああ、つらいのかもしれない。

アマガイが、神になれ、と叫んでいる。こいつの望みはわかつた。
一二人、いやクラマサはちょっと違つたようだから、一人か。三
より上の数なんて、たくさんで済むけど、まあ数えてやるう。そい
つらの希望は、たぶん、すげえことをやりたい、って話だったんだ
らうな。

僕の望みは違う。とりあえず、ご飯を食べて、眠りたいよ。いず
れ死んで、もうこの世には生まれたくない。

なあ、フイカ。おまえはなんで、僕と一緒にいるんだ？

「好き、だから」

「謎だな、それ。

「理由って、ないんだよ」

ははは、と僕は乾いた笑いを漏らした。僕はおまえを嫌いでいた
いよ。理由なく、果てしなく。

さて、僕はすでにこの戦争を終わらせる力を手にしているのかとも思ったが、そうは問屋が卸さないらしい。だからといって、生産者から直接消費者に物が売られるわけでもない。流通がうまくいかないねえ。

確かにどんなことでもできそつではある。同時に不可能はあくまで不可能とも思う。フィカソトリアは死ななかつたし、世界の現実の耐久度は、僕があつさりぶち壊せるほどやわじやないようだ。

フィカソトリアが死ななかつたのは、僕の呪いより彼女のほうが強かつたからだろう。全力で願つてみたらどうなるのか、試せないこともないが、どう想像しても彼女は死にそうになかつた。僕の想像力なんて、貧困なのだ。限界の底がすぐ見える。僕ごときの想像で消えてしまつた諸々には申し訳ないが、それはそれだ。

「おーい」

聞いたことのある声がする。遠くで博士が手を振つていた。
くるのを待つてから、挨拶する。久しぶり。

「別れてからそれほど経つておらんよ。四時間といったところか。いやいや、まさか悪魔が軍に協力するとは思いもよらなかつた。正確には、予測の筋がないこともなかつたが、優先順位が低かつたので失念していた。絶対共同体は悪魔の技術でできているのでね。そりや動けなくなるはずだ」

黒服の姿はなかつた。あいつらがいてくれると、けつこう安心するんだけどな。しかし、どうしてこの場所がわかつたんだ？

「ゼルバが教えてくれたよ。ふむ、現場レベルでは軍まで戦争終結に動いている。まさに時間の問題だ。異方者については、バランスを考える必要はあるまい。革命者の力があれば、軍に好き勝手させることもない。フィカソトリアがいれば、確実に。なるほどなるほ

ど、都合がよくなつてきた。では、我々も終わらせるために行こうか

終わらせる？

言葉を反芻させた。口から胃へ。胃から口へ。あつちいってこいついってよいよい。それでもうまく消化できなかつた。風が頬をなでる。今まで風なんて意識していなかつた。なんて清々しいんだろう。晴れている空から、水が一滴ぽちちゃんと肌に当たつた。天気雨かな。これっぽつちじや、シャンプーもできないよ。

「どうしたのかね」

博士が顔を覗き込んでくる。僕を虫眼鏡かなにかのよつて。集まつた太陽光が僕を通して色んなものを焼けばいいのに。

どうやって終わらせる。僕の力が、あと倍くらいにならないと、どうにもできない。

「倍でいいのかね」

四〇〇〇倍くらいにはなつたよ、今の僕の力は。いちいち説明するのはいやだったので、とてつもなく端折つて現状理解させてみる。悪魔と軍に魔力患者を押しつけられてどうこいつ。

「ははあ、多少は聞いていた話だが、なかなかにひどいな。やつらが増やしたのになんというずさんさだろう。魔力爆弾が革命因子の活性化を抑えているのだとしても、釣り合わない結果だ」

僕がやつたのは残飯処理みたいなもんかな。

「しかし君が力を手に入れたことも確かだ。収束は好ましくないが、この際目をつぶろう」

だといつて、力はまだ必要なわけだろう。これ以上どうしたらいいんだ。

「しらみつぶしに魔力患者を探索してもいいが、一つアイディアを思いついた。ようするに、君の力を効率的に扱えばいいわけだ。戦争を続けている要素をピンポイントで排除できれば、きみの神話性現実化を無理なく使えれば、一気に片付けられるかもしれない」

そういうことができるなら、八〇〇〇倍っていう計算を発表しな

いでもらいたいんだけど。

「思いついたのは、ムロヅキと出会ったからだ」

「ムロヅキ？ あのカエルか。

「そう、あのカエルの虫、情報収集能力を活かせば、可能だ」
いかにも無理っぽそうだが、ぐだぐだしているとまたどこかへ連れ去られそうなので、僕たちはとりあえず移動することにした。
先にムロヅキを探していた黒服から連絡が入る。どうやらカエルは軍と一緒にいたようだが、黒服が交渉するとあっさり引き渡されたらしい。手のひら返すなあ。いや、もともと軍がムロヅキに好意的だった保証はないか。

半壊したイージー・マスカットで黒服と合流すると、ムロヅキは大人しくしていた。ケロケロ鳴いてもいなし、肌を粘膜でてらてらさせてもない。せっかくカエルなのに。

「今なにか失礼なことを考えませんでした？」

心を読むとはちょこざいな。

「ムロヅキくん、きみは戦争を終わらせるのには賛成なのだろう？
我々に協力してくれんか。軍も同じ方向だ。別に革命者の勢力が衰えるわけではないが、強力になるわけでもない。それほどきみの誇りを傷つけることになるまい」

「誇りなぞありません。あるのは納得と選択です」

撫然としてムロヅキは言った。こりや説得はできなさそうだ。

ここつて洗脳施設なんだろ。なんかこいつ、虚ろな瞳にできたりしないの。

「わたしは専門外でね。どうしてもというなら、できなくはないが、廃人になるかもしれない」

俳人になるならよかつたのにね。

「平然と危ういことを離さないでくれますか。本人の目の前で」

「じゃあ、僕がやろうっと。

「あつ」

フィカソトリアが声をあげたが、無視をした。

言つことを聞いてもらえればいいんだ。やつすぎなによつに意識を研ぎ澄ます。自覺的に非道になるのは、つらいが、気軽さを適度に含めて料理すればいける。

「なにを……」

ふ、とムロヅキの意識を奪い、次に起きたら、もつ彼は僕に従つよつになつていた。だらしない表情と、期待通りのつづるな目。はい、つて言つて。

「はい」

とても素直です。従順です。

これは、思つたよりひどいな。

誰かの自由を踏みにじり、不自由にする。束縛する。家畜にする。これほど恐ろしいことがあるだろうか。でも、人間はやつてきた。僕もやつた。やらなければよかつたかな。後悔した。後悔、罪悪感。なんで先に立つて僕を止めてくれないのか。やはり完全じゃない。人間は。システムは。間違つようにできている。

ムロヅキに指示をして、虫を飛ばす。博士が細かく探る場所を決めた。

そこへガラハロンドルが現れたのは、どうやら約束通りだつたらしい。しかし約束が守られても、予定通りにはいかないようだ。

「洗脑子が逃げ出した」

息を切らしたガラハロンドルはそう言つた。笛を吹いていたみたいだつた。

「抑えられなかつた、といふことかな」

「管理は徹底していた。しかし……ぼくは間に合わなかつたからなんとも説明しにくいが、やられた仲間を見るに、奴らはまた強くなつていた。拘束を尋常ではない力で引きちぎつたようだ」

尋常なやつがどんどん少なくなつてゐるよな、と僕は思つ。

「洗脑子か。ここにきて問題がまた増えたな」「気をつける。あいつらの狙いが我々の他にいるとしたら、きみらだろう」

待て、そもそも洗脳子の目的は、革命者を超えることなんだろう？ もう達成しているじゃないか。

「いや、ただ一人、彼らが超えていない存在がいる」みんなが一斉にファイカソトリアを見た。

「なにか顔に、ついてる？」

とぼけている彼女に僕らはため息をついた。彼女が負ける姿なんて思い浮かべられないが、僕らにとばっちりがくる可能性は否めない。

「ダン、と銃声がした。人の声より銃の声のほうが聞いているんじやないか。

弾丸は的確に僕の心臓を捉えていたが、ファイカソトリアが叩き落とした。どうやってかは僕も知りたい。石をぶつけてだつてさ。もうなにも言及する気にならないよ。僕が精神的な力の極致にいるとしたら、彼女は肉体的だ。どっちがすごいかといったら、あっちのほうがすごそうだ。

イージー・マスカットは一二〇度くらいウェルカムな状態だったが、洗脳子は元玄関のあたりからゆらりと歩いてきた。無言だった。名乗りや宣戦布告はない。ゾンビよりも静かに迫ってくる。

「様子がおかしいな

博士が眉をひそめる。

僕らも傍から見たらおかしいのかもしれないよ。

「言つても仕方ない。戦意はあるようだから、逃げるのでなければここでやるしかないぞ」

ガラハロンンドルは僕たちと距離を取った。分散するつもりだろう。しかし洗脳子たちはまっすぐ僕の、いやファイカソトリアのほうへ向かってくる。

「眼中にないか。このつ

銃を抜き、ガラハロンンドルは発砲した。一人の右腕に当たる。歩みは止まらない。続いて右脚に。一瞬、歩みが止まる。しかしそぐに再開。

「なんだと……？」

「あの再生能力か。どうにも速くなつてないかね、治るのが。非常に厄介だぞ」

博士の言葉が耳に入る前に、僕は止まれと発声した。鈍くなつた気がする、が、止まりはしない。複数の神話性現実化病を重ね、さらに行使する。ほとんどが歩みをやめたが、一人ほどまだ進んできていた。

おいおい、これはきついぞ。

完全に止めることすらできないなら、殺すこともできないだろ？
僕、全然強くなつてないんじゃないかな？

動く二人に対し、フィカソトリアが深い踏込み。一方にはえぐるようなアッパー・カット。ぐらうらん、と頭が安っぽいおもちゃのように揺れる。もう一方にはハイキック。めきつといやな音がして、たぶん、頭がい骨が壊れた。

ところが、二人はビデオを逆再生したように態勢を整え、フィカソトリアを捕まえた。彼女の腕が引っ張られる。その間にローキックをあつけなく決め、脚の骨が折れるが、腕は引っ張られたままで脚もすぐに治った。

おいおいおいおい、もう別な生物になつてるぞ。

僕が動搖すると、他の連中が金縛りを解いてフィカソトリアに襲いかかつた。嘘だろ。継続的に現実化させないといけないっていうのかよ。しんどすぎる。

それで僕は気づいた。こいつら、魔力を使ってやがる。僕の現実化に、抵抗している。

宣言

フィカソトリアが洗脳子を勢いよく振り払うと、洗濯機のように回転して離れた。洗脳子は俊敏さをいさか失っていたが、どこまでも食らいつくようにしつこい。躊躇どころか動作と動作の間のタメがなく、大量の泥が迫つてくるような脅威を持っていた。

神話性現実化病に感染してるつていうのか、こいつら。

僕は動きを止めつつ、病を取り込もうとする。一体ずつであれば、対処できるはずだ。血の使い魔が、何人かの足に絡みつく。ガラハロンドルも援護はしてくれていた。博士もなんかやつてくれよ。

僕が取り込むスピードは軍の施設のときより圧倒的に遅く、縄引きでわずかに勝っているにすぎないもどかしさだった。無抵抗の彼らと戦いを仕掛けてきたやつらの差は確かにあると思つが、なにが決定的な起因なのかはわからない。

苦戦しているフィカソトリアは、以前に見せたぎらつきを放ち始めていた。エンジンがかかつてきただとでも言つのか。

結局のところ互角になりつつある戦局を左右したのは、僕が支配下に置いたはずのムロヅキだった。

「よくも私の自由を踏みにじつてくれたな」

怒りの気配を背後に感じ、振り向くとムロヅキが虫をまとわりつかせて立っていた。ぞつとする表情。カエルじゃない、人間だ。当たり前だけども。

僕の現実化が破られた？ 破られっぱなしだよ、もう。

「私自身で抵抗できたわけではありません。どんな魔力患者でも、虫の一匹一匹にいちいち力を行使できないと考えましてね。あらかじめ対応策を練つておいたというわけです」

ムロヅキは象が歩くように言った。よほど腹に据えかねているらしい。そりや、そうだよな。僕だったら半狂乱になる。

「あなたがたを利用できると思っていたのが間違いだつたようですね。

抹殺しなければならなかつた。最初から「

「ぶうんと音がする。とつさに体を横へ飛ばし、見やると、数匹の蜂が僕へ針を向けていた。あわてて消失を願う。が、いくら消しても次から次へと現れた。

ここにいる全部を消す。

多少の浪費を覚悟して、僕は魔力を行使する範囲を広げようとした。想像の限り、僕は僕の都合のよい現実に作り変えようとする。じゅばり、と必要な効果音とともに、虫が溶けた。ムロジギの周囲もぽかりと空間が空く。

これで、どうだ。

「無駄ですね。あなたと私なら、私が勝つ。虫を甘く見ていくようですから」

地面が盛り上がり、拳の大きさの穴がぼこりと開いた。やばい。僕はそこをふむぐ。と、またぶうんと音がした。ぶうん、ぶうん、蜂が飛ぶ。

くそつ。闇雲に僕は逃げた。魔力を湯水のように使うが、冷静さを失い、とてもじゃないがうまいやり方はできていなかつた。

「アガイ！」

「フイカ？」

声が聞こえて、僕はいつの間にか閉じていた目を開けた。また現実逃避をしようとしていたらしい。

虫を叩き落としたフイカソトリアが僕の前にいたが、新しく出現した蜂も同時に視界に入っている。フイカソトリアの首に、針を向かわせている。僕は、あ、と思った。それ以上思うことができなかつた。思考の速度より、蜂の針が刺さるほうが速かつた。

皮膚に針がめり込む様が、ゆっくり見えた。

僕は蜂を素手で殺した。精神より肉体のほうが動いた。危険については考えなかつた。醤油さしを取ると同時に、いちいち醤油さしを取り、なんて考えないだろう？

フイカソトリアはなんら変わることろがないように見え、すぐに

洗脳子の相手に戻ったが、あっけなく蹴つ飛ばされた。どしゃり、僕のところへとんぼ返り。

びくん、びくん、と体を痙攣させているフィカソトリアに、僕は声をかけようとした。なにを？ がんばれ、とか、負けるな、だろうか。馬鹿馬鹿しい。言葉はない。そのとき、僕は赤ん坊になつていたんだ。だからお腹をすかせたから泣き叫ぶように、発声しようとしただけだ。これも退化つて呼ぶのかな。人は、自身を神にしている無垢から逃れるために、大人になるのだろうか。だけど人は信仰する。逃れたものを信じ奉る。馬鹿なのか？ 愚かなのか？ 僕は信仰したくないから、赤子になつたのか。僕が一番愚かなのか。なのか、なのか。

フィカソトリアがだんだん動かなくなつてくる。指先がかくかく忙しなかつたのが、かくん、かくん、と余裕のある指揮者になつている。僕を吸つた唇が、息よりも浅く濡れている。太ももが眠気を表すように擦られる。まさか、本当に蜂ごとに？ ようやつと疑問を抱いた。

でも、確かに、死にかけているじゃないか。

僕らが生きている証明はどこで為される。心臓を、呼吸を、細胞の動きを止めれば、死ねるというなら、死んでもいい。もうなんだか疲れだし、死んでもいい。違うと言つている僕がいる。彼にとつて、彼女は死ぬべきでないらしい。昔、死ぬべきだと言つていたやつは、今は沈黙している。恐れていたやつは、動かないなら、大したことないな、と嗤つている。

僕は、僕は、どこまでいつても僕のことしか考えていない。自分本位で、保己的で、他人を自分の一パートとしか受け止められない。だからでもあるのか、彼女を失いそうになつていると、僕も臓器の一つが口から吐き出されるようだつた。

飛び回つている蜂が、くしゃりと丸まつて崩れる。僕がそう思つたから。ムロヅキはカエルになつて、ゲロゲロ鳴いている。どうしてもつと早くにそうしなかつたのだろう。ずっとあいつはカエルだ

つたのに、どうして本当の姿にしてやらなかつたのだらう。ちゃんと呪いをかけてやらなくつちや、いけなかつたのに。洗脳子は全員機能を停止させて、やさしく地面に置いてやつた。僕が振り絞つた大人のふりだつた。

魔が僕を取り込むのがわかる。僕が魔をおいしくいただくのもわかる。消費された分の魔力を空気中から呼ぶ。洗脳子から吸収する。今まで以上の量を手に入れる方法も、用意できるはずだ。なんだ、簡単だな。可能な限りの精神的工夫をやれば、いいわけだよ。

消えかけの灯火が見えるようなフィカソトリアを、僕はお姫様だつこした。非力な腕力を魔力で補助する。僕はなんでも魔力に頼る。戦争が銃に頼るように。機械が電気に頼るように。命が命に頼るようにな。

なんで僕はこいつが嫌いなんだつて、と今更思った。理由なんて作るつもりはなかつたが、礼儀として一回は思つておかなければならぬような気がした。礼儀と眠りと飯と性と、それくらいあれば贅沢だ。

はあ。息を吐ぐ。さあ、禁忌でも犯そつかな。倫理の下着をはぎ取つてさ、不可逆性の神秘を力でねじ伏せて、唾液を垂らしてやつた善悪とディープキス、規律の皮ごと乳房にむしやぶりついて、人間の絶対をレイプするんだ。

僕は言つだらう。そら、言つぞ。言わないと、神様はわかつちゃくれないんだ。

だから言つ。

フィカ、生きてしまえ。

僕は現実を無視した現実で、神様に寄りかかつて天上から落として地上にぶつかる寸前に糸で吊り上げてひとりしり劇を演じさせた。僕の言葉は現実化する。なんて気持ちが悪いんだろう。死ね、とか、馬鹿、とかと同じだ。言葉は現実と人間を傷つける。

目を開くフィカソトリア。あれ、閉じていたのかい。おまえも現実逃避するときがあるんだね。

「アガイ？」

「そうとも、アガイだよ。

僕は笑つてみた。なかなかうまくやれたと思つ。

「なに笑つて、るの」

おまえが死んだからさ、楽しくつて笑つちやつたんだ。

「ひどい」

彼女も笑つた。不思議だつた。人が死んで蘇つただけなのに、なんでこんなに晴れやかで、面白いんだろう。僕はひどいな。ひどくてひどくて、誰の言つことでも聞きたくなくなつたよ。自分の言葉でさえも。

フィカソトリアを降ろそうとしたら、しがみつかれた。いやいやと首を振られる。おい、新婚ごっこをやつているんじゃないんだよ。頭突きを喰らわせて、無理やり立たせる。

「ふーむ、なにがどうなつているのかわからないな」

博士がようやく部外者の立ち位置から解放されて、言つた。

僕にだつてわからないさ。謎だよ、なぞなぞだよ、博士。

「そういう問題ではないが……まあ、いい。あの洗脳子を倒せたのだからな」

「死んではいよいよですね」

黒服の報告に、殺してないもん、と僕が答える。

「きみがどうやら神話性現実化を使いこなしているらしいのは、なんとかわかった。もしや、すでに戦争を終結へ導けるのではないかね」

「うーん、まあ、できるね。

「できるのか。わたしの計算はなんの役にも立たなかつたな。なにせ、一人がすべてを解決してしまえるのだから。本当に八〇〇〇倍になるとは、予測していなかつたよ。さて、ではさっそく取りかかるてくれるかな。わたしはそろそろ死期が近いような気がしてきたよ。ここ最近は騒がしすぎてな」

空を見た。僕はなにかあると空を見たくなるようだ。なにもない

ようでなにがあるから。だから大切なものを見た氣になるんだ。
芸術と似てるかな。

僕は宣言することにした。

できるけど、やらないよ。

「なに？」

肩をすくませる。気取った動作だが、今ならやれた。

戦争は終わらせない。僕はなにもしない。それが選択だ。

悪魔がやつてくる

「どうこいつもりだね。戦争が続くことで喜ばしい事態が訪れるとも思えないがね」

博士は怪訝そうに言った。

喜びなんていらなさ。ほしののは、不自由じゃないって感覚だ。どうせ、戦争を終わらせたいってやつが多いんだけど、付きやつてやる義理もないかなって。いや義理があつてもいやだつたらやらなければどね。うん、僕はいやになつたんだ。そういうことだな。

「納得したいわけじゃないんだが、もつと説明を求めてもいいかね？」

納得したいわけじゃないのに？

「説明とは、必ずしも納得をせるものじゃないのだよ。相手を黙らせる圧迫なのだ。わたしを押し黙らせてくれないか」

わかるような気がするな、それ。済ませたいって感じ、とか。うーん、説明か。そうだね、まあ、大部分を創作することになる。なにせさつき思つたばかりだから。たとえば、海の波がざざざ、と僕の足を濡らすとする。すると僕は、流されるわけにはいかないなと決意するんだ。いくら波が強くても、僕はここにこなくちゃならない。踏ん張つて、どうにかこうにか耐えていると、いざれ波はひいていく。よっしゃ、とそれにこなることをやめて、砂浜を歩く。そうしたら今度は、じつちから波にむらわれてやろうかな、って氣になる。ひかれると、追いたくなる。押してダメなら引いてみる、といふ話は、そんな性質を利用してるんだろうけど、問題は自主的かどうかってことなんだろう。泳ぐのはきついし、そぶぞぶ濡れるのはつまらないから、いかだを作る。でも作っている途中で、生きるために水だの食料だのが必要だと思つて、海に出るのはやめるんだ。海は人の母と言つたが、母とはもう一緒にいるのが苦痛なんだ

な。塙つ辛くてさ。切つた木を放つて、僕は僕の道を探す。平地も森も坂も家も壁もあるだろう。道はどこにでもできるからね。すると僕はどこにも僕の道なんてないと気づく。じつから先は、粘れるかどうかさ。悪あがきだ。悪あがき。「こじだよ」「こ」と喚きたてるか、静かに主張するか。お節介なやつらはいるもので、あそこがきみの道だよ、とか言つてくるんだけど、全部間違つている。僕は間違いがわからないものだから、いちいち確かめる。でも、やっぱり違う。なんだよ、違うじゃねえか。僕は思う。じゃあ好き勝手やらせてもらいますよ、ってね。つまりそれだ。

「どれだ？」

「言つてることの、半分も、わからない理解を示さない博士とフイカソトリアに、僕はうなづく。その反応は、僕が生まれてからこのかた抱いてきたものだ。人の言動つてやつに対する素直さだ。

僕もわからない。口が動くままに言つてているから。とにかく博士を押さないと、と思つてね。

「せつかくの弁舌だが、どうも一難去つてまた一難らしいぞ」ガラハロンドルが会話に参加した。存在感を消すのがうまいやつだ。この考え方つて、いじめっこかな？

ザ、ザ、ザ。

ノイズのように周りを取り囲まれているのがわかる。えらく遠くから円を作つて、僕らをつかがつてゐる。隠れているつもりなのかもしれないが、ちらりちらりと姿が見えた。

「異方者か？」

田を細めた博士は、当てずっぽうか計算を図つてくる。

そうみたいだ。僕はあっさりと答えた。もちろん、なにもかもわかるわけではないが、多少の距離や迷彩は僕にとつて薄皮になつていた。

「彼らはこの戦争で最も弱い。そして最もこの戦争を望んでいる勢力だ。正直なんだよ。敵対的民衆とでも呼ぼうか、認められないも

のは認められない、認められるまでは我々は戦う、ところのスタンスなのだ」

「そういうたとこには革命者と似てるが、ぼくらは彼らからしたら異分子以外の何物でもないだろ？」「

僕にはよくわからないけど、たぶん、そっぽを向いたたくさんの人々なんだって思うよ。の人たちは。

「片付け、ちやう？」

さつく物騒にフイカソトリアは態勢をとる。こいつは暴力に頼りつきりだ。

「洗脳子に比べれば楽だろ？……ん、絶対共同体よ、どうした？」異常に気づいたガラハロンドルは、黒服に近づく。黒服は壊れかけた口ボットのように関節を軋ませている。

「ま、ま、マテ。」レは……」

口調まで口ボットじみて、とうとうがくんと膝をついた。僕と博士は原因の一端に心当たりを感じた。

「まずいぞ！」

注意を発する博士は間に合わず、ガラハロンドルは黒服から飛び出した血液悪魔に上半身を覆われる。

「むぐっ！」

僕は血液悪魔を蒸発させてガラハロンドルを助ける。続いて黒服を止めようとするが、黒服の本体とも呼べる体は、なにもしなくても止まっていた。ただ、普段過ごしているうちに彼らには感じなかつた魔力の波動を肌に受けれる。

博士、聞かなくてもわかるにはわかるんだけど、黒服は悪魔のかい？」

「うむ。悪魔の存在技術を使つている。悪魔は全として現れ、個とされるのは端末としての意味でしかない。絶対共同体は本体と端末が同じだが、根本的なところは悪魔と変わらない」

あいつ、今は悪魔に操られているな。

「まさか、まさかそんなことが可能だとはな。私のミスだ。驕りだ。

技術だけであれば、悪魔の存在とは切り離して運用できると確信して生み出したのだが……」

「後悔するのは、暇なときじゃないらしい。」

迫りつつある異方者と、悪魔に乗っ取られつつある黒服。黒服が敵対したとしても、全部を相手にするのは難しくなかつた。

「だけど、どうも怪しいな、と思つ。僕が容易くこの事態を乗り越えられないような障害が発生する、に賭けてもいい。自分がうまくいかないことに賭けるつてのも、妙な話だ。」

黒服がびしり、と立ち上がつた。

「いけません。どうして戦争を終わらせてくれないのでしょう。いえ、それは別にいいのですが、あなたの考えが我々にとつて危険になりつつあるのを感じました。いけません。大人しくしていられないようですから、いけません」

悪魔の声を黒服は伝えていた。人型スピーカーだ。まぎれもなくあの、僕を勝手に呼びだした悪魔だつた。

「いけませんいけませんって、禁止されると余計やりたくないのをわからないのか。悪魔の言うことに従うなんていやだし、僕がそういうことを信じるなんて、悪魔らしくないじゃないか。」

黒服、いや悪魔はにこりと笑つと、完全にコントロールを得たとばかりに体をナイフで刻み、血の使い魔をあちこちから噴出させた。「我々らしいものなんてないです。信じてもいません。ただ我々にも感情があるだけです。手を上げている者を指し、なにも答えなかつた場合、答えないのですか、と問つてもかまわないでしょう。あなたがどうするのか、我々にはわからない。それほどの力を持つたのですから。わからないなら、こちから出向く手間をかけなくては」

「できの悪い生徒に指導するつて?」

「もはやあなたは我々と同等になりつつある。魔神です。神の病を人が御しようという。喰らおうという。人こそ魔になる。それ自体は、別段いい。しかし、世界の理に革命を持ち込まれるのは困ります」

す

言つている意味はわからないが、どうも僕は楽しくなってきたよ。

あんたを困らせられてな。

ダン！ と異方者から火器による攻撃が始まった。僕は博士をシールドし、穴を掘つて入れる。

「かたじけない、と言つておくれよ」

後で飯をおごつてくれ。

黒服が駆ける。洗脳子のようににはいかないだろう、と見積もるが、割りあいあつさり黒服は僕の現実化で封じ込めることができた。さすがに消滅させるのはなんなので、停止を維持する。

「その判断は間違いです」

なんだと？

黒服は停止した部分としていない部分に分かれた。というか、だんだんと黒服が黒服でなくなる。溶けるでもなく砂になるでもなく、一番近いのは靄で、单なる黒になつた。どういった働きかけをしていいのか、判断しかねる。

うつ。

僕の足首を靄が掴んだ。掴んだ？ 靄がもやもやしているだけにしか見えないが、感触としては掴まれている。

ガラハロンドルが散らばつた靄に銃を撃つた。意味がない。悪魔が悪魔たる存在を示して、僕らに牙をむいていた。

死んでも恨むなよ。

僕は靄を消しにかかる。少しは残そうかとも思ったが、それでは無駄な気がした。気がするだけで殺そうとして、申し訳ないけど。

全てを消し、確認する。感覚を総動員。

「ダメです。殺せはしますが、いくらでも我々は現れる」

靄はなにもないところから現れた。まるで物質そのものみたいなやつだ。完全な無がない以上、存在できるとでも言つような。

だがまあ、どうせ弱点があるだろう、と僕は高をくくつた。抜け道が。穴が。それがこの世つてもんじやないかい？

悪魔不明

だいたい、なんでやつは黒服を乗っ取って仕掛けてきているんだ？あの部屋にいた悪魔を思い浮かべる。サンタクロースみたいなあいつが、直々にくればいいじゃないか。それに僕がやられたように、自由に移動させられるなら、一人ずつ相手にしたほうが楽だ。なんか、くさいな。

異方者からの攻撃は音を減らしつつある。フィカソトリアが暴れているのだろう。一度死んでも相変わらずだ。あるいは彼女なら元黒服現靄を簡単に倒してしまうのかもしれない。まあ、頼るのはしやくだから呼ばないけど。

血の使い魔がガラハロンンドルの背後から襲い掛かるのを助ける。

「すまん」

気をつける。僕の注意は散漫だから、いつでも便利にやれはしない。

ガラハロンンドルは目をぎらつかせていた。自分から身を危険にさらしている？ 革命の因子が活性化するかどうか、つてことなんだろうが、難しそうだ。

靄はいつまでもあり続けたが、僕がいつまでも消し去れるかは怪しい。魔力はあまり心配いらないが、なにせ面倒でたまらない。こちとら一応人間だが、相手は悪魔だ。疲れ知らずなら持久戦で勝てるわけがない。

ま、あっちもなかなか勝てそうにないようだね。

靄はあちこちから現れて惑わしてくるが、だからといって傷を負わせてはこない。体内に侵入されると厄介であると予測は立つが、それだけだ。

膠着状態つてやなんだよなあ。どうじょうもなくついて。

「同感です。しかし、膠着はしません。長引いていますか」

余裕あるなあ。手段を残してるので。

僕は早急に片をつけないといけない焦りを抱いた。いつしている間にも、事態は厄介さを増している可能性がある。

穴は、抜け道はどこだ。黒服とサンタクロースの違いは。閃きといふほどではないが、思い浮かぶものはある。今こつして相対している黒服は殺せない。サンタクロース悪魔は殺しても蘇った。結果としてやつは生きるが、殺せるか殺せないか、その違いだ。

死ねない理由がある？ 死にたくないのは、大抵のやつがそうだ。それとも、そもそも死んで蘇つたのは嘘で、悪魔だって死んだら終わりなのか。

形態の違い。靄と人型。これは違이が大きすぎて判断ができない。あーもう、わからん。

一いつときは、悪いほうにでもなんでも、転がればいいのだ。とにかく同じ状況が続くのはまずい。ただ痩せ衰えていくだけだから。

靄はやはり積極的に仕掛けてはこず、ふらりふらりと雪のようこ舞うばかりだ。

「魔力パターンは二〇万五七八です」

あ？ なんだい唐突に。

「なぜ、二〇万五七八も種類があるので、あなたはこれまで都合よく魔力を得てこれたのでしょうか？」

運がよかつたんだろうな。

「いいえ、運が悪かったのです。我々に目をつけられたのですから」そういう自覚、もっと有効に使ってくれ。

とうとう異方者を一掃したフィカソトリアが戻ってきた。軽やかに、スキップでもするかのように跳ねている。走ったほうが速いだろうに、水切りみたいな感じだ。

「異方者は片付きましたか。おや、いけません。殺してはいけないようです。そこまで手間を省いてはくれませんかな？」

ぼこぼこ、と不快な響きがした。異方者がいるであろう範囲、そ

れなりに離れてはいたが、明らかな異常が見えた。がああ、と悲鳴。人が肉塊になつて膨れ上がつてゐる。

「利用、された？」

察したフィカソトリアが若干の怒りを含ませて言った。
「どうやら、そのようだな。これは怒るべきだぞ、フィカ。僕は適当に煽つてから、次にやつてくる危機に備えた。

肉塊から生まれるものがあつた。悪魔だ。十悪魔十色に、団子をひねり出すようにぼこぼこ生まつてくる。子だくさんだね、どうも。「多重なのです。あなたは様々な意味において、多重なのです。二〇万五七八に匹敵するほどに」

そんないつぱいかい。わざわざ話しかけてくる悪魔に、僕は意図を感じて、警戒する。

「だからこそ利用したかったのですが、残念です」「なにがしたいのかよくわからないんだよ、おまえらは。

僕は呆れつつ、悪魔の対処にかかる。いつだがフィカソトリアが相手にした悪魔とは、質が異なつていた。インフレ起きてないか。生まれてくる悪魔に神話性現実化は十分に効くが、肉塊そのものへの干渉は容易ではなかつた。僕の意思が、壁に阻まれているような感じだ。

フィカソトリアが肉塊に蹴りを喰らわせたが、彼女の力をもつても、肉塊は破壊できなかつた。

続々と現れる悪魔をパズルみたいにいちいち消していると、ふいに眠気が僕に訪れた。嘘だろ？ なんでこんなときには。ここはベッドじやないぞ。消灯時間にもまだ早い。

「ようやくですか。神話性現実化は、意思をすり減らします。魔力で誤魔化していたようですが、回復させるために、眠りを必要とする段階にまできたようです」

くそ。聞いてないぞ。誰も言わないから。

がくん、と落ちそうになる意識を奮い立たせる。指を噛んだ。太ももを叩いた。髪をかきむしった。まだ眠い。

「油断です」

靄が僕の目の前にあつた。しまつた、と思つ前に、靄に口内への侵入を許す。

「あなたを殺すことは簡単にできる。しかし、貴重な人材を失いたくはありません」

僕の喉が勝手にファイ力を呼んだ。

「なに、アガイ」

銃声が鳴つた。胸に痛みをおぼえる。正体を探すと、胸から血がどくどくと染み出していた。おいおい、心臓があるあたりじゃないか。

「な……」

ガラハロンドルが呆然とつぶやいた。彼の腕は血の使い魔によつて固定され、靄は指先を操つていた。瞬発力があつたのだろう。彼はわけがわからないといった様子だった。

痛みは熱さになり、熱さは冷たさになつて、僕は倒れた。殺してんじゃねえかよ。

「死にません。あなたは死ない」

銃で心臓撃たれて死ななかつたら、そりやどつかおかしいよ。死が僕を正常だとするのか、僕の正常が死を体験させてくれるのか。

そうだ、治れと念じれば、治るはずだ。まだ意識はある。意思はある。僕の病は、僕を生かす。

フィカソトリアが僕を仰向けにした。うつぶせになつていたこともわからなかつた。うつすらと視界に彼女の姿が映る。僕は彼女に恐怖を抱いた自分を思い出す。死にたいと願つた、あのとき。

唇に触れるもの。彼女の唇。なんだつてこんな状態でキスをするんだ。僕はむかついた。お別れだとでも言うつもりか。ふざけるなどすんと突き飛ばすつもりだったが、実際はこすつと擦れるくらいに腕を動かした。

口を開く。そうだ、はつきりと。

「僕は、生きる」

それは最後の希望だった。無根拠の果てから召喚した、命。なんだつて銃に撃たれたらくらいでこんな気持ちにならなくちゃいけないんだい。ロマンチックの欠片もありやしない。キスはむかつくし、フィカソトリアだし、胸はなかなか治らないし。

悪魔の望み通り死なないのがしゃくなので、死んでやうつかとも思つたが、それはそれで問題だ。もつともつと迷惑をかけてやらないと気が済まない。

ぎりっと奥歯を噛みしめ、僕はゆつたり立ち上がる。

「大丈夫？」

フィカソトリアが心配そうに言つた。

なにキスなんかしてんだよ。

「嫌悪も生命力になるかと思つて」

……わかってるな、おまえ。

『ごほ、ごほ。体内にいる靄を、咳とともに浄化させる。さりに肉塊と悪魔を消滅させるに努めた。ようするに僕は、追いつめられると集中力が出るのだ。壁のあつた肉塊は、今は膜くらいに感じる。

あの悪魔め。なにがやりたかったんだ。

「一つは、これです」

声はフィカソトリアから聞こえた。ああ、キスのときに移つたのね。うんざりと首を振る。そいつは操れるような女じゃないぞ。

「操る必要などありません。一瞬借りられればそれでいい」

彼女は、いや悪魔は、恐るべき速度で僕の体からなにかを抜き取つた。あるいは、僕に抜き取られたという感触を『えた。なにを……。

「革命の因子は、我々の持つことができない発明です。なるほど素晴らしい。世界干渉もできるのか。まさしく革命」

ぶるっとフィカソトリアが震え、悪魔の気配は消えた。

「むかつくやつ」

彼女は地団駄を踏んだ。侵入を許したのが腹に据えかねるらしい。
おまえがキスなんかするからだよ。

ぞくりと、悪寒が走った。

僕はなにかを奪われた。いや、押しつけられたのか？

毛穴が全部内側から解放されて、嫌悪に襲われた。

「本当に革命を起こされではたまらない。偽りの更新のもとで騒がしくもむなしく終わつていけばよかつたのです。我々の発明した魔力と同等の因子など、よくも作ってくれました」「

悪魔の気配はない。にもかかわらず、声はした。

声は、僕が発していた。

愕然と、僕は僕を意識内で見つめる。

僕からフィカソトリア、フィカソトリアから僕へ、と移動したのか？

どうもおかしい。僕は誤りなく体内から露を追い出したはずだ。

「なるほど、あなたは本當になにもしないつもりのようだ。いけません、ここであなたに魔力を存分に使ってもらわないと、他のあなたが暴れるのです」

他の僕、だと。

僕は何人か僕を持つていて、そいつらは魔力をどうしようが暴れるときは暴れる。

「あなたは多重なのです。世界において、一〇〇万五七八くらいに。それよりは少ないでしょうが」

いっぱいいるなあ。

「多くの世界であなたは共有され、多重になっている。いえ、多重になったから、共有されることになつたのでしょうか。それは我々に近い性質です」

わかるようにしゃべれよ。

「説明させていただけるのであれば、します

そういう隙があるかな。

気づけばフイカソトリアが僕のみぞおちに拳を埋め込んでいた。おそらく、手加減されている。でなければ僕は体を貫かれていただろつ。

「ぐつ」

電撃がはらわたを喰い散らかすような痛み。悪魔と僕は一緒に仲良くうめいた。冗談じゃない。死ぬぞ。

「アガイ、出して」

喉を詰まらせたわけじゃないんだよ。

僕は文句を言えないことが非常に不満だった。おい悪魔、代わりに言えよ。

「フイカソトリア、あなたの力によつてアガイとわたくしは一体化しております。そのような打撃は我々に平等な苦痛をもたらすだけなので、おやめください」

丁寧に悪魔は「やめて」と言つた。

「あたしの、力？」

「革命者たる力。真なる意味での、世界を変える力です。法則を書き換えるほどに」

そういうの、教えちゃつてもいいんだ?

「わたくしは我々の中でも、語る役割を主に担います。悪魔は沈黙しますが、秘密は持ちません」

信用できない台詞だ。

「人間は信用に依存しすぎです。疑わなければ済む話を」

そうかもな。でも、悪魔には関係のないことだ。

僕は自身のコントロールを取り戻そうとした。そこではたと気づく。僕は乗つ取られているわけではない。一体化しているのだ。僕は僕を操れたり、同時に悪魔は僕だった。

「我々は同調と呼んでいます。人間に對して使えるものではなかつたのですが、革命の因子が可能にしました」

気持ちの悪いことを……。

別々であるのに、同じ。怒りと悲しみが両立するよつて、僕は魔とともにいた。

「あたしがやつたのなら、じゃあ、元に戻すのも、できるね」

フィカソトリアは手首を回し、ショットジャブを放った。ビームでいつても暴力だ。殴つて分離を図るつもりか。胴体と首が分離しそうだ。

「できるものなら。その前にわたくしがあなたを制限します」

制限？

「革命者に存在消滅の現実化を押しつけるのは難しい。しかし、因子を抑え込むことはできます」

悪魔が神話性を自らのものにして、現実化を為そうとしているのを感じる。一体化している僕には、悪魔のことがよくわかつた。わかり始めた。悪魔は戸惑っている。こいつに、こいつらにとつて、神話性現実化病患者はちょっとばかり似ている兄弟のようなものだ。特に僕は。源流を同じとし、オリジナリティで言えば悪魔のほうがより本元に近い。魔力という要素を僕らはおいしくいただいている。必ずしも魔力患者が劣化コピーではないが、悪魔のほうが純度が高いと呼ぶに相応しかつた。でも、末端のほうでは、現実らしい現実のほうでは、僕らのほうがうまく立ち回れる。僕らのほうが適応している。進化している。悪魔は不健康。神の位置。悪魔は歯がゆい。なぜ我々こそが選択し、活動し、謳歌していないのかと。なぜ我々は無知たれないのかと。

現実化をモノにし出した悪魔の昂揚が伝わってくる。新しい玩具を手に入れた子供、大人。どちらも持ち得ることへの感謝。悪魔から逸脱。

ああ、僕らは僕らであろうとして、そして僕らであることから脱出しようとする。

「これが！」

悪魔が叫んだ。

それだ。

「これが、これが我々に味わえない、味わえなかつた味なのか！」

甘くとろける美しき醜さ、現実。

悪魔は感動にむせび泣いていた。

「このちっぽけな、落書きみたいな力！ 我々と革命者の膝元にも及ばない、幼児！ 卑小かつ矮小。なんて、くだらないんだ……」

現実化は為される。フィカソトリアの革命者たる力を、抑え込む。彼女の身体性ではなく、革命性に絞れば、この現実化は成功する確率は高かつた。

タン。

何度も聞いてきた銃声がやけにみみづちく響いて、僕は死んだ。

僕は体から離れて、空中から事態を見た。幽靈にでもなつたようだ。

「というより、悪魔です」

と、悪魔が話しかけてくる。もうずっと悪魔悪魔して疲れたよ。お祓いしてもらおうかな。

「我々と一体化していたのは幸いでした。いえ、一体化していたから殺されたので、不幸ですか」

銃を構えたガラハロンドルが、僕の死体に歩み寄っていた。あの野郎、なに殺してくれてるんだよ。あと、おまえ、僕は死なないって言ったのに。嘘つき。

「申し訳ありません。興奮していたもので、気づけませんでした。やはり一体化していたために、あなたも反応できなかつたようで。我々が殺したようなものです」

僕の死体は見事にまた心臓を撃ち抜かれていた。神話性現実化を行使している隙にやられて、治す前に死んでしまつたようだ。冴えないな、どうも。

死体に歩み寄ってきた犯人ガラハロンドルは、真っ青な顔でフィカソトリアに声をかけていた。

「きみほどの革命の因子を、むざむざ失うわけにはいかない

「もう、失った」

「ぼつりとフイカソトリアはつぶやいた。

「なんだって？ 遅かつたというのか……？ きみの想い人を殺してしまった！」

遅かろうが早かろうが、僕が死ぬのは変わらないね。

「死ない。アガイは死ない」

死んでます。死んでますよ。

蘇つて頭を叩きたい気持ちでいっぱいだった。しかし、このまま死んでいれば、わずらわしくもないのだろうか。あの世まで追つきそうだけどな、彼女は。

「人間の意味でも我々の意味でもあなたは死んでいますが、生き返ることは可能です」

さらりと言つてくる魔女に、僕は、どうしようかな、と本気で悩んだ。

フイカソトリアは悲しみも怒りも浮かべてはいなかつた。淡々と死体を眺めていた。やがてどんどん冷たくなつてゐるであろう僕の唇に自らの唇を重ねて、またじつと見た。お姫様のキスで蘇るとでも思ったのかもしれない。もしかして、本当はさつきも。

おどぎ話はおどぎ話。うまくいくときもある。今回はうまくいかない。僕は王子様じやない。メルヘン的魔法使いはいない。魔法はあつてもいいし、実際僕も魔法使いのようなものだと考えられなくはないが、すべてを解決できはしない。したくもない。させたくない。ない。ない、ない、ない。

「どうしますか。肉体を失つてから再構成するのには手間がかかりますか」

あんたは僕が生き返つてもいいのか。

「ええ。彼女が別世界へ影響を及ぼせないようにしましたから。むしろあなたには神話性現実化病を進行させて、魔力を使ってもらいたいのです」

わからないな。わかるほうがおかしいのかな。

「この世はひとつでも、バランスを取ろうとします。一つの世界だけではなく、たくさんの世界の中で。我々は愚かしく世界を終わらせたいのです。あなたは、多くの世界に存在し、つながっています。つながっていますが、別世界に直接個体で影響はできません。」を二に増やして介入はできない。」の意味が深くなること沒できるせよ

よつするに?

「要するのは難しい。省略してまとめると、こことは別にまた世界があつて、我々はそういう一つ一つの世界を終わらせようとしているのですが、あなたが活躍してくれると、それがやりやすくなるのです。」

世界を終わらせる手伝いをしていることか。

僕はどうでもいい気分で、死体をお姫様抱っこし始めたフィカソトリア。「どういった嫌がらせができるかを考えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1536w/>

魔神患者の傷痕

2011年10月10日01時51分発行